

THE LIFE AND
LABORS OF
ELLEN G. WHITE

ホワイト夫人 略伝



エレン・G・ホワイト

The
LIFE and LABORS
OF
ELLEN G. WHITE

ホワイト夫人略伝

序

本書は約1万3千ページにわたるE・G・ホワイト夫人の全ての著述中より、特に忙しい読者のために編集した選集である。

ホワイト夫人は70年以上の長期間にわたり、一貫して福音事業のために苦心した近代における唯一の信仰的存在である。彼女の活動は主としてアメリカ合衆国東部のメイン州より開始され、大平洋岸のカリフォルニア州にて終わっている。合衆国のあらゆる州において彼女の宗教上あるいは衛生改革上の講演に接しなかったところはなく、また彼女は約2年間、イギリス、フランス、スイス、ドイツ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの各地を訪れ、オーストラリア、ニュージーランド、タスマニアには8年間滞在した。

彼女の若い頃の物語と、彼女が少女時代において早くも救霊のために力を尽くした経験については、本書中に彼女自身の飾らない文章で記述されているが、これは必ずや読者に深い興味を抱かせるであろう。

彼女が馬車あるいは馬に乗ってニューイングランド州を旅していた時にも、ニューヨーク州中部の川を船で航行していた時にも、あるいはテキサス、オクラホマ方面において移住民の馬車に同乗して旅行した時にも、あるいは観光列車に同車してカリフォルニア州の沿岸各地をまわった時にも、あるいは大西洋や大平洋を大型船にて横断した時にも、彼女は常に機会がある度に生命の御言葉を人々に語った。

彼女は福音宣伝者としてだけではなく、寄稿家として様々な宗教雑誌に原稿を寄せた。その他にも多くの著書がある。彼女の著述中でも特に、各時代にわたるキリスト対サタンの大争闘を記述した五部作『争闘時代叢書』はその代表的なものであろう。また彼女の著書『キリストへの道』は、今日50ヶ国語以上に翻訳されている。彼女の数ある著述の全巻を通じて感じら

れるのは純真・敬虔そのものであり、その教えるところは私たちに道徳的向上を促してやまない。これらの著述は、サタンの策略を指摘すると共に、彼の設ける罠についても警戒している。また彼女の著述は人をキリストに導くと共に、聖書の教えを尊びこれを高く掲げている。

かねてより彼女は、彼女の数多き著書中より編集した選集を小冊子として発行し、全世界のいたる所において魂を救う真理を宣べ伝えることを熱望したが、本書の編纂がある程度の成就を見た時、彼女は非常に喜びを感じた。しかし彼女は編纂の完了を見ずに死んだ。

今や本書の邦訳を刊行するにあたり、願わくば本書が、これを手にする多くの者を励まし、彼らの信仰生活がいつそう確固で高潔なものとなるならば、編者の喜びであり、またこれは本書を送り出すにあたっての私たちの祈りでもある。

編集出版委員

目次

第 1 卷	1
第 1 章 幼年時代	1
第 2 章 靈的リバイバル	5
第 3 章 再臨使命の布告	10
第 4 章 組合における経験	22
第 5 章 再臨使命を宣べ伝える	26
第 6 章 主に会う準備	31
第 7 章 聖所問題に関する光	39
第 8 章 再臨運動を固くする幻	47
第 9 章 安息日と天上の聖所	52
第 10 章 天上の聖所	54
第 11 章 再臨運動とその与える教訓	58
第 12 章 新天地の幻	64
第 13 章 他世界を訪問する	67
第 2 卷	69
第 14 章 公生涯に入る	69
第 15 章 結婚後の伝道	74
第 16 章 貧困との戦い	77
第 17 章 喜ばしい摂理	84
第 18 章 出版事業の開始	87
第 19 章 出版・印刷所の設立	91
第 20 章 ミシガンに移る	97
第 21 章 二つの道	100
第 22 章 二つの冠	104
第 23 章 狭い道の旅	110
第 24 章 争闘の光景	113
第 25 章 大いなる報賞	118
付 録	121
第 1 章 預言の賜物	121
第 2 章 御言による試験	128

第 1 卷

第 1 章 幼年時代

エレン・グールド・ハーモンは1827年11月26日にアメリカ合衆国メイン州カンバーランド郡ゴーハムに生まれた。彼女が生まれて2、3年後に一家はポートランドに移住し、彼女は幼年時代の大部分をこの地で送った。父のロバート・ハーモンは、評判も良く、また非常に熱心で敬虔なクリスチャンであった。母もまた信仰深いクリスチャンで、温厚で親切な、貧しい者や病人の救済事業などは骨身惜しまず働くという人であった。夫妻ともメソジスト・エписコパル教会員で、罪人を悔改めに導き、神の御事業を確立するために奮闘する努力家であった。こうした関係を持つ事は40年の長きに及び、その間に子供たちも8人全員がみな入信して、キリストの群に加えられる喜びを味わった。

彼らは貧しい境遇にあったが、勤勉で独立精神に富み、いわゆるニューイングランド州初代の住民たちの特徴である、神を敬う点を幼い頃からしっかりと植えつけていたので、子供たちにもあるいは言葉をもって、あるいは実行によって世の偉大な働き人の多くの品性となっている、高潔で熱心な性質をよくよく教えこんだ。

両親とも非常に強健な人で、したがって子供たちも強健であり、また活動的で堅固な性格を持っていた。特に母親の方には指導者的手腕を多く見る事ができた。

エレンは頭脳・肉体ともにその発達が実に目覚ましい子供であった。幼少の頃から勉強が好きで、物覚えが早かった。快活

な性格で社交性に富み、気丈・勇敢・忍耐強い子供であった。両親がこの子供に特に目をつけ、将来に望みをかけていたのは決して不思議ではない。

大 災 難

それは遊びざかりの9歳のときの事であった。彼女を待っていたはずの有望な前途が突然消えてしまった。小さな学友の1人がちょっとした事から腹をたて、石を投げたのが彼女に当たって鼻の骨を折ってしまった。そのケガは一生にわたって彼女の容貌を傷つけたばかりではなく、ほとんど瀕死の病に彼女を陥れた。彼女はそのために長年の間、苦痛から免れる事ができなかった。数週間は意識不明で、ようやくそれから覚めたと思うと、自分の不運をつくづく感じて失望せずにはいらなかった。

前途の見込みは絶たれる

彼女は幼少ではあったが、この不幸な事件のため、前途の見込みが絶たれてしまったように思われ、両親と同様にひどく失望を感じていた。いままでは気丈で独立心に富んでいた子供が、いつの間にか臆病で弱虫な元気のない子に変わった。しかし彼女の心にある美しい性質は依然として傷ついてはいなかったので、一般的な人生の快樂と生活そのものが奪われると気づいて、彼女の心はより高い天上の喜びにまで達していた。もともと感受性に富み、良心の知覚の鋭敏な彼女であったから、人生の試練に耐えて来世に入るのにふさわしい者となるには、どうしても神の恵みと慈悲の必要な事を今まで以上に認めるようになった。彼女は全人生を燃やし尽くすほどの信仰をイエスに対して抱き、いまだに年は若かったが、敬神・献身の徒として人にも

知られるようになった。この経験について、彼女は次のように記している。

この不幸を一生背負っていかなければならないと思うと、とても耐えられなかった。生きている事に少しも喜びを感じる事ができず、生きてるのが嫌になったが、だからといって死ぬのも恐ろしかった。隣人や知人たちも両親を訪ねては、同情の目で私を見て、私をこんなにした少女の父親を告訴したらいいだろうと勧める事がたびたびあった。しかし母は何事も穏便に収める事を望んで、もしもそれで私の健康と容貌がもとに戻るのであればともかく、そんな事は不可能なのだから、敵を作らない事が一番よいと言うのであった。

死に直面して

この頃から私は、死に対する備えを主に祈り求めるようになった。なぜなら教会の友人たちがわが家を訪ねるたびに母に向かい、死という事を私に語り聞かせたか否かを尋ねるのが常であった。これをこっそり聞いて私はとても感動し、クリスチャンになりたいという希望を起すとともに、熱心に罪のゆるしを祈り求めるようになったのであった。その結果、私は心に平安を感じ、またすべての人を愛せるようになった。すべての人が私のように罪をゆるされて、イエスを愛するにいたればよいと望むようになった。

通学を断念する

2年間、彼女はほとんど学校に出る事ができなかった。神経があまりにも大きな衝撃を受けたため、彼女はほとんど勉強する事も、学んだ事柄を記憶する事もできなくなってしまった。

教師の勧告に従い、両親は彼女の健康が回復するまでは学問を中止させる事に決めた。後にもう一度通学してみたけれども、やはり心身の衰弱が激しく、無理に続けると生命までも失う危険があった。それで彼女は仕方なく教育を受ける事を断念した。12歳以降、彼女は学校の門をくぐった事がない。この事は彼女の苦悩の中でも最も耐え難い事で、その苦しみについて記録している。

自分の弱さを自覚して、学問に対する希望を放棄する事は、若い私にとっては非常につらい苦闘であった。学者になりたい野心があっただけに、望みのなくなった事や、一生を病人として過ごさねばならない事を考えるたびに、私は自分の運命をあきらめきれず、この苦しみを私に下された神の摂理に対してつぶやきもした。そして病床にあった時に味わっていた救い主の愛に対する信頼の念も消えうせてしまった。世俗の楽しみに対する希望もなくなった上に、天も私に対してその戸を閉ざしているかのように感じられるのであった。

悲喜こもごも

今でもはっきり思い出す事ができるが、ある雪の夜の事であった。全天が輝き渡り、空が真っ赤に怒っているかのように、開いたり閉じたりしている様に見えた。そのうえ雲は血の様に見えた。近所の人々は非常に驚いていた。母が私をベッドより抱き起こして窓辺に連れていってくれた。これはイエスが再臨されるのだと思ったので、私は非常に嬉しかった。主に会いたいと熱望していた私は、全身が喜びにあふれ、手をたたいて喜んだ。もう自分の苦悩は終わるのだと思った。しかし、それは失望に終わった。その現象はやがて全天から消えて、翌朝になるといつものように太陽が昇っていた。

私の健康回復は遅々として進まなかった。しかもようやく友

達の遊びに加わる事ができるようになったかと思えば、私はその容貌によって多くの仲間から待遇上の差別を受けるといふ苦い経験を味わった。ちょうど私が不慮の災難にあった時に、父はジョージア州に行っていて不在であった。彼は帰宅して子供たちみんなを次々に抱き上げてから、私はどうしたかと尋ねた。おどおどと隅でしりごみしていた私を、母は指さした。しかし父親にさえ、これがわずか数ヶ月前に家に残していった、快活で健康な娘のエレンだとは信じられないようだった。この事は私の心を深く傷つけた。しかし私は心の痛みをおし隠し、快活な風を装う事に努めていた。

第2章 靈的リバイバル

1840年の3月、ウィリアム・ミラーがメイン州ポートランド市に来て、キリスト再臨に関する講演会を開催した。この講演は大きなセンセーションを巻き起こし、会場のカスコ街のクリスチャン・チャーチは聴衆で昼も夜も混雑した。集会には熱狂的な興奮は見られず、むしろ深刻な厳肅さが聴衆の心をとらえた。興味は市街にばかり沸き上がったのではなく、地方の人も毎日のように弁当を持参して集まり、朝から晩まで集会に出席していた。

私も友人を連れてこの集会に参加した。ミラー氏は何度も預言を解説したが、その的確さは聴衆の心を打たずにはおかなかった。彼はまた、預言的期間を詳細に説明し、その論点を確保する数多くの証拠を列挙した。それから備えのない者たちに力強く厳肅に訴え勧告すると、群衆はまるで魅了されたようであった。

また救い主を求め、近く起ころうとしている重大事件に備えるべき機会を、罪人に提供する特別集会が設けられた。恐怖と

罪を認める思いが全市民をとらえた。祈祷会も開かれ、一般の諸教派も信仰に目ざめた。それほどこれらの人々もみな、このキリスト再臨切迫の説教より少なからず影響を受けたのである。

罪人は前に出て来なさいと言われた時、何百の人がこの招きに応じた。私も人々とともに前に進み、哀願者の仲間に加わった。しかし心の中では、自分のような者はとうてい神の子と呼ばれるほどに価値ある者となる事はできないという思いがあった。これまでもキリストにある平安を求めた事は度々あったけれども、それを体験した事は一度もなかった。大きな悲しみが私の心にあった。このように私を悲しませるような事を、自分にしたのか少しも思い当たらなかつたが、自分は天国に入るほどの善人ではない、こんな事を期待するたびに自分には過ぎた事だという風に思えるのであった。

しかし私自身に対する信頼の欠如と、自分の気持ちなど誰にもわかってもらえないという思いのために、私は一度として友人の勧告や援助を求めようとはしなかつた。そして私は暗黒と絶望の中をあてもなくさまよっていたのであるが、私の心を理解できない友人たちは、誰も私が本当はどんな状態にあるかを全然知らなかつた。

信仰による義

翌年の夏、両親は私を連れてメイン州バクストンで開かれたメソジストの天幕修養会に出席し、私はここで熱心に主を求め、できる事なら罪の赦しを得たいと決心した。私の心は信じる者に来るところのキリスト者の希望と平安とを渴望していた。

私は1、「わたしは……王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないのなら、死にます」の言葉を基調とした説教を聞いて励まされるところが多かつた。説教者は罪より救われてキリストの赦しの愛に浸る事を渴望しながら、臆病と失敗したらとの心配から疑いを抜けだせず、希望と恐怖の間でさまよって

いる者たちの事に言及し、そのような人は神の前に全的に降伏し、ためらう事なしに神の恵みにすがってみるべきであると勧告した。あのアハシュエロス王が寛容を意味する笏をエステルに伸べたように、これらの人も必ず恵み深き救い主が恵みの笏を彼らに伸べようと心待ちしておられるのを発見するであろう、神の前で畏れている罪人に主が求められる事は、信仰の手を差し出して主の恵みの笏に触れる事の他にはない、ただ触れる事のみによって赦しと平安とが確保されるというのであった。

神の約束をつかんでみようと思ひもしないで、天来の恵みを受ける価値のある者になろうとあせる事は大きな過ちである。イエスのみが罪をきよめられるのである。私たちのとがを赦し得るのは彼の他にない。しかも彼は信仰をもって来る者に対しては、その懇願や祈りを聞き入れると約束しておられるのである。多くの者は神の恵みにあずかるには何か特別な努力をしなければならぬかのように漠然と考えているけれども、自己を信頼するのは全く無益である。ただ信仰によりイエスと結ばれる事によってのみ、罪人は希望ある神の子となり得るのであるというのであった。

この話は私を慰めるとともに、救われるために何をしなければならぬかを教えてくれるものであった。

今や私のゆくべき道がだんだん明らかになり、それとともに暗黒が次第に離れていった。私は熱心に罪の赦しを求めて、かつ全く神に自己をゆだねる事に努めた。しかし神から受け入れられた証拠だと自分の思っている霊的無我の状態を体験しなかったので、ときには大きな苦悩に陥る事があった。その経験なしに悔改めたとはどうしても信じられなかったのである。単純に信仰するという事実が教えられる事を、私はどれほど必要としていた事であろう。

重荷を軽くされる

同じく主を求める他の人たちとともに、祈りのためにひざま

ずいていた時の事であった。私はひたすら「イエスよ助けたまえ、我を救いたまえ、さもなくば私は滅びます。祈りが聞かれて罪が赦されるにいたるまで、私は決して願う事をやめません」と心で言っていた。この時ほど力なく、あわれな状態にある自分を感じた事はない。

ひざまずいて祈っていた時に突然、私の重荷が軽くなった。初めは驚いて苦悩の重荷を取り戻そうと試みた。自分のような者が喜んだり幸福にひたる権利は少しもないと思えたからである。しかしイエスは私のすぐそばにいるかのように思われた。在世していた当時の彼のもとに苦悩者たちが教えを求めて来たように、私もいっさいの悲しみや不幸、試練をかかえて主のもとに行く事ができると感じられた。私の心には、自分の特別な試練を主は知り、私に同情されたという確信が起こった。主の目にとまる価値もない者に、イエスが慈悲を向けられたというこの尊い確証を、いまだに忘れる事ができない。また私は皆とともにひざまずいている、そのほんのちょっとした間に、今までになくキリストの御品性をいっそう明らかに教えられた。

その時、ひとりの信者の婦人が私のもとに来て言った。「お嬢さん、イエス様にめぐりあう事ができましたか」。「はい」と私が答えると彼女は叫んだ。「確かにそうです。主の平安があなたに宿っています。お顔にそれが現れています」

何度も何度も私は自分に語りかけた。「これが信仰というものだろうか。間違っているのではないか」。これを自分のものにするのはあまりにも恐れ多く、過ぎた特権であるかのように思えるのであった。公然と表明するにはあまりにも臆病な私であったけれども、救い主が私を祝福して罪を赦してくださったと感じるのであった。

新 生 へ

この事があって間もなく、天幕修養会は終わりを告げ、私た

ち一行は帰途についた。私の心には聞いて来た説教や勧告や祈祷がまざまざと残っていた。世界がすっかり変化してしまったように見えた。集会は大半の日を曇りだったり雨だったりして過ぎ、ちょうど天候は私の気持ちにぴったりしたものであった。しかし今では太陽が光り輝き、全地を光と暖かさで包んでいて、草木はみなはつらつとして、大空は青く澄んでいた。全地は神の平安のもとに微笑んでいるかのようであった。それと同様に義の太陽は、私の心の濃い雲と暗黒をつらぬいて、その影は消え去っていた。

私はすべての人が神と和解し、ぜひ聖霊に活気づけられねばならないと感じた。私の目に映るすべてが、何だか違ったように見えた。樹木はいっそう美しくなった。小鳥も以前にまして愛らしく歌っていた。何やら創造者を讃美して歌っているようであった。私は話しでもしたらこの幸福が逃げるように思えだし、私に対するイエスの愛の確証もなくなるように思われてだまっていた。

私の生涯が新しい光に照らされたように思われた。幼年時代を暗やみに閉じこめていた苦悩も、今では私を祝福するため、私の心を世の無意味な快楽から離して天の永遠の美に向けさせるために、恵みによってなされたものであるように思えてきた。

天幕修養会から戻って間もなく、私は数人の兄弟とともに試験のために教会に加わる事になった。私はバプテスマ問題に大きな関心をもっていった。私は年こそ若かったが、バプテスマの形式は聖書に指定されている唯一の、すなわち浸める事だけしか認める事ができなかった。メソジストのある姉妹たちは、注ぎのバプテスマこそ聖書的だと言って私を説いたが、私は承知しなかった。

しかしメソジストの牧師は、注ぎの方法でも神に祝福される事に違いはないと思うが、浸めの方法を心から願う希望者には、その方法で施してもよいと承諾してくれた。

ついに私たちがこの厳粛な儀式にあずかるべき定めの時が来

た。私たち12名の者が受浸したのは、風が激しく波は高く岸辺を打ちつけていた日であった。けれどもこの重い十字架を負う際に、私には平安が川のように臨んでいた。水から上がった時、私自身の力がほとんど抜けてしまった。なぜなら主の能力が私の上に宿ったからである。私は今から自分はこの世のものではなく、水の墓より新生によみがえった者である事を感じた。

従姉のハンナも同時に信仰の告白をした。彼女自身は浸めのバプテスマを希望したのであるが、クリスチャンではない父親がいくら私たちから勧められてもこれを承諾しなかった。それで彼女は祭壇の前にひざまずいて、数滴の水を頭上に注いでもらった。これを目撃していた私は、自分はこのような注ぎのバプテスマを受けなくてよかった、この形式を支持する聖句はどこにもないのだからと思った。

同じ日の午後、私は正規の教会員として教会に受け入れられた。

索引 1. エステル4 : 16

第3章 再臨使命の布告

1842年6月にミラー氏は、ポートランドのカスコ街教会において再び講演会を開いた。その当時に私はまた失望に陥り、自分にはまだ救い主に会う準備ができていないと感じていたので、この講演会に出席する事は大きな特権に感じられた。第2回の集会は第1回よりもはるかに大きい刺激を市民に与えた。この時は2、3を除く各派の教会はみなミラー氏に対して門戸を閉ざし、いろいろな講演をもってミラー氏の主張は狂信的誤謬であると反対した。それでも熱心な聴衆はミラー氏の集会で混雑し、屋内に入れられない者も多かった。そして集会はいつも異

常な静粛さと緊張感を帯びていた。

ミラー氏の説教する態度は派手なものでもなければ、弁舌家でもなかった。しかしとても分かりやすく驚異的な事実を説明するので、聴衆は無関心ではいられなかった。彼はその話や弁論を、聖書からの証明をもって支持しながら進行させていった。語る言葉には人を納得させずにはおかない能力が伴い、真理の言葉である事を証明するようであった。

彼はとても巧妙な説教家であった。その勧告はクリスチャンにとっても未信者にとっても、適切であり説得力のあるものであった。時には悲痛とも思えるほどの厳粛さが集会を支配する事さえあった。人類にさし迫った危機に対する意識が、聴衆の心を圧倒したのであった。多くの者が神の聖霊の声に感じた。年老いた人々も恐る恐る前方に進み出た。大人も若者も子供も大いに感動した。苦悶の声、嗚咽、神を讃美する声が祈祷の時に入り混じって聞こえるのであった。

聖潔を渴望して

私も神の僕の語るこの厳粛な言葉を信じたので、これに反対する者がいたり、冗談の種にしたりする者がいるのを心苦しく思った。私はしばしば集会に出席した。そしてイエスが間もなく天の雲に乗って現れる事を信じるにいたった。しかし私が最も心配したのは、彼に会う準備についてであった。私は絶えず心の聖潔について思いめぐらし、何ものにもましてこの大なる祝福にあずかり、かつ全的に神に祝福された事を身をもって知りたいと渴望した。

苦悩と絶望

この時にいたるまで、私は公衆の前で祈ったという事が一度

もなく、ただ祈祷会の時におずおずと二言三言語るのが精一杯であった。ところが今や祈祷会において、祈りにより神を求めねばならないという感銘を受けた。それを私は、思考が混乱したり思うように言い表せなくなりはしないかとの恐れのために、あえてしなかった。けれどもなすべき務めがはっきり心に刻まれていたので、ひそかに祈ろうとすると、御旨に従わなかっただけに何だか神を欺くように思えてならなかった。絶望に打ちのめされて、3週間というものは暗やみに閉ざされ、何も光を見いだす事ができなかった。

心の苦悩は激しかった。時には一晩中目をつぶれない事もあり、(双子の)妹が熟睡するのを待ち、そっとベッドを抜け出しでは床にひざまずき、言いつくせない苦悩を胸に静かに祈るのであった。永遠に焼き尽くす暗やみが私を恐れさせた。私はとてもこんな状態では長く生きる事は不可能だと悟った。だからと言って、死んで罪人の受ける恐るべき運命に会うのも恐ろしかった。神に祝福された事を自覚している人を、どれほど私はうらやましく思ったことであろう！

言葉に尽くせない苦悩と絶望とにうめき戦いつつ、ほとんど一晩中ひざまずいたままで祈り続ける事もまれではなかった。「主よ、あわれんで下さい」とは私の願いであった。そしてあの哀れな取税人のように天を仰ぐ事もできず、床に顔を押しつけるのであった。このようにして肉体も力も非常に衰えてきたが、依然として苦悩と絶望は去ろうとしなかった。

神殿と羊の夢

このような絶望状態にいたある日の事、1つの夢を見たが、それは非常に深く心に刻みこまれた。それは神殿の夢であった。多くの人がそこに群がっていた。この神殿を避難所とする者のみが怒りの時に救われ、外にとどまる者は永遠に滅びねばならないというのであった。外部にいてそれぞれの道をたどろうと

している群衆は、神殿に入りつつある者を愚弄・嘲笑し、こんな安全策は巧妙に仕組まれた欺瞞に過ぎないもので、実際に避けなければならないような危険はひとつとしてあり得ないと言っていた。そればかりではなく、彼らは神殿の中に急ぐ者たちをさせないように捕まえたりもしていた。

嘲られる事が恐ろしいので、私は群衆が離れ去るか、あるいは人目につかずに忍びこめる機会を待つのが得策だと考えた。しかし群衆の数は増えるばかりで減っていかないので、遅刻したら大変だと私は大急ぎで家を出て、群衆をかき分けて進んだ。神殿に行きつく事に夢中で、自分を取りまく群衆が少しも目に入らなかった。

建物に入ると、私はこの神殿が1本の巨大な柱で支えられていて、それにずたずたに引き裂かれて血のしたたる1匹の羊が縛りつけてある事を知った。そこに集まった私たちは、この羊が私たちのために裂かれて傷つけられたものである事を知っているらしく、神殿に入る者は皆その前に来て、自分の罪を認めなければならなかった。ちょうど羊のすぐ前にはいくつかの席が設けられ、とても幸せな様子の一団が座っていた。天からの光がこの人々を照らしているように見えた。また彼らは神を讚美し、天使の音楽かと思える喜ばしい感謝の歌をうたっていた。これはすなわち羊の前に来て罪を告白し、赦しを受けて今は喜ばしい事件を楽しく待つ人々なのであった。

建物の中に入ってから、私はこれらの人々の前に身を低くしなければならぬのではないかという、恐れと恥じらいの思いに襲われるのであったが、何ものかに押されるかのように前へ前へと進み出て、羊の前へと道をたどっていた。すると突如としてラッパの音が響きわたって神殿を揺るがしたと思えば、大いなる凱歌が居合せた聖徒の中からあがり、異常な光が建物を照らした。そして間もなくすべてが真っ暗になってしまった。幸せそうな人々も光もすべてが消え去って、私ひとりが夜の静寂にとり残されているのであった。

私は心苦しく目ざめた。どうしても夢を見ていたとは信じら

れなかった。私の運命が決定してしまい、主の霊が私から永遠に去ってしまったように思えるのであった。

イエスを見る夢

それから間もなく、またもう1つの夢を見た。私は顔を手の中にうずめて、「イエスがもし地上におられたら私は御許にゆき、み足許に身をなげだして苦悩のいっさいを告げることでしょう。彼はきっと私をふりすてず、恵みをたれて下さる事だろうし、私も主を常に愛して仕えるに違いないのに」と、こんな事を考えながら絶望のうちに座っていた。

ちょうどその時、扉が開いて見た目の美しいひとりの人が入ってきた。その人は気の毒そうに私を見おろしていたが、「あなたはイエスにお目にかかりたいのですか。主はここにおられますので、お望みならお目にかかれます。あなたの持ち物全部を持って私についてきなさい」と言うのであった。これを聞いて私は大きな喜びを感じ、大急ぎで少しばかりの持ち物や、大事にしていた装飾品などをかき集めて彼に従った。彼は私を険しくて一見危なげなある階段に導いた。私が階段をのぼりかけた時、彼はじっと上方に目を注いで離してはいけない、さもないとめまいを感じて墜落するからと注意してくれた。私の前にもこの階段をあがって行く者があったが、途中で墜落する者が少なくなかった。

とうとう私たちは階段をのぼりつくし、1つの扉の前に立った。すると私の案内者は私に向かって持ってきたすべてをここに置けと命じた。私が喜んですべてをそこに捨てると、彼はさらに扉を開いて中に入れと言ってくれた。次の瞬間、私はイエスの前に立っていた。その美しい御顔は間違えられるものではなかった。その慈悲と威厳のある表情を、彼以外の誰が持っているだろう！ 御目が私に注がれた瞬間、私は彼がわが生涯のすべての事態を知りつくし、内に秘める思いや感情もすべてを

熟知しておられる事を直感した。

私は彼の見通さずにはおかないような目に耐えられず、何とかして彼の目を避けようとした。ところが彼はにこやかに私に近寄って来ると、私の頭上に御手をのせて「恐れるな」と仰せになったが、その御声の美しさに、私の心は今までにない幸福に驚くばかりであった。あまりにも嬉しくて一言も口がきけずに胸が迫って、ついには御足許にガバッとひれふしてしまった。何もする術がなくそこに伏している間に、美しい栄光に満ちた光景が私の前に次々と展開し、とうとう私は天の平安にめぐりあったように感じ、そしてやがて力が回復し、私は起きあがった。イエスの美しい御目がなおも私に注がれており、主の微笑みは心に喜びを満たしてくれた。主の御臨在は聖潔な思いと比類なき愛を私のうちに呼び起こしてくれた。

単純な信仰に生きる

このとき私を案内してくれた者が戸を開けたので、私たちは外に出た。先ほど私が外に置いたものを再び取りあげるように彼は私に命じた。その通りにした時、彼は私に巻きつけた緑のひもを渡した。そして私の胸中にこれを収めて、イエスに会いたい時にはいつでもこれを懐から取り出し、延びるだけ延ばすように教えてくれた。また長い間それを巻いたままでしまっておく事はいけない、そうするとみつれてしまい、延ばすのが難しいと注意してくれた。そこで私はそのひもを胸に収め、喜び勇んで狭き階段をおり、神を讃美しつつ出会った人々にイエスにどこで会えるかを告げた。

この夢は私に望みを与えた。この緑のひもは私の心にある信仰を表していた。単純に神を信頼する美しき信頼が私の心に湧いてきた。

今や私はこれまで秘めていた悲しみも悩みも、そのすべてを母に打ち明けた。母はやさしく同情して私を励ますとともに、

ぜひストックマン長老の助言を求めるようにと勧めてくれた。当時ストックマン長老は、ポートランドにて再臨教義の宣布に従事していた。彼がキリストの敬虔な僕である事を知っていたので、私も同長老を大いに信用していた。ストックマン長老は、私が語る一部始終の物語に耳を傾けると、その手を優しく私の前に置き、目に涙を浮かべながら「エレンよ、あなたはまだ幼少である。あなたの経験した事は、あなたのような若い年頃の者にとっては異例である。必ずイエスは、何らかの特別な働きにあなたを用いる御計画であるに違いない」と言われた。

もしも私が成熟した年配の者であり、このような疑惑と失望とに苦しんだのであったにしても、イエスの愛によって希望を持つ事ができると彼は語った。私があんなに悩んだのは、神の聖霊が私に働かれた事の明らかな証拠であると言った。罪人が罪を犯し心をかたくなにしてしまうと、罪がいかに憎むべきものであるかを悟らなくなり、それほど悪い事をしているのではないと考え、自分が危険な状態にある事を感じなくなるのである。そうした事の結果、仕方なく聖霊は彼をそのままに放置される事になり、その人は不注意・無関心・反逆的になるのであると彼は語った。彼はまた過ちに陥った神の子たちに対する神の愛を語った。神は決して彼らの滅びる事を喜ばれるのではないのであって、疑う事なく単純に信仰し、彼に来る事を望まれる方である事と、キリストの広大な愛と贖罪の計画とについて説明した。

苦難による訓練

ストックマン長老は、私の幼少の不幸な出来事を語り、それは実に痛ましい経験ではあるが、慈愛の天父の御手が、私から離れたわけではなく、将来において私の心に暗い影を投げかけた雲が退散する時には、悲惨であり理解するのに苦しむこの出来事の摂理と深い意味を認められるに違いないと励ましてくれ

た。イエスも弟子たちに1.「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」と仰せられたが、今はまるで鏡に映すようにおぼろげである事も、栄光に輝く未来においては顔と顔を合わせるように、神の愛の神秘を認めるにいたるのであった。

慰 め

「エレンよ、主イエスを信頼して安らかに帰宅するがよい。まじめに道を求める者を主は拒まれない」と長老は語った。彼は熱心に私のために祈ってくれた。もしも私の切なる祈りが聞かれなくても、必ずこの長老のような聖徒の祈りに神が耳を傾けられる事に疑いはなかった。真のイスラエルの教師とも言うべき長老の、賢明にして優しい勧告に接して心が非常に安らになり、憐れむべき疑惑と恐怖との奴隷であった私もついに解放された。私は大きな希望と勇気にあふれつつ彼の前を立ち去った。

ストックマン長老からしみじみと教えられたこの短い時間の中で、今まで神の愛と慈悲とについて私が耳にしたあらゆる説教や勧告以上に得るものがあった。

十字架をとって行け

帰宅すると私は神の御前に出て、主イエスの微笑みが私の心を喜ばせる事であれば、どんな苦難が私に要求されるとしても喜んでこれを行い御事業に当たる事を約束した。そのとき以前に私の心を悩ませたのと同じ、するべき責務が私に示された。それは集まっている神の民の中に十字架をとって行けであった。それをする機会が私に臨んだのは、それほど時間が経ってからでなかった。私の叔父の家で祈祷会が開かれ、私もそれ

に出席する事になっていた。

皆がひざまずいて祈っていた時、私も頭をたれて震えわなないていた。まず1、2名の者が祈ったが、それに続いて無意識のうちに私の祈りの声があがっていた。その瞬間、神の御約束は貴重な数々の宝石のように私に映った。しかもこれらはただ求めることによって受け入れられるものであった。

こうして私が祈っていた時、長らく私に押しかぶさっていた心の重荷と悩みとが去った。そして神の祝福が清々しい露のように下った。私は心から神を讃美した。イエスとその御栄光とを見るだけで、他のものは何も映らず、周囲で何が起こっていたかも知らなかった。

神の霊が大きな能力とともに私に下ったので、その夜は帰宅することができなかった。我に帰った時には、祈祷会のために私たちが集合していた叔父の家で、介抱されている自分がいた。翌日になって帰宅した時、私の心には大きな変化が起きていた。前日の夕方家を出了た時と同じ人物だとは思えないほどであった。2.「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない」との聖句が絶えず思い起された。これらの聖句を復唱する時、心は喜びでもって満たされた。

父なる神の愛

今や信仰が私の心をとらえた。神に対する言いつくせない愛が私の心の中で起こった。同時に私の罪が赦されたことを聖霊の証によって感じた。父なる神に対する私の見解は一変した。それは断じて人に服従を求める厳しい暴君としてではなく、神を優しく慈悲に満ちた両親のように考えるようになった。深く燃えるような愛でもって私の心は神に傾けられた。神の御心に服従することは喜びとなり、御旨を果たすことが楽しみとなった。神の全き御旨を私に示す光を曇らせるものは何もなかった。私は救い主が内住されている実感を持つとともに、3.「わた

しに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」との御言の真実であることを知った。

私が出た平和と幸福とは、以前の憂鬱と苦悶よりも大きなものであって、これを例えればまるでこの私が地獄より救い出されて天国に移されたかのようであった。私の生涯にとって今まで試練であった不幸そのものについてすら、神を讃美する事ができるようになった。なぜならばそのことが私にとって、一途に永遠を思わせる助けとなったからである。もともと傲慢で野心が強い私のような者は、あのような不幸な出来事に遭遇しなかったならば、世俗のむなしい地位や名誉を求める心を断ち切って、イエスに全く従う事はおそらくできなかつただろうと今となっては思うのである。

他のものに語る

私はイエスの愛を人々に証する事を熱望した。しかし誰とでも普通の会話をする気持ちにはなれなかった。私の心は神に対する愛と、言いつくせない平和でもって満たされていたので、瞑想と祈祷とに時を過ごすことを好んだ。

証言

私が大きな祝福を受けたその夜、再臨信徒の集会に出席した。あかしをする時間が来た時、私はだまっている事ができず、立ち上がって自分の経験したことを述べた。どのような事を話さねばならないかというような心配は全然なく、単純にイエスの物語をつかえる事なく述べた。暗い失望の鎖から解き放されたので、心は幸福感でもって満たされ、周囲に人々のいる事などは全く忘れてしまって、自分ひとりが神とともにいるように感じられた。心のうちの平和と幸福とを述べるのに、何の困難も

感じず、ただ感謝の涙が私の言葉をさえぎるのみであった。

大きな祝福を受けてから間もないころ、私はブラウン長老の牧するクリスチャン教会の年会に出席した。席上で私の体験を語る事を求められたので、私は少しも言葉につかえる事なく自由に、しかも喜びにあふれつつイエスの愛についての単純な物語と、神に受け入れられる喜びについて語った。目に涙を浮かべつつ感謝の思いに満たされて語っている時、私の心は感謝にあふれつつ天の方を指しているかのようにであった。その時に包みこむような神の御力が会衆の上にくだった。席上ですすり泣く者が多かった。また神に感謝の声をあげる者もいた。

祈りのために罪人に起立が求められた時、多くの者が招きに応じた。私の心は聖なる喜びに他の者もあずからせたいとの願いでいっぱいだったので、神が私に与えられた祝福に対する感謝の思いであふれた。神の御不在と罪の重荷とを感じて苦しみ悩んでいる者に対して、私は深く同情せずにはいられなかった。こうして自分が経験した事を語っている時、ここまで驚くべき変化を私にもたらした赦しを与えられる、神の愛の実証をおそらく何者も拒める者はないであろうと思った。真の悔改めの何であるかを私は明らかに体験したので、若い友人たちが光を受けられるように働きかけたいとの願いが起き、あらゆる機会を見つけてはこの目的のために力を尽くした。

若い友人のために働く

そこで私は若い友人たちのために集会を開く事になった。その中には年長の者も、また極めてわずかではあったが既婚者もいた。また中には軽薄な者もいて、彼らには私の語ることが他愛のない話のようにしか響かず、いっこうに私の訴えに心を寄せなかった。しかし私は、これらの貴重な靈魂-私の深い関心の下にある-が、全く服従するまでは努力をやめない決心をした。何度も私は夜通し彼らのために祈った。彼らの中のある者は、

私の語ったことに対する好奇心から出席しているに過ぎない者もあり、他の者は自分自身の問題についてあまりにも冷淡だったので、私が彼らを導こうと熱心に働きかけるのを見て、私を気が違っている者だとすぐに決めつけた。しかし、この小さな集会において、私はいつでも彼らのために祈った。ついに彼らの全員がその心をイエスに開き、彼の赦しの愛の功績を承認するようになった。そして全ての者が悔改めるにいたった。

夜ごと私は救霊のために働いている夢を見た。その場合、ある人の状態がとくに私の心に映り、後日その人を訪ねて私は祈った。その結果、1人の例外を除いてはいつも本人が悔改めるにいたった。ところが比較的形式的な信仰の兄弟たちは、私があまりにも靈魂の悔改めのために熱心である事に危うさを感じはじめた。しかし幸福な不死の希望を抱き、間もなく来られるキリストを待望する者にとって、時はあまりにも短く感じられたので、依然として罪の中にあり恐るべき滅亡の断崖に立つ者のためには、絶えず手を休める事なく働かざるを得なかったのである。

あくまで神を喜ばせると決心する

いまだに年少であるとはいえ、救いの計画が明らかにされて、とくに確かな体験を持っていた私としては、引き続き貴重な靈魂の救いのために力を尽くす事が、自分のすべき責任である事を痛感していたので、私は機会のある度にキリストを証してかつ祈った。主の御旨のために私は全身全霊をささげていた。どのような事が臨んでも神を喜ばせて、忠実である者に報いを与えるために来られる救い主のために生きる事を決心していた。まるで幼子が父親のもとに来て、「お父さん、私はこれから何をしましょうか」と尋ねるように、私もこのような態度で御前に出た。そして私のすべき任務が明らかにされた時は、これを行なう事が私にとって最上の喜びであった。時には特別な試練が

私に襲い来る事もあり、私よりも経験において先輩である人たちは、私が信仰的にあまりにも熱心すぎるからと言ってこれを冷まそうとした事もあったが、私は主イエスの微笑みに生涯を輝かされ、心は神の愛に満たされつつ、喜び勇んで働いていた。

索引 1.ヨハネ13：7 2.ヨハネ8：22 3.詩篇23：1

第4章 組合における経験

依然として私たち家族の者は時おりメソジスト教会に出席し、また信徒の家で開かれる組合にも出席していた。

ある晩の事であったが、兄のロバートと私とは組合に出席した。その司会をする長老も出席していた。兄が証する順番になった。彼は極めて謙遜でしかも明確に、天の雲にのって権能と大いなる栄光とをもって現れる救い主を迎える準備の必要な事を語った。兄が証している時、普段から血の気の少ない彼の顔にも天来の光が輝いていた。彼は御霊によってこの地上よりあげられ、イエスの御前にある者のような様子で語っていた。

私にも語るようにとの勧めがあったので、起立した。このとき愛と平和とでもって心は満たされ、御霊による自由をもって語る事ができた。私は罪悪感のもとに非常に苦しんだ経験と、ついに長らく求めていた祝福-神の御旨との全き一致にいたった事を語るとともに、地上の子らをその家に伴うために、贖い主キリストが間もなく来られて、その訪れを迎える喜びを表した。

私が語る事をやめた時、長老は私に、イエスが間もなく来られて憐れむべき罪人を滅ぼされるよりも、生きながらえて人々のために善を行う事の方がはるかに勝っているのではないかと告げた。これに対して私はイエスの御再臨を待ち望む者である

と答えた。実際に御再臨があってこそ罪も終結し、永遠の聖潔を私たちは楽しみ、どんなに悪い者も私たちを陥れる事をしなくなるのだから、私はこれを待望せずにはいられなかったのである。

集会が終わると、今までとは打って変わり非常に冷淡に扱われた事を意識せざるを得なかった。家に帰る道すがら兄と私とは、兄弟たちによって誤解されたキリスト御再臨切迫の問題が、こんなにまで苦々しい反対を引き起こすのだろうかと考えた時、全く悲しくならずにはいられなかった。

幸福な希望

帰宅する途中で私たちは、心の中で起きた信仰と希望との実証について語り合った。「エレンよ！ 私たちは欺かれたのでしょうか？ 果たしてキリストが間もなく地上に現れるという期待は、異端であろうか？ こんなに苦々しい反対を兄弟たちから受けるのはどうしたわけであろうか？ イエスは何千年も後でなければ来られないと彼らは言う。彼らの言う事が真理であるならば、今の時代に終わりは来ない事になる」と兄は言った。

私は少しも疑念を抱く事なくすぐに答えた。「ミラー氏によって説かれている教義の真実である事を、私は疑う事ができない。彼の言葉に伴ったあの力はどうかであろう。罪人の心にあんなにまで罪悪感を深刻にしたものがあっただろうか？」

私たちは道すがらこの問題について腹をわって互いに話し合い、キリストの再臨を待望する事は私たちの特権でもあり当然の責務でもある事、彼の現れる事に対する用意をして、喜んで彼を迎える準備をする事が安全であるとの結論にいたった。

彼が今すぐ実際に来られたとしたならば、1.「自分の主人は帰りがおそい」と言って、彼に会う希望を持たない者に何の見込みがあるだろう。再臨使命が全地に宣べ伝えられていくにもかかわらず、牧師たちが罪人や信仰の後退している者に「安し、

安し」と言って、恐れをなくす事に努めているのはいったいなぜなのか、理解に苦しむ事であった。時は切迫しいよいよ厳肅になって行くとき、少しの時間も無駄にしてはならないと私たちは感じるのであった。

2.「木はその実でわかる」と兄のロバートが言った。「再臨信仰が私たちに何をもたらしたか？ それはまず私たちに御再臨の準備ができていない事を示し、清き心の持ち主とならなくては救い主に会う事ができないことを明らかにしたのではないか？ また新しい能力と恵みとを神に求めるために私たちを立ち上がらせたのではないか」

「エレンよ！ あなたにはその再臨信仰がどんな事をもたらしたか？ キリストが速やかに来られるという教義を聞かなかったとしたならば、あなたが現在もっている経験は得られなかっただろう。また再臨信仰はどんな希望をあなたに呼び起こした事だろう。どんなに平和・喜び・愛をあなたに与えた事だろう。私に対してもその再臨信仰はあらゆる事をしてくれた。私はイエスとすべてのクリスチャンとを愛する。私は祈禱会を愛する。聖書を読み祈禱する事に、私は大きな喜びを見いだす」

こうした会話でもって私たち2人は強められ、真理に対する否定できない感銘と、天の雲にのって速やかに来られるキリストの幸福な希望を放棄しない決心をした私たちは、尊い光に接したこと、主の御再臨を待ち望む喜びを持つことを感謝した。

組合における最後の証言

この事があってから間もなく、私たちは組合に出た。心にわき起こる神の愛を語る機会を求めずにはいられなかったのである。とくに私は、神が私になされた恩恵と慈悲とを証する事を熱望した。実際に私には大きな変化がもたらされたのだから、あらゆる機会を見つけて救い主の愛を証する事は、私の責任であると感じていたからである。

私の語る順番が来たので、私はイエスの愛に満たされている体験について語るとともに、間もなく救い主に会う喜びについて述べた。主の御再臨が近いという事実は、私の心に今までよりもいっそう熱烈に聖霊による清めを渴望させずにはおかない事を語った。

この時、組合の組長は私の言葉をさえぎって「あなたはメソジストの信仰、メソジストの信仰によって聖潔を受けられたのですよ。姉妹よ、そんな間違った教理からではありませんよ」と言った。

それで私は、自分の心が新しい祝福を受けたのはメソジストによってではなく、イエスが身をもって現れたという驚くべき真理によるものであるとの、自らの思いについて語らざるを得なくなった。実際にこの再臨信仰を通して、ついに私は全き愛と平和とを見いだすにいたったのである事実を明らかにして、私の証を終えた。これは私がメソジストの組合において証した最後のものであった。

次に兄のロバートが立ち、謙虚な態度で語った。そして列席していた者の心に迫らずにはおかない調子で語った。ある者は非常に感動させられて泣いていた。一方ではしきりにせき払いをして反対する、心の穏やかではない者もいた。

組合が終わってから、私たち兄弟の者は信仰についてもう一度語り合った。そして主を信じる兄弟姉妹たちがどうしてこんなにまで、キリスト再臨について語る事を嫌うのであるかと思った。

私たちはこれ以上、組合に出席する必要のない事を認めるにいたった。キリストの栄光の出現の期待が私たちの心にあふれていたので、口を開いて自ら語った事であるのに、私の証に対する嘲笑とののしり、集会の終わりになって私たちの耳に響いてきた、敬愛する兄弟姉妹たちのこうした言動は、もはや組合において私たちが歓迎される者ではないことを明らかにしていた。

索引 1.マタイ24：48 2.マタイ12：33

第5章 再臨使命を宣べ伝える

その当時の再臨信徒たちは、ベートーベン・ホールにおいて集会を開いていた。父は家族の者とともにその集会にはほとんど欠かさず出席していた。再臨の時期は1843年と考えられていた。霊魂を救いに導くべき時の短いことを痛感する私は、何とかして罪人を真理に導くために、自分の力でもってできる事はしたいと決心した。

家には2人の姉妹がいた。私よりは数歳年上のサラと私と双子の姉妹エリザベスとであった。この3人が相談して、働いて金をもうけて、それでもって本や小冊子を購入して無料で配布することにした。これが私たちにできる精一杯の事だったので、喜んでこれを始めた。

父は帽子製造業であった。帽子の山を作ることが私に割り当てられた仕事であった。これはいちばん簡単な仕事であった。また私は靴下を1足25セントの割当で編んだ。私は心臓がとても弱かったので、ベッドにもたれながら仕事をした。ベッドの上で指を震わせながらも毎日、御旨のためにわずかばかりであったが伝道費用を得ることに尽くした。それはわずかに1日25セントに過ぎなかった。こうして暗黒にある者に光を与える小冊子を買うため、私はどれほど注意してもうけた銀貨をかたわらに置いたことだろう。

私はそのもうけた金を、自分の個人的な欲望を満足させるために費やす誘惑には陥らなかった。私の服装は極めて質素なもので、不必要な装飾をする必要がなかった。このような虚飾は私には罪に思えた。ゆえに私はいつでも小冊子を買うたくわえがあった。このようにして購入した小冊子は、経験ある人たちの手によって広く郵送してもらった。

これらの1つ1つの小冊子が、私にとっては非常に貴重に感じられた。それは実に世に対する光の使者のようなものであり、切迫する大事件の準備を促すものであった。霊魂の救いは私の心の重荷であり、警告使命が全世界に伝道されて行くにもかか

わらず、自分は大丈夫であるとたかをくくっている者を見ると
とき私は心を痛めた。

死の状態について

ある日の事、母がある姉妹と最近聞いた講演の事、すなわち
霊魂というものは生まれつき不滅のものではないとの問題につ
いて語り合っているのを耳にした。これを証明するためにその
牧師が引用した聖句のあるものが談話の中でくり返され、とく
にその中でも1.「罪を犯し魂は必ず死ぬ」2.「生きている者は死
ぬべき事を知っている。しかし死者は何事をも知らない」3.「時
がくれば、祝福に満ちた、ただひとりの力あるかた、もろもろ
の王の王、もろもろの主の主が、キリストを出現させて下さる
であろう」4.「耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬも
のをを求める人に、永遠のいのちが与えられる」との聖句が非常
に力強く響き、私に強い印象を与えた。

その聖句を引用してから、母が「永遠の生命をもっているな
らば、ここで言われているように求める必要はないわけでしょ
う」と語っているのを耳にした。

話を聞いていた私は、この新しい見方に大きな興味を持った。
それで母ひとりの時、彼女が実際に霊魂は不滅ではないと信じ
ているかどうかを尋ねてみた。彼女はこの問題について、私た
ちが今まで間違っていた、他の人たちも間違っていたのではな
いか、それが心配だとの返事であった。

「ではお母さん、あなたは復活の時まで霊魂は墓に眠ってい
るものだと本当に信じているのですか。クリスチャンが死ねば
すぐに天にのぼるとか、罪人が死ねば地獄に行くとかいう事は
ないとお考えなのですか」と私は言った。

母は答えた。「聖書は永遠の火の地獄があるとの証明を何も提
供していないのです。もしそんな場所があるなら聖書の中に必
ず記してあるはずでしょう」

「まあお母さん」と私は驚いて叫んだ。「これは妙な事を聞くものです。そんな奇異な説を信じておられるとしても、他人に聞かせてはいけません。なぜなら罪人はこれに安心してしまつて主を求めようとしなくなりはいませんか？」

彼女は答えた。「もしこの事が聖書の健全な真理であるならば、罪人の救いを阻むどころか、むしろ彼らをキリストに導くつてになるでしょう。もし神の愛が背く者を服従させられないくらいなら、永遠の地獄の恐怖だつてこれを悔改めに導く事にならないでしょう。そればかりではなく、心のうちで最も劣等な性質、すなわち賤しむべき恐怖などをもってイエスの許に靈魂を導くというのは適切な方法とは思えないのです。イエスの愛が頑強な心をも征服できるのです」

こんな事を話し合つてから数ヶ月は、これ以上なにもこの教義について耳にしなかつたけれども、その間に私はいつもこの問題を心に思いめぐらしていた。やがてこの問題についての説教を聞いて、私は真理だと信じた。そして死者の眠りに関する光が私に來た時以來、かつて復活問題について明らかではなかつた疑問も消えた。もともとこの大々的な事件である復活そのものが新たにしてかつ崇高で重大な事柄だったのである。疑いようのない未来の復活と審判の事実と、人が死ぬと直ちに天国や地獄へ行つて報いを受けるという事に、矛盾を感じずに結び合わせる事が私にはできなかつた。人が死ぬと靈魂が直ちに天国に行くか地獄に行くかするというのなら、憐れむべき死すべきこの身の復活の必要がどこにあるのだろうか。そしてこの新たに示された正しい信仰により、私はなぜ聖書記者が肉体の復活について深い関心を持っていたかが分かつてきた。つまり、それは人の全体が墓の中に眠っているからである。私は今やこの問題に対する私たちの以前の主張の誤りを明確に知る事ができた。

教師の訪問

私の家族一同は深く再臨切迫の教義に興味を持っていた。父は以前からメソジスト教会の柱に立つ1人であった。説教者として働き、市外で家庭で集会がある時などは司会者にも立てられたりしていた。ところがある日、メソジストの牧師がわざわざ自宅を訪れ、私たちの信仰はメソジストの信仰と一致するものではないと告げた。彼は私たちがなぜこうした信仰を持つのかその理由も尋ねず、だからといって私たちに誤謬を認めさせるために聖書を引用するわけでもなく、ただ私たちがこの時に信じるにいたった新奇な信仰は、メソジスト教会の容認できるものではないと述べるのみであった。

再臨の教義を新しい奇異な教理のように呼ぶ事は、間違いであると父は牧師に答えた。なぜならばキリスト御自身も弟子たちを教えるのに自らの再臨を示された。キリストは仰せられた。5.「わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、わたしはそう言っておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」。また彼の昇天においても、忠実な弟子たちが天を仰いで彼の姿が次第に消えて行くのを眺めていた時、6.「白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、『ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう』

さらに父は、パウロもまた神の靈感を受けて再臨の事を書き送り、テサロニケの兄弟たちを励ましている事に牧師の注意を促した。パウロは言った、7.「悩まされているあなたがたには、わたしたちと共に、休息をもって報いて下さるのが、神にとって正しいことだからである。それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。その時、主は

神を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し、そして、彼らは主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰を受けるであろう。その日に、イエスは下ってこられ、聖徒たちの中であがめられ、すべて信じる者たちの間で驚嘆されるであろう」8。「主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい」

「これらの聖句に照らし合わせても、わたしたちの信仰がどんなに動かすことのできない権威に根ざすものであるかがお分かりの事と思います。主イエスもその使徒たちも再臨については喜び勇みつつ述べています。聖天使たちも天に昇られるキリストの再臨されることを明言しました。主イエスとその弟子たちの言葉を信じる事-この事をもって私たちは非難を受けているのです。これはすでに古くから説かれていた教理で、何も異端と言うべきものではないのです」と父は言った。

このとき牧師は、1ヶ所も聖句を引用して私たちの誤謬を指摘する事すらせず、時間がないからと逃げ口上するばかりで、彼は私たちが静かに教会から退く事、こうして教会の公然とした査問を避けるべき事を忠告した。他の兄弟たちもこれと同様の取扱いを受けた事を私たちは知っていた。まるで私たちの信じる事を承認する事を恥とするように、あるいは聖書によって証明できないもののように思われなくなかったので、私の父はこのような要求をされる理由について尋ねた。

しかしそれに対する答えはこれだけであった。私たちが教会の主だった者たちとは異なった歩みをするようになったからで、公然とした査問を受ける事を免れるために、だまって退会する事が一番よい方法であると言うのだった。これに対して私たちは、むしろ進んで規定された査問を受けたい事、どのようなと

がのためにこうした処分を受けるのかを知りたいものであると答えた。

(註) 速やかにキリストが再臨される事に関して、はばかり事なく証言をする事以外のどのような理由からでもなく、この時ついにハーモン一家は所属するメソジスト教会を退く事になった。

索引 1.エゼキエル18：4 2.伝道9：5 3.1テモテ6：15 4.ローマ2：7 5.ヨハネ14：2, 3 6.使徒1：10,11 7.2テサロニケ1：6-10 8.1テサロニケ4：16-18

第6章 主に会う準備

慎みと畏れの思いをもって、私たちは救い主が現れると予期される日を待った。熱心の限りをつくし、特別な民として自分の生活を聖潔にして、来臨される彼に会う備えをする事に努めた。市内の各地にある個人の家では数多くの集會が開かれたが、その結果は極めてよかった。信者たちは友人知人や親戚のために働くべき事を示され、こうして悔改める者は日に日に増加する一方であった。

ベートーベン公会堂における集會

牧師たちや諸教会の反対があつたにもかかわらず、ポートランド市のベートーベン公会堂は、毎晩群衆で混雑していた。日曜日は特に目立っていた。各階級の人がこの集會に集まつた。貧富や地位の区別なしに、それぞれが異なつた理由のもとに再臨の教義を聞こうと熱望していた。入場できずに去らねばなら

ない者もたくさんいた。

集会の順序は単純なものであった。いつも簡単な分かりやすい説教があり、それが済むと自由に証をする時が一般に与えられた。しかしそこには大群衆であるにもかかわらず、静けさが保たれた。主は僕たちがその信仰の理由を説明する間、反対する精神を阻止されていた。時には用いられる器の貧弱な事もあったが、その場合にも神の霊が真理に重みと力とを与えた。集会に聖天使の臨在する事が感じられ、小さな信者の群れの数が日に日に増加していった。

歡喜して待つ

すべての心からイエスを愛する者は必ず、当時救い主の來臨を待ちこがれていた人々の心情が推察できるに違いない。予期した日が近づいてきた。イエスに会えると予期されたその時は目前に迫ってきた。私たちは嚴肅にこの時を待っていた。真に信じている人は神との楽しい交わり-輝かしい来世において彼らのものとなるべき平安の保証-を望んでいたのである。この希望と信頼とを経験した者にとっては、この貴重な待望期間の事はとうてい忘れられるものではない。

数週間、世俗の仕事を放棄して、まるで臨終に際して数時間後には永遠にこの世に別れを告げる時であるかのように、あらゆる思いや心情のすべてを味わうのであった。だからといって、誰も私たちの中にはいわゆる昇天衣のようなものを作って着用した者はいなかった。私たちはキリストに会うための用意ができた事の内的証拠の必要を痛感していたのである。私たちの白い衣とは、純潔な心、救い主の贖いの血によって清められる事を意味することを意識していた。

苦悶の日々を送る

ところが予期されたその日は過ぎた。この事は天の雲に乗って来られると信じて待望していた者の上にくだった最初の手厳しい試練であった。待望した民の失望は大きなものであった。嘲弄者が凱歌を奏でたうえに弱くて臆病な者を自分たちの側に引き入れた。なかには今までは真実の信仰を持っていたように見えたが、実は恐怖に動かさされていただけであったらしい人々もいて、今やこの種の者は、その日と時とが経過するにつれて勇気を取り戻し、大胆にも嘲弄者と手を組んで、自分たちは実際は極めて狂信的なミラーの教理にだまされてはいなかったのだと宣言するようになった。そのような者は自然とあるいはためらいながらも沈黙のうちに真理の道を捨てた。

私たちも困惑して失望した。しかし信仰を捨てるような事はなかった。多くの者は、神の言葉は確かで決して間違いはないという事と、イエスが必ず近いうちに来られるという望みを持っていた。自分の義務を尽くして尊き信仰に生きたと確信を持つ私たちだったので、失望こそしたが全然勇気をくじかれてはなかった。時のしるしにより万物の終わりの目前に迫る事が指示されていた事であるから、目を覚まして、いつでも主が来られてもよいように備えをしていなければならなかった。希望と信頼の思いをもって待ちつつ、互いに怠ることなく会合し、教え、はげまし慰め合い、自らが光を放って暗黒の世を照らさねばならないと感じた。

誤算

預言された日時 of 計算は、子供でも分かるほど簡単で明らかなものであった。すなわちエズラ7章に記されているペルシャ王の勅令の出た日時、つまり紀元前457年からすれば、ダニエル8：14の二千三百年は、1843年に終わるものと思わ

れた。それで私たちはこの年の終わりに主の再臨があるものと期待したのである。しかしその年が過ぎてしまっても救い主は来られず、悲しき失望の憂き目を見たのだった。

私たちはもし勅令が紀元前457年の年頭ではない限り、二千三百年は1843年末に完結するはずがないことに初めは気づかなかった。しかしその勅令は紀元前457年の終わりに発布されたものであることが、その後の研究によって判明した。したがって預言的期間の終わりは1844年の秋で、時に関する預言は遅れたように思えたが、事実はそうではない事が分かってきた。1.「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそれれば待っておれ、それは必ず臨む、滞りはしない」との預言者の言葉に信頼すべき事を私たちは知ったのであった。

神は1843年における時の経過をもって、神の民を試みたのである。預言的期間の算定上の誤りは、再臨信徒の説に反対する学者の間ですら発見されなかった。学者たちもミラーの時の計算を正しいと明言していた。ただ彼らはその期間の最後に起こるべき事件について、彼と論争したに過ぎないのであった。彼らも待望する民も時の問題については、一般に誤謬に陥っていたのである。

しかし失望のうちにあった人々も、熱心な祈祷とともに預言的期間を調べる事によって誤りが発見されて時の遅れる事も判明したので、いつまでも暗い気持ちでいなくてもよかった。あまりにも再臨を待つ事に熱中して、黙示が遅れるかに見えるという事を頭に入れておかなかった。その事は悲しく予期しない驚きではあったが、真の信者を真理にかたく成長させるには必要な試みなのであった。

希望を新たにして

私たちはここで新たに1844年にキリストの再臨があると

してこれに希望を集中させた。これはまた空中を飛びつつ、2.「倒れた、大いなるバビロンは倒れた」と叫ぶ第二天使の使命が布告されるべき時であった。この使命は1844年の夏に神の僕たちによって布告され、その結果として、多数の者が墮落した教会から脱出した。またこれと関連して『夜半の叫び』もあがった。3.「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と。しかもこの使命に関する知識は国内各所において与えられたので、叫びはあらゆる場所からあがった。そして町から町へ、村から村へと伝わり、へんぴな片田舎にまで行き渡った。知者や学者にも無学な者にも伝えられた。

私の一生を通してこの年ほど幸福だった事はない。心は楽しい希望でいっぱいだった。しかし私はイエスに希望をおかずに失望のうちにいる人々を気の毒に思いとても心配した。私たちは特殊な民として一致し、神に祝福された事を実際に体験して、その証拠を得るために熱心に祈るのだった。

信仰の試み

嘲弄者が多かったので私たちはずいぶん忍耐が要った。前の失望の経験を例に出されて嘲りの言葉を浴びせかけられる事もしばしばあった。正統派の諸教会などでは、キリスト再臨信仰の伝道を何とかして防ごうとあらゆる手段を尽していた。その集会ではキリスト再臨が近いなどと言うような人には少しの自由も与えなかった。いわゆるキリストを愛する者が、不思議にもその最愛の友が間近に来られるという使命を侮蔑の目をもって拒否していたのである。彼らは再臨の訪れを布告し、栄えの主に早く会いたいと喜んでいる人々に対して、心に激しい怒りさえ感じるのだった。

準備期間

一瞬といえども私にはそれが極めて貴重なものに思えた。自分は永遠のために働いているのであって、不注意で無関心な者は大変な危機に瀕しているように思われた。私の信仰には一点の曇りもなく、私はイエスの尊い御約束を自分のものとしていた。主は弟子たちに向かって、「求めよ、そうすれば与えられるであろう」と仰せになったが、私は神の御旨に従って求めさえすれば何事でも聞かれない事はないとかたく信じていた。私はイエスの足許に心を低くして、全心を神の御心と一致させた。

また私はあちこちの家庭を訪ねては、恐怖と失望に打ちひしがれている人々と共に祈った事が度々あった。神は私の祈りに答えられるだろうかなどという事は、一瞬も疑った事がないほど私の信仰は強固だった。そして一度の例外もなしに、私たちの謙虚な祈りの答えとしてイエスの祝福と平安が与えられ、失望している兄弟たちを光と希望をもって励ました。

こうして私たちは心の反省と謙虚な告白とを怠る事なく、祈祷の精神のうちに予期される日時に向かって進んで行った。朝ごとに私たちは自分の生活が神の前に正しくされているとの証拠を得る事を第一の務めとしていた。聖潔に前進していないという事は退却している事になることを私たちは認めていた。また私たちはますますお互いの事に関心を持ち、いよいよ心を合わせてお互いの事を祈り合うようになった。果樹園のかげに、あるいは林の中に集まっては、神の創造のわざに驚かされ、いよいよ神の御臨在を近く感じながら神と交わり、願い事をささげたりした。私たちにとっては、飲食物などよりも救いの喜びの方がはるかに必要なものであった。心に曇りが生じた場合には眠りもとらずに、神に祝福された証によってこれが一掃される事を求めた。

その日は過ぎた

待望の民はその時、すなわち再臨によって彼らの喜びが完成される時として待望していたその時にいよいよ直面した。しかしその時はイエスの再臨が起こらずに再び過ぎ去ってしまった。それは信仰を強くして高い希望を持って来た小さな群れに下った手厳しい失望だった。それでも主による自由を感じると同時に、主の力と恵みに支えられる事は本当に不思議だった。

けれども前年と同様な経験がさらに大々的にくり返された。ずいぶん数多くの人が信仰を捨てた。かたく信じきっていた人々の中には、あまりにもその誇りを傷つけられて世の中から逃れたいと思う者さえいた。彼らはヨナのように神につぶやき生よりも死をよしとした。人の言葉に信頼をおいて神の言葉を基礎としていない者たちは、今はたちまちに再びその見解を変更してしまった。また再臨信仰という一大潮流に乗じて一時は真の信仰者および熱心な働き人と歩調を共にしていた無価値なもみ殻のような者たちの多くが、この再度の試験によって暴露された。

私たちは望みをくだかれても全然心がくじかれてはいなかった。この苦しい試みはこれによって主が私たちをかすより清め、炉によって金を精錬するように私たちを精錬されるのだからつぶやいてはならない、むしろ私たちのために神が必要と認められた清めの過程に忍耐して応じ、救い主がその試みを経た忠実な者を贖われる日をじっと待望しなければならないと決心したのであった。

私たちは確定的な時は神が宣布される事をかたく信じた。それゆえに聖書を熱心に探って、今まで発見しなかった様々な真理を見いだすに至った。ヨナは二ネベの街に同市が40日以内に滅ぼされる事を伝えるために遣わされた。しかし神は二ネベ人がその心を謙虚にした事から恩恵期間を延ばされた。しかしヨナの伝える使命は依然として神より来たもので、二ネベは神の御旨によって試されたのだった。世の人は私たちの希望を感

わしだと思い、私たちの失望をその必然的な結果として来た失敗のように見なした。しかしその期間に起こるべき事件を間違えてはいたにせよ、遅延するかに見えた黙示の事実である事に誤りはないのだった。再臨を待望していた者に慰めがないわけではなかった。彼らは聖書研究により貴重な知識を得た。救いの計画がよりいっそう明らかにされて来た。聖書の中に毎日新しい美を発見し、聖句はまた他の聖句を説明するといったように、全体を通じて驚くべき調和があり、一言も無駄なものがない事を発見した。

私たちはこうして失望を経験したが、かつて弟子たちの味わったそれに比べるならば、彼らほどではなかったのである。神の御子イエスがエルサレムに凱旋的な入城をなされた時、彼らはイエスが王として冠を受けられるのだと信じて疑わなかった。四方より人々が雲のように集まって来て、4。「ダビデの子に、ホサナ」と叫んだ。祭司や長老たちが群衆を静めよとイエスに要求した時、彼は預言に応じないために万一人々がだまれば石が叫ぶだろうと仰せられた。このように仰せられたイエスが、弟子たちの期待したようにダビデの位に就かれるどころか、無惨な十字架にかけられ、パリサイ人から嘲りや罵りを受ける光景を弟子たちは見た。彼らの光り輝く希望は地に落ち、暗い死のかげが彼らを包んだ。それでもキリストは約束を忠実に行われた。彼がその民に与えられた慰めは喜ばしいものであり、忠実な者の受けるべき報いは豊かなものだった。

ミラー氏とその同労者たちは、ダニエル8：14に表されている聖所の清めとは、この地上が聖徒の住み家となる前に火で清められる事であると考えていた。これはキリスト再臨の時に実現するものであるから、二千三百日もしくは年の終りにおいて起こるものと考えていた。しかし私たちが失望後、熱心に祈祷とともに聖書を研究してこれを調べた結果、やがて光がやみを貫き、疑惑と不安は一掃された。

ダニエル8：14の預言は地上の清めを指すものではなく、天上において私たちの大祭司の執り行われる最終の奉仕-贖罪

の完結、再臨の日にその民を咎なく立たせるためのものだったのである。

索引 1.ハバクク 2 : 3 2.黙示 1 4 : 8 3.マタイ 2
5 : 6 4.マタイ 2 1 : 9

第 7 章 聖所問題に関する光

初めから神は大再臨運動においてその民を導かれていた。そうした証拠として運動には天来の力と栄光とが伴っていたほどであるから、運動がついに暗黒と失望のうちに終わり、空虚な狂信運動として世の物笑いの種となるような事を神は許されなかった。神は御言葉がまるで不確実で疑わしいもののように見なされる事を許されない。再臨信徒の大多数が以前の預言的期間の算定を放棄してしまった結果、次第にそれに根拠をおく運動の確実性を拒否するようになってしまった。しかし聖書の聖句と神の霊の特別な証によって保証される経験と、信仰上の要点とを放棄する事を認めない者が少数ながらいた。彼らは、きわめて公正で的確な原則に基づく解釈法を採用し、聖書研究に従事して来た事を確信していた。すでに彼らの把握する真理をかたく信じて動かされず、依然として従来と同じように聖書を研究する態度を持続させる責任がある事を信じた。熱心に祈りつつ自分の立脚点を再び研究し、自分たちの誤謬がどこにあるのかを発見する事に努めた。二千三百の朝夕の預言的期間に関する彼らの説明には、何の間違ひも見いだす事ができなかったが、さらに一步進んで聖所問題に関していっそう厳密な研究をするに至った。

聖書の数ある聖句の中でも、特に再臨信仰の根底であり大黒柱とも言うべき聖句は「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」との布告だった。

一般のクリスチャンと同じく、当時アドベンチストは聖所とは地上を指すもの、またはそのある一部分を指すものであって、聖所の清めとは、この地上が最後の大いなる日の火で焼き清められるものであると考え、またこの事件はキリスト再臨の時に起こるものであると解釈し、その結果として1844年にキリストは地上に来られるに違いないとの結論に達したのだった。

厳密な研究の結果、彼らはモーセが神の命を受け、山上で示された型に従って造築された地上の聖所は、1.「今の時代に対する比喩」であり、これに従って供え物と犠牲が献げられたのである事が分かった。本来この聖所は、2.「天にあるもののひな型」であって、私たちの大祭司であるキリストは、3.「人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる」のである。4.「キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらなくて、上なる天にはいる、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである」

二つの聖所

もともとイエスが私たちのために働かされている天の聖所は実物であって、モーセの造築した聖所はそれを模倣したものである。神は地上の聖所の増築に従事する者に御自身の霊を与えられた。聖所全体の造り具合といい、それに収めた器具類の精巧優美をきわめていた事は、神の御知恵を表すものに他ならなかった。聖所の側面の壁はその全体がきらびやかな黄金でできていたかのように見え、それに加えて純金の燭台から放たれる光をその隅々まで反射していた。また供えのパンの机と香壇とは、磨きのかかった純金のように光り輝いていた。天井には荘厳なカーテンが張られ、青と紫と緋とでもって数々の天使の形が織り出され、室内を一段と美化していた。幕を隔てて向いにある奥の部屋には、神が臨在する栄光の現れる聖なる光があり、その前には大祭司の他には立って生きられる者はいなかった。こ

のように荘厳で優美をきわめる地上の幕屋は、私たちに先立って従事されている天の聖所がどれほど光り輝き、きらびやかなものであるかを人々に思わせるものだったのである。

地上の聖所が聖所と至聖所との二つの部屋に分かれていたように、天の聖所においても二つに分かれている。地上の聖所においては、神の律法を収める箱や香壇やその他の器具が置かれていたように、天の聖所においてもこれらの実体があるのである。聖い幻を通して使徒ヨハネは、天に行く事を許され、5.「天にある神の聖所が開け」た時、そこに燭台と香壇とを見て、かつ『契約の箱』を見た。

真理を追求してやまなかった者は、天上に聖所が存在する事に対する否定できない証拠を見いだす事ができた。示されたものを型にしてモーセは地上の聖所を造築した。この時に示されたものは天の聖所であると明言している。またヨハネも天において見たと証しているのである。

神の御座

神の住居である天の宮においては、御座は義と公平の上に立てられている。至聖所には神の律法がある。この律法は全人類によって研究されるべき正義の大原則を表すものである。律法の板を収める箱は、贖罪所すなわち恩恵の座で蓋がされている。この恩恵の座の前でキリストは、罪人のために自らの血をもって執り成しをしておられるのである。このようにしてここに人類の救いの計画における公義と慈悲との結合が見られるのである。この両者の結合と一致は無限の知恵を持っている神のみが考え出されたものであり、無限の能力を持っている神のみが成就する事ができるものである。この結合と一致は、全宇宙を等しく讚美させ、驚異を与えるものである。

地上の聖所においてケルビムは、崇敬の念を表しつつ恩恵の座すなわち贖罪所を眺めていたが、これは天の万軍が贖罪の事

業に対して呼び起こされる興味と注目とを表している。実にこの贖罪問題こそは天使たちも知ることを願う神の慈悲の奥義である。これはすなわち、神が悔改める罪人を義としつつ自らが義であること、一度は墮落した人類に対して、神が再びその交わりを回復されることである。そのためキリストは、数え尽くせないほど多くの者を滅亡の淵より救い上げるために自分の身を低くして、彼らに主御自身のしみや傷のない義の衣を着せ、またかつて墮落したことの無い天使たちの交際に入れ、彼らを御前に永久にいられる様にされるのである。

聖所の清め

二千三百の朝夕の預言的期間の終り、西暦1844年にはもはや地上の聖所はなかった。すでにその形跡が消えてから長い歳月が経過していた。だから「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」との布告に現れている聖所とは、天の聖所を指すものである事はいうまでもない。それにしても、なぜ天の聖所を清める必要があるのだろうか？

再び聖書を開く時、預言の研究者は聖書でいう清めとは、単なる物質的な洗い清めを意味するものではなく、血を流す事によって成し遂げられるもの、すなわち罪からの清めを指すものである事を知るに違いない。この事については使徒パウロも、6.「このように、天にあるもののひな型は、これらのもの（獣の血）できよめられる必要があるが、天にあるものは、これより更にすぐれたいけにえ（キリストの血）で、きよめられねばならない」と言っている。

この二千三百の朝夕の預言の指示している聖所の清めが何であるかをいっそう詳しく知るためには、天の聖所における働きを知る必要がある。しかし、これはただ地上の聖所の働きを通してのみ、明らかにする事ができるのである。これはパウロが、

祭司たちは「天にあるもののひな型」に従って働いたと言っているのに照らしても明らかなのである。

日ごとの働きと年ごとの働き

地上の聖所における奉仕は二つに分かれていた。祭司は日ごとに聖所で働いたが、年に1回、大祭司は至聖所において贖いの特別な働きに従った。これは聖所の清めであった。日ごとに罪を悔改める罪人は幕屋の入口のところに献げ物を持って来ると、いけにえの頭上に手をおいて自分の犯した罪を告白した。このようにして一般的に罪は傷のないいけにえの上に移されたのだった。

次にいけにえの獣がほふられ、その血や肉を祭司は聖所に携え入れた。このような順序で罪は一般的に獣から聖所に移されたのだった。

1年を通してこのような働きが執り行われた。こうして日ごとの罪が聖所に移されたのだから、更にこれを聖所から清める働きが行われなければならなかった。そのため7月10日に大祭司は奥の部屋、すなわち至聖所に入った。その日以外に至聖所に入る事は禁じられていた。これをあえて犯す者は神によって死の厳罰をもって処される事になっていた。このようにして日ごとの働きの結びとして聖所の清めが行われたのだった。

さて、この特別な贖いの日には2匹の山羊を幕屋の入口にひいて来るとくじを引き、7.「一つのくじは主のため、一つのくじはアザゼルのため」にした。次にエホバのためのくじに当たった山羊は、民の身代わりになるべき罪祭としてほふられた。大祭司はその血を幕の内にある至聖所に携え入れ、贖罪所すなわち恩恵の座とその前に置いた。

8.「イスラエルの人々の汚れと…彼らのもろもろの罪のゆえに、聖所のためにあがないをしなければならない。また彼らの汚れのうちに、彼らと共にある会見の幕屋のためにも、そのように

しなければならない」

9.「そしてアロンは、その生きているやぎの頭に両手をおき、イスラエルの人々のもろもろの罪と、もろもろのとが、すなわち、彼らのもろもろの罪をその上に告白して、これをやぎの頭にのせ、定めておいた人の手によって、これを荒野に送らなければならない。こうしてやぎは彼らのもろもろの悪をになって、人里離れた地に行くであろう。すなわち、そのやぎを荒野に送らなければならない」

このようにして野に捨てられたアザゼルのための山羊は、再びイスラエル人の宿営に姿を現さなかった。これをひいて行った者は帰って来た時、宿営の中に入る前にその衣服を洗い、水で身をすすがねばならなかった。

これらの儀式はことごとく、イスラエル人に対して神がどれほど聖い方であるか、彼はどれほど罪を忌み嫌われる方であるかを深く心に感じさせると共に、罪に触れるならば必ず汚されずにはおかない事実を知らせるためのものだった。

この贖いの働きの執り行われている間、イスラエルの全会衆は日常の務めをすべて中断し、神の御前に厳粛にその身を低くして祈祷や断食をすると共に、深刻に自分の心を確かめたのだった。

以上の典型的な奉仕を通して、贖罪に関する重大な真理を学ぶ事ができる。罪人が血を流す代わりにその身代りとなるものが認められたが、犠牲となった獣の血では罪が消える事はなかった。だから、それは更に聖所に移されたのだった。

獣をひいて来てこれをほふり、血を注ぐ事によって罪人は律法の權威を認め、戒めを破った事に対する罪を告白し、贖い主を信じる信仰によって赦されたいとの願いを表す。それでも彼は未だにすべての律法の宣告から解放されているわけではない。

贖いの日に大祭司は、イスラエルの会衆からの献げ物を受け、その献げ物の血を至聖所に携え入れ、安置されている律法の直接の覆いとなる恩恵の座、すなわち贖罪所にこれを注ぎ律法の要求を満たした。次に彼は仲保者としての働きによって諸々の

罪を自らが受け、聖所から取り除いてそれをアザゼルのくじに当たった山羊の頭上に置いた。そして彼はことごとく罪を言い表し、それを彼から山羊に移す儀式を行った。次に山羊は連れて行かれ、それらの罪は永久に民から取り除かれたものと見なされた。

以上のように、10.「天にある聖所のひな型と影」としての働きが行われたのだった。型として地上において執行された働きは、実際に天において行われるものだったのである。昇天後、救い主は私たちの大祭司としての働きを開始された。この事実についてパウロは次のように言っている。

11.「キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらぬで、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである」

地上の形式的な働きにおけるのと同じく、昇天後キリストは聖所において働きを開始されたが、預言者ダニエルによって示された二千三百の朝夕の預言的期間の終結、1844年に彼は最後の部分の厳粛な働き-至聖所の清めを行われる事となった。

かつて民の罪が型なる地上の聖所において、罪祭の血によってその当人から聖所に移されたように、私たちの罪も、私たちの身代りとなって流されるイエス・キリストの血によって天の聖所に移される。あたかも地上の形式的な清めが、その聖所を汚した罪を除く事によって成し遂げられたように、天の聖所の事実上の清めも、そこに記録されている罪を消し去る事、すなわち取り除く事によって成就されるのである。このためには記録の諸書類を調べ、果たして誰が罪を悔改めイエスを信じる事によって、彼の贖いの恩恵を受けられるかを定める必要がある。

この意味において聖所の清めには調査審判のわざが含まれているのである。しかもこれはキリストがその民を救い出される再臨に先立って行われなければならない。なぜならば彼が再臨される時には、12.「それぞれのしわざに応じて報い」を与えるからである。

このようにして進んで行く、預言の光に照らされてこれに従

った者は、聖所の清めとは、二千三百の朝夕の終り、すなわち1844年にキリストが地上に来られる事ではなく、再臨の準備として贖罪事業を完結させるため、キリストが天の聖所の至聖所に入り、神の御前に立ってくださる事であることを知った。

真理の全体系を示すカギ

実にこの聖所問題は、1844年の神秘を開くカギであった。それは真理の全体系を示し、どれほど関連しあって調和しているかを明らかにすると共に、神の御手が再臨運動を指導する事実と、神の民の現在の立場およびその任務について語るものだった。イエスの弟子たちが苦悶と失望の夜の後に「主を見て喜んだ」ように、信仰の目をもってキリストの再臨を待望していた者に、今や喜びが臨んだ。彼らはキリストが栄光のうちに現れ、その僕たちに対して報賞を与えられることを期待したが、それは失望に終わり、一時はイエスを見失ってしまった。しかし今や再び天の至聖所におられるイエスを望み見ることができた。しかも彼は依然として憐れみと同情に富む大祭司であり、間もなく彼らの王・救済者として現れるイエスであった。

聖所から放射した光が過去・現在・未来を照らしたので、神が絶対無謬の摂理によって彼らを導かれて来たことを知った。彼ら自身がその負わされた使命を十分に理解できなかったが、使命そのものには間違いなかった。彼らは使命を宣べ伝える事によって神の御旨を成就したのであって、その苦労は決して徒労ではなかった。今や再び、13.「生ける望み」が生まれて、14「言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれ」たのだった。

ダニエル8：14の「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」という預言と、15.「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである」という第一天使の使命とは、いずれも至聖所におけるキリストの奉仕すなわち調査審判を指すものであって、民を救い悪人を滅ぼすために来られる再臨を示すものではなかった。

つまり間違いは、預言的期間の計算にあったのではなく、二千三百の朝夕の終りに起こるべき事件の誤認にあったのである。こうした誤認の結果、信者たちは失望を味わったのだったが、預言によって予告された一切や彼らが予期するために与えられた聖書中の保証はすべて成就した。

索引 1.ヘブル9：9 2.ヘブル9：23 3.ヘブル8：2 4.ヘブル9：24 5.黙示11：19 6.ヘブル9：23 7.レビ16：8 8.レビ16：16 9.レビ16：21, 22 10.ヘブル8：5 11.ヘブル9：24 12.黙示22：12 13.Ⅰペテロ1：3 14.Ⅰペテロ1：8 15.黙示14：7

第8章 再臨運動を固くする幻

待望した時期1844年が過ぎて間もなく、私に最初の幻が与えられた。それはたまたま私がポートランドのミセス・ヘインズと呼ぶ親しい愛する姉妹を訪問した時のことだった。その家の家庭礼拝において5人の者（いずれも女性）みんなが静かにひざまずいて共に祈っていた時、今までかつて感じたことのないほど強く神の力が私に臨んだ。

この時に私は光に包まれ、この世を離れてはるか高くに上げられて行くように感じた。私は地上の再臨信徒を見ようとして振り返って見たが、これを見いだすことができなかった。その時、私は「再び見よ、もっと高くを見よ」との声を耳にした。そして私の目に映ったものは、この世界からはるか高くまっすぐに架けられている一本の小道だった。この道を再臨信徒が、むこうの端にある都を目指して旅していた。彼らの後方にあるまぶしい光は、1.「夜半の叫び」であると1人の天使が私に教え

てくれた。その光は道をことごとく照らし、その道を歩む者をつまずかせないように足元を照らしていた。

その先頭には主が立っておられ都をさして導いていたので、彼らがイエスに目を留めている限り安全であった。しかし中には未だに歩み始めて間もないにもかかわらず、早くも倦怠の色を見せて、都はずいぶん遠い、もっと早く着くと思っていたなどという者もいた。その時イエスは彼らを激励するために光り輝く右の手を上げられた。その御手からは一種の特別な光が再臨信徒の上に放射され、そして彼らは「ハレルヤ」と叫んだ。しかし軽卒にも、ある者はその後ろにある光を拒んで、自分たちをこんなに遠くに導き出したのは神ではないとつぶやいた。そのために後方の光は消え、彼らの足元は真っ暗になったので、目標もイエスも見失ってしまって、つまずき倒れてついに道を踏み外して暗黒で汚れた下界に転落した。

間もなく多くの水の音のような神の御声が聞こえ、イエスの来られる日と時とを私たちに告げられた。十四万四千の生ける聖徒はその声を聞き分けたが、悪人たちはそれを雷鳴あるいは地震のように思った。神はその時を知らせると同時に、私たちの上に聖霊を注がれた。これによって私たちの顔は、まるでシナイ山から降りて来るモーセの顔のように神の栄光で輝いた。

その時十四万四千の聖徒はみな印されて全く一つとなっていた。彼らの額には「神—新しいエルサレム」の文字が記され、イエスの新しい御名が輝く星とともに現されていた。悪人たちは私たちの幸福にして聖い状態を見て大いに怒り、押し寄せて来ると私たちを投獄しようとした。この時、私たちが主の御名を唱えて手を伸べると、彼らは打ち倒されてしまった。互いに足を洗い聖い口づけをもって兄弟にあいさつを交わす私たちを、神がどれほど愛されるかをサタンに従う者に明らかにされた時、彼らは足元にひれ伏した。

人の子の出現

間もなく私たちの目は東方に向けられた。そして人の手のひらの半分ほどに思える小さな黒い雲が目映った。私たちはみな、これが人の子のしるしであることを知っていた。厳粛な感動に打たれつつ静かにそれを眺めていたが、雲は次第に近づいて来ると輝きを増し、いよいよ光を放ってついには大きな白い雲となった。その下の部分は火のように見え、雲の上には虹があった。千々万々の天使が美しい歌をうたいつつこれを讚美していた。そして雲の上には人の子が座られていた。その髪は雪のように白く波うって肩まで垂れ、頭上には多くの冠があった。御足は火のように、その右手には鎌を持ち、左手には銀のラッパを持っていた。目はまるで燃える炎のように、その民の心を見通していた。この時すべての者の顔は蒼白になり、特に神を信じなかった人々の顔は真っ黒になった。この時、私たちは一緒に「誰が主の前に立てるのか、私の衣は汚れていないだろうか」と叫んだ。天使たちは、はたと歌をやめた。しばらくは畏るべき沈黙が辺りを包んだ。やがてイエスは「その手が清い者、その心が清い者のみ立つことができる。わたしの恵みはあなたには十分である」と仰せられた。その時、私たちの顔は新たに輝き心は喜びに満ちた。天使たちはいっそう声を高くして歌いはじめた。雲はますます地上に近づいて来た。

死せる義人の復活

イエスが炎に包まれつつ雲に乗って下られた時、彼の手にある銀のラッパが吹き鳴らされた。彼は眠れる聖徒の墓を目にした時、その目を天に向けて手を上げ「覚めよ、覚めよ、覚めよ。ちりの中に眠れる者よ、覚めて起きよ」と叫ばれた。同時に激しい地震が起こり、たちまち墓が開かれて死者は不死を着せられてよみがえって来た。十四万四千の聖徒は死に別れていた友

と再び出会えた時、「ハレルヤ」と叫んだ。その瞬間、私たちは栄化され、彼らとともに上げられ空中において主に会った。

聖徒の昇天

一同は雲の中に入り、7日後には玻璃の海のところまで上昇した。この時イエスは冠を持って来ると御手でそれを私たちの頭上に置かれた。彼はまた、私たち各自に黄金の琴と勝利のシュロの葉を授けられた。十四万四千の者は、きちんと整列して玻璃の海に立っていた。その中のある者の冠は非常に輝いていたが、それほどではない者もいた。またそれぞれの冠についている星の数にも多い少ないがあったが、それぞれが与えられたもので満足していた。そして肩から足まで長い純白な栄光の衣を着せられていた。玻璃の海を過ぎて聖都を目指して進んで行く時、天使たちは私たちを取り巻きつつ同行した。イエスは栄光と権能の御手をのべ、燦然と輝く蝶番のついた真珠の門を開き「あなたたちはわたしの血潮でその衣を洗い清め、また固くわたしの真理のために立ったので中に入りなさい」と宣言された。その御声によって私たちは聖都に入る権利が与えられたことを感じつつ、その中に進んだ。

生命の樹

そして中に入って生命の樹と神の御座とを見た。その御座からは一筋の聖い川が流れ出て両側には生命の樹が茂っていた。

川の一方の岸には1本の幹があった。またその同じ川の向こう岸にも1本の幹があった。いずれも透明で純金のように見えた。最初、私はそれが2本の樹だと思った。だが、よく見るとそれは上の方でつながっている1本の樹だった。生命の川の両側にある、この樹は他でもない生命の樹だったのである。また

その枝は私たちの立っているところまで垂れ下がっていた。その実は純金に銀が混じっているようで、実に見事だった。

一同の者がその美しい場面を眺めるために木陰に座っていると、そこへかつて神の国の福音を宣べ伝え、後に神から休息を与えられて墓場に眠っていたがよみがえらされたフィッチとスタックマン両兄弟が訪ねて来て、彼らが墓にいる間に私たちがどれほど困難に遭ったかを尋ねた。ところが私たちは過去を振り返ってそれまでに会った最大の困難を思い出そうとしたが、現に私たちを包む光り輝く永遠の榮えに比べて、今までに遭遇した試練はあまりにもささいな事に思われ、語り出すことすらできず、ただ「ハレルヤ、天国は実にたやすく得られた」と叫ぶだけだった。そして私たちは黄金の豎琴を演奏したが、その響きは天のアーチに反響した。

私が幻から出て来た時、周囲のすべてが全く一変したように感じた。この世界はどこを見ても荒れ果てた場所としか私の目には映らなかった。自分がまだこの世で生きながらえる者である事に気づいた時、天の故郷を慕う思いから涙をこらえる事ができなかった。幻で美しい御国が示された私には、もはやこの世では満足する事ができなくなってしまった。

自分はこの幻をポートランドの信者たちに語ったが、彼らはそれが神からのものである事を少しの疑いもなく確信した。彼らはいずれも、主が10月の大失望後の神の民を慰め、力づけるためにこの幻を与えられたのだと深く信じた。この時の私の証には神の霊が伴っていたので、一同は非常に厳粛な感動に打たれた。神の民に光を伝えるため、未だに若くてか弱い私のような者が器として選ばれた事を思った時、私は言いつくせない畏れの思いに満たされた。神の大能のもとに私は喜びに満たされ、天の光り輝く宮に仕える天使たちによって取り囲まれているようであったが、再び目覚めて依然として死すべき身の自分を見た時、それは私にとって痛々しい変化であり、大いなる悲しみであった。

索引 1.マタイ25：6参照

第9章 安息日と天上の聖所

1846年に私がマサチューセッツ州のニュー・ベッドフォードを訪問した時、ジョセフ・ベーツ長老と知り合った。彼は早くから再臨信仰を持ち、当時その運動のためにとっても活躍していた。私は彼が真実にして礼儀正しくかつ親切なクリスチャンである事を知った。この時、彼は初めて私の証を耳にしたのであるが、深い興味を示した。私の証が終わると、彼は立ち上がってこのように語った。「私は疑うトマスである。私は幻を信じない。それにしても今夜あなたの語ったような証が真に神からのものであるならば、この世界中で私ほど幸福な者はないだろう。私の心は大きく動かされた。あなたは非常に真面目な方である。しかしあなたが私たちに語ったような驚くべき事柄が、なぜあなたに示されたかについては説明する事ができない」

当時ベーツ長老は、週の第七日である土曜日を安息日として遵守していたが、この日こそ真の安息日であると私たちに向かって強調していた。しかし私は、それがそんなに重大なものであるとは特に考えず、ベーツ長老が十戒の他の九ヶ条に比べて、第四条をこれほど強調する事は間違いではないかと思ったほどだった。

それから主は天の聖所の光景を私に示された。天において神の宮が開かれ、恵みの座すなわち贖罪所でおおわれている神の箱が私に示された。箱の上部の両端には、2人の天使が翼を恵みの座の上に広げて目をそれに注ぎつつ向かい合って立っていた。私に同伴している天使が、これは神の御指によって記された神の律法に対し、全天使軍があがめつつこれを見つめている光景を表すものだと説明した。

この時イエスが箱のふたを取り除かれたが、中には十戒の記された2枚の石の板があった。十戒の中心である第四条からは、ある種の柔らかな後光が発しているのを見た時、私は驚きを禁じ得なかった。先ほどの天使が、この第四条こそは「天と地と海とその中のあらゆるものを造られた生ける神を明らかにする

唯一のものである」と語った。

地の基礎が据えられた時、安息日の基礎も据えられたのである。創世以来、真の安息日が遵守されて来たならば、無神論者・懐疑論者は存在しなかった事を私は示された。安息日が遵守されたならば、全世界は偶像化するはずはなかったのである。

第四条の戒めが今日まで踏みにじられて来たので、私たちに戒めの破れを修復する事が神から命じられていると共に、安息日の汚されている事に対して人々の反省を促すことが求められているのである。神よりも自分を高くする罪の人は時と律法とを変えることを望み、安息日を週の第七日から第一日に変更した。こうした事によって彼は律法の破れを生じさせた。だから、この反キリストによって破れを生じた律法の修復、すなわち律法に対する従順に帰るべき警告使命が神の大いなる日の前に発せられるのである。すなわち律法に破れの生じた事に対して、言葉と実行をもって人々の注意を喚起しなければならなくなったのである。

イザヤ書に示されている尊い約束は、真の安息日の回復に尽す者に適用するものである事を私は示された。

神は言われる。1。「もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ（る）…ならば、その時あなたは主によって喜びを得（る）」。安息日をキリストの創造と贖罪能力のしるしとして信じて受け入れる者には、それは必ず喜びとなるに違いない。必ずその中にキリストを認め、彼にあって喜ぶ事ができるのである。こうした者に向かって安息日は、キリストの偉大な贖罪能力の実証としての創造の御業に注意させるに違いない。それは彼らの心に、失われたエデンの平和を思い起させると共に、救い主を通して回復される平和について語る。自然界のあらゆる事物は、イエスの仰せられた、2。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」との御言葉を反映している。

神の戒めとイエスの信仰とを宣布する第三天使の使命は、3.

いま宣べ伝えられる使命を信じて受け入れ神の戒めを守るべき事、この戒めこそは神にとって目の球のように大切なものである事を、声高らかに全世界に警告する民である事、このようにして警告の発せられる結果として、多くの者がエホバの安息日を信じて受け入れる事を示された。

索引 1.イザヤ58：13,14 2.マタイ11：28
3.黙示14：9-12

第10章 天上の聖所

1847年4月3日ストックブリッジ・ハウランド兄弟の家で開かれた、安息日の集会に出席した一同の者はその日、今までにないほど熱心に祈っていた。一同の者が祈っている時に聖霊が降下した。私たちは大きな喜びに満たされた。すると間もなく私は地上の事物を感じなくなり、栄光に満ちあふれる幻に包まれてしまった。

1人の天使が速やかに私のもとに飛んで来るのを見た。またたく間に彼はこの私を地上から天上の聖都へと運び去った。聖都には宮があった。私はその中に入った。私は門をくぐって第一のバールのところまで来た。この時バールが上げられ私は聖所に入った。この聖所で私は香壇・七つの燭台・供えのパンの机を見た。燦然とした聖所の光景を見せられてから、さらにまたイエスは第二のバールを引き上げられた。私は至聖所に入った。

至聖所において私は1個の箱を見た。その上部も側面も純金でできていた。箱の両端には優美な天使が1人ずついて翼を箱の上に広げていた。彼らは向かい合って下の方を見ていた。この天使の間には1個の純金の香炉があった。また天使の立って

いる箱の上には輝く栄光があり、神の座られる御座のようであった。イエスは箱のそばに立っておられた。聖徒の祈祷が彼の許にとどくと香炉には煙が立ちのぼり、イエスは彼らの祈祷を香の煙とともに父なる神にささげられた。

この箱の中にはマナを収めた金の壺と芽を出したアロンの杖と石の板があった。この石の板はまるで本のように折り重ねてあった。イエスがこれを開かれた時、私はこれが神の指で書かれた十戒である事を知った。一方の石の板には第四条まで記され、もう一方には残りの六ヶ条が記されていた。最初の実四ヶ条の記されている石の板の方は残りの六ヶ条の記されている方よりも輝いていた。とくに第四条すなわち安息日の戒めは他の九ヶ条よりも際立って輝いていた。なぜならば本来、安息日は神の聖い御名をあがめるために守るべきものとして、特に区別されたものだからである。安息日の戒めは実に光り輝くものに見え、そこからは一種の後光がさしていたほどだった。私は安息日の戒めが決して十字架によって釘づけられたものではない事を知った。万が一そうしたことが事実であるとするならば、他の九ヶ条の戒めも同様となり、第四条だけではなく十戒全部を犯してもよいという事になるのである。しかし神は、御自身が変わりのない方であるように、絶対に安息日を変更されない事実を私は知った。週の第七日から第一日に変更した者は法王であって、彼は時と律法とを変えるように望むことが示されているのである。

万一神が安息日を第七日から第一日に変更されたのであるならば、現に天の宮の至聖所の箱の中に納められている石の板に記されている安息日の戒めの言葉を改められるに違いなく、第一日は汝の神エホバの安息日なれば……となっているはずであることが私に知らされた。しかしその石の板には、シナイ山においてモーセに手渡された時と少しも変わらず、神の指で石の板に「第七日は汝の神エホバの安息日なれば……」と記されている事実を知り、また実際に私はそれを読んでみて、その通りであることを確かめたのである。本来、安息日は神を愛し、キ

リストを待望する聖徒たちの心をむすぶ重大な問題であることを知った。

また未だに安息日に対してこのような認識をせずに、これを守らない子らを神が持っていることを私は見た。彼らは安息日の光を否認していない事、悩みの時の開始にあたって、私たちは聖霊に満たされて出て行き、より力強く安息日の真理を宣布する事、またこの事実によってとうてい安息日の真理を論破する事ができないために一般教会が激怒する事、この時に神によって選ばれた者はいずれも私たちの主張が真理である事を認め、決起して私たちの中に加わり、ともに迫害を受ける事を示された。

悩みの時

私は剣と飢饉と疫病と一大混乱状態が全地に出現する光景を見た。悪人たちは私たちがこのような災難をもたらしたものであるように考えて、立ち上がって互いに協議して、地上から私たちを一掃しようとした。こうした処置をするならば災難は阻止できるものと彼らは考えたのである。

悩みの時に、私たちはいずれも都市や村落から逃れた。その時、悪人たちは私たちを追跡して来た。彼らは刀を手にして聖徒たちの家に侵入して来た。彼らは刀を振りあげ私たちを殺害しようとしたが、その刀は折れ、まるでわらのように力なく落ちた。この時、私たちは救い出される事を日夜、神に叫び求め、その叫びは神の御許に達した。

太陽は忽然として現れ、月は停止したままでいた。水流はその流れを止めた。黒々とした暗雲が沸き上がって来ると互いに激突した。しかし雲の間で輝いている光が射して来て、その場所から神の御言葉は多くの水の音のように響きわたり、天地を揺り動かした。天空は開いては閉じ、閉じては開いて互いに衝突した。山々は風になびく葦のように揺れ、辺りに角の立った

岩を投げ出した。海はるつぼのように沸き立って巨岩を陸に投げあげた。

いよいよ神はイエスの再臨の日と時間とを布告するとともに、その民に対する永遠の契約を実行される事となった。この場合、神は1句ごとに区切って語られるが、御言葉は地上に響きわたった。その時、真のイスラエルなる神の民は、天を仰いでこれをじっと見つてエホバが親しく語られる御言葉に耳を傾けた。その御言葉はまるで雷鳴のように地上に響きわたった。それは実に恐ろしいほど厳粛な光景であった。御言葉の1節1節が終わるたびに、聖徒たちは口々に「ハレルヤ、御栄あれ」と叫んだ。彼らの顔は栄光で輝き、その栄光はまるでシナイ山からモーセが下山した時のような輝きだった。悪人たちは目がくらんで聖徒たちを包む栄光を見るにたえなかった。安息日を聖く守り神をあがめる者の上に無限の祝福が布告され、獣とその像とに勝利した事実に対して勇ましい凱歌があがった。

その時、地の休むべきヨベルが開始された。私は敬虔な奴隷が束縛の鎖を切断し、悠々と凱歌をあげつつ立ち上がるのを見た。一方、彼らを拘束していた悪人たちは、神の御言葉を理解せずに狼狽して何も知らない様子だった。

たちまち大きな白雲が現れた。それは今までかつてないほど美しく見えた。その上には人の子が座っておられた。最初、私たちはイエスが雲に座られている事は分からなかったが、いよいよそれが地上に近づくにつれて慕わしい御姿を見る事ができた。この最初に現れた雲は、人の子のしるしが天に現れるしるしであった。

神の御子の声は眠れる聖徒たちを呼び起こし、栄光不死の衣をまとして出現させた。また生ける聖徒はまたたく間に栄化されて、彼らとともに雲の車に乗せられて携え上げられた。車が回転して上昇するにつれて光り輝くものがあった。車の両側には翼があった。その下には輪があった。車が回転して上昇する時に「聖なるかな」と言った。また雲を取り巻く天使たちも「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな主なる全能の神よ」と叫ん

だ。雲の中にいる聖徒たちも「ハレルヤ、栄光あれ」と叫んだ。車は回転して聖都を目指して上昇していった。イエスは黄金の城の門を開いて私たちを迎え入れられた。すでに私たちは、1.「神の戒めを守り」続けて来たので、ここで私たちは歓迎を受けると、2.「いのちの木にあずかる」に至ったのである。

索引 1.黙示14：12 2.黙示22：14

第11章 再臨運動とその与える教訓

(註) 1843-44年の運動が宇宙からどのように観察されていたかが後にホワイト夫人に示された。この啓示は1843-44年においてキリスト再臨を待望する者の経験および天の聖所におけるキリストの働きに関して光を与えるものである。

全天の注意はじっと地上に進行しつつある御事業に注がれている事を私は示された。イエスは地上の住民を警告して再臨の準備を行わせるために、1人の偉大な力を持つ天使を遣わされた。その天使が天上のイエスの御前を去る時、燦然と輝く光が彼の前を進んだ。

彼の遂行すべき任務は地上を栄光で輝かし、来るべき神の怒りから人々を免れさせる事であると私に示された。その結果として多くの人々が光を受けた。それはある者にとっては非常に厳粛に見えたが、他の者には大きな喜びであった。この光を受けた者は、みな顔を天に向けて神を讚美した。

その光はすべての者に向かって投げかけられたが、ある者はただそれに照らされるだけで心からこれを迎えなかった。多くの者は大きな怒りに満たされた。牧師たちはこのような人々と結合して、偉大な力を持つ天使によって放たれた光を断固と

して拒否した。それに対して光を受けた者は、世から退いて互いにしっかりと結合した。

サタンとその部下の悪天使たちは、できる限り多くの人々をこの光から背けさせようとして人の心を誘惑した。光を退けた者は暗黒のうちに放置された。私はその天使が神の民を任せられた者たちの上に深い興味を持って、天から与えられた使命が彼らの前に示される時、彼らがその品性をどのように啓発するかを記録するために注意している様子を見た。しかもイエスを愛すると公言する多くの者が、天から与えられた使命を侮蔑・嘲笑・嫌悪し、これに対して羊皮紙の巻物を手にする1人の天使は彼らに関する恥辱きわまる記録をとり、全天はイエスが神の民と称する者たちによってこのように軽視される光景を見て激怒する様子を見た。

神の摂理

私は人々が予期した時に来られなかったために失望したのを見た。未来を隠すとともに神の民を右か左かの決定にまで追いやられたのは、全く神の摂理に基づくものであった。キリスト再臨に関する確かな日時を説く事をせずには、おそらく神の意図される働きは成就されなかった事であろう。サタンは多くの人々の心に、審判および試練の終結と関連する大事件は、はるか遠い未来のように思わせていたのである。だから人々は現在の急速に準備する必要について強調されなければならなかったのである。

予期された時期が経過した時、前述の天使が照らした光を十分に受け入れなかった者は、使命を軽視する者たちと結合して、失望状態にある再臨信徒を愚弄した。天使たちはクリスチャンと自称する者の実状に注意した。待望していた日時は経過したが、ある意味においてこれは彼らを試験するためのものだった。この時、多くの者は秤で計量されて、その重さが足りない事が

現れた。彼らはクリスチャンであると公言していたが、ほとんど全ての点においてキリストに従う者としては落第であった。

口では自分はイエスに従っていると公言しながら、こうした状態であるのを見てサタンは得意になって喜んだ。サタンは彼らを自分の罠に陥れてしまった。彼は大部分の人々を正しい道から迷い出させて、他の道から天に到達させようとしているのである。シオンにおいて罪人が神聖・純潔な者の中に混ざり、その中に世俗を愛好する偽善者の混じっている事実を天使たちは見た。彼らはイエスの真の弟子たちを見守っていた。けれども汚れた者が聖い民に悪影響を及ぼしていた。イエスに出会う欲求に満たされている者に、彼らのにせ兄弟たちは、キリスト再臨について語る事を禁じてしまった。天使たちはこうした光景を眺め、彼らの主なるキリストの再臨を慕う残りの者に対して同情した。

いま1人の権威を持つ天使が地上にくだる事を命じられた。イエスは彼に書き物を手渡された。この天使が地上に来た時「バビロンは倒れたり、倒れたり」と叫んだ。この時、失望していた者は再びその目を天に向け、信仰と希望とをもって主の再臨を待望するようになった。しかし多くの者はまるで麻痺状態で眠っている者のようだった。そして彼らの顔には深い悲しみの跡があった。

時の延期

失望した者たちは、聖書によって彼らが延期された時にあって、忍耐して幻の成就を待たなければならない事を知った。1843年に現れるべきものとして主を待望したのと同じ根拠が、1844年に現れるべきものとしての彼を期待させた。しかし、この時には1843年に表されたような熱心さを、多くの者は抱いていなかった事実を私は見た。失望が彼らの信仰を消沈させたのだった。

神の民が第二天使の叫びに参加した時、天の万軍はその使命の結果について深い注意を払った。彼らは、クリスチャンと称する多くの者が失望を味わった者たちを嘲笑・侮辱する様子に目をとめた。彼らが「あなた方はまだ天に昇りませんね」と愚弄した時一人の天使はこれを記録にとどめた。天使は語った。「彼らは神を嘲っているのである」と。

イエスはさらに天使たちに命令を下し、速やかに地上に飛んで行かせた。すなわち神の民がその信仰を失う事のないように、彼らを力づけて奮い立たせるとともに、第二天使の使命を理解させるため、また緊急の働きが間もなく天において行われる事に対して、準備させるために遣わされたのであった。これらの天使たちが、その負わせられた任務を果たして第二天使の働きを援助するために、大いなる権威と光とをイエスから受けて急速に地上に飛んで行く様子を見た。

大いなる光

その天使たちが、1.「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と叫んだ時、神の民は大いなる光に照らされた。この時、失望していた者たちが立ち上がって、第二天使と声を合わせて「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と叫んだ。

天使たちの放射する光は至る所のやみを照らした。サタンと悪天使たちはこの光が照り渡って、その効果を発揮させないために何度もこれを阻止した。彼らは天から遣わされた天使たちと争い、神は人々を欺いた、天使たちによって光と権威とが現されたにもかかわらず、世界にキリストの再臨を信じさせる事ができなかったのではないかと抗議した。躍起となってサタンが妨害して人々の心を光からそらそうとしたにもかかわらず、依然として天使たちはその働きを継続した。

光を受け入れた者は喜びに溢れる者のようだった。彼らは天を注視しつつイエスの御再臨を待ち望んでいた。また、ある者

は涙を流しつつ祈っていた。彼らの目は自らに注がれて上を仰ぎ見ないようだった。しかし天からの光がやみを貫いて彼らを照らし、今まで自分を眺めて絶望状態にあった者が、みるみる上を仰いで感謝と聖い喜びにあふれた。こうした忠実な者や待望している者に対して、イエスと全天使軍は称賛をもってこれを眺めた。

第一天使の使命による光に反対してこれを否認した者は、第二天使の使命が放つ光をも見失い、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」との使命に伴う権威と栄光によって益を受ける事ができなかった。イエスの御顔にはご不満な様子が表された。なぜならば彼らはイエスを軽蔑して否定してしまったからである。

それに対して使命を信じて受け入れた者は栄光の雲によって包まれた。彼らは神の御旨に反する事を非常に畏れて、御旨が明らかになるまで立ち止まって祈っていた。この時サタンと悪天使たちが上から降りてくる光を遮断しようとしている様子を私は見た。しかし待望者たちが光を持っている限り、その目を地から天に向かってイエスに注いでいる限り、この尊い光から彼らを阻む能力がない事を知った。天から与えられた使命にサタンとその部下は激怒した。そして彼らはイエスを愛すると公言しつつも再臨を軽蔑する者たちを使って、依然として忠実な者たちを嘲笑・侮辱させた。1人の天使は、にせ兄弟たちが忠実な者たちに投げかける、あらゆる侮辱・軽蔑・邪悪に注意した。

分 離

多くの者は「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」との叫びをあげてイエスの再臨を喜んで迎えず、また再臨の事について語るのを禁じる者たちのもとを離れた。イエスは再臨を軽んじてこれを否認する者たちから顔をそむけて、天使たちに神の民が汚される事のないように汚れた者の中から連れ出せと命じた。使命に忠実な者たちは断固として立ち上がり一致団結した。彼ら

には聖い光が照り輝いていた。彼らは世を捨て、地上の興味と利害とを犠牲にし、地上の富を放棄し、熱烈に天を眺めて彼らの敬愛する救済者の出現を待望した。彼らの顔には聖なる光が輝いていたが、それは心の中に宿る平和と喜びとを物語っていた。

イエスは天使たちに命じて、彼らを激励・支持された。それは引き続き彼らが試みの時を経験しなければならなかったからである。これらの待望者たちは、経験しなければならないだけの試練を通っていない事が私に示された。未だに彼らは完全に誤謬から抜け出してはいなかった。神はその憐れみのゆえに、地上の住民を警戒して、彼らが嚴重に自分の心を確かめて、聖書を研究し、長い間にわたって異教徒と法王教徒によって伝承して来た誤謬を除去する使命を再び宣布されたのである。これらの使命によって神は、その民を引き出し、いっそう大きな能力に満たされつつ活動できるように、そして神の戒めをことごとく守れるような境地にまでしようとされたのである。

予期された時にイエスに出会う事ができなかった神の民の大きいなる失望に関して、神は私に示された。彼らはなぜイエスが来られなかったのか、その理由を理解するのに苦しんだ。彼らは預言的期間がその時で終わったのではないというような証拠を少しも発見する事ができなかった。この事について天使が私に語って聞かせた。「果たして神の御言葉は成就する事なしに外れてしまったのだろうか？ 神はその御約束を成就せず失敗したのだろうか？ いいえ、神は約束の全てを成就された。イエスは立ち上がって天の聖所の戸を閉じられた。そしてすでに至聖所の戸を開き、聖所の清めをするためにその中に入られた。忍耐して待つ者には神秘も明らかとなるのである。人には誤る事がある。しかし神には少しの失態もない。すでに神の約束される全てが成就した。しかし人は誤ってその預言的期間の終りに関して、彼らが聖所と思っているこの地上が清められるものと解釈したのである。だから失敗したのは人間の期待であって、神の約束ではなかったのである」

聖所問題の再研究

イエスは天使たちに命じて失望している者の心を至聖所に向かわせた。実にこの至聖所こそが、聖所の清めを行なってイスラエルのために特別な贖いをするために、彼が入られた所である。イエスは天使たちに、彼を見いだす者は誰でも、彼がどのような働きをされているかを理解するに違いないと仰せられた。

イエスがカルバリーにおいて死なれた時、2.「すべてが終わった」と叫ばれたが、この時、3.「神殿の幕が上から下まで真二つに裂け」てしまった。この事実は、地上の聖所の働きが永久に終わって、もはや神が地上の宮において民の献げる犠牲を受けるために祭司を用いられない事を意味した。この時イエスの血は流されたが、彼の御手によって天の聖所において献げられるものだったのである。

ちょうど祭司が1年に1回、地上の聖所の清めのために至聖所に入ったように、イエスもダニエル8章の二千三百の朝夕の終りである1844年に、彼の執り成しを願う者の最後の贖いをするために、そして聖所の清めを行なうために天の至聖所に入られたのである。

索引 1.マタイ25:6 2.ヨハネ19:30 3.マタイ27:51

第12章 新天地の幻

(註) 彼女に第一の幻が与えられてから約1年後、ミセス・ヘインズの家を訪問した際、ミス・ハーモンに本章の幻-キリスト再臨後千年期の終りにおける聖都の降下と新天地の幻が与えられた。(黙示21:10-27、ゼカリヤ14:4)

イエスを先頭に私たちは聖い都、新エルサレムを出てこの地上に下り、ある大きな山の頂に足をつけたが、山はイエスをおくのに耐えられず2つに分かれて大きな平原となった。その時、私たちは12の基礎と四方に3つずつ12の門があり、いずれの門にも天使の立っている大いなる聖都を見る事ができた。これを見ると私たちは大声で「新エルサレムの大いなる都、神のもとを出て天より下る」と叫んだ。聖都エルサレムは次第に私たちの立っているところに下りついに定着した。

次に私たちの注意は新エルサレムの外側にある光り輝くものにひかれた。そこには優美な真珠がちりばめられた7本の柱で支えられている、全体が銀で輝く邸宅を見た。これは聖徒のために備えられた邸宅だった。どの家にも中には金で造られた棚があった。私が見ている間に聖徒たちが邸宅に入り、燦然と輝く冠をぬいで棚の上に置き、再び外に出て周囲の畑で何かしていた。しかし、それは私たちがこの地上でするのは趣が違っていた。彼らの頭上からは栄光が放たれて、その口からは美しい讚美の歌があがっていた。

私は色とりどりに咲き誇った畑を見た。私がおその中の花を摘んだ時「これはいつまで経ってもしほまない」と声を上げずにはいられなかった。次に美しい草の高くのびている野原を見た。草は一面みどりで生き生きとして、そよ風に金の波、銀の波をなびかせつつ、王であるイエスの栄光を表していた。次に外側の草原に行ってみたが、そこにはあらゆる動物がいた。ライオンや羊やヒョウやオオカミなどが、完全な平和のうちに群がって遊んでいた。私たちはその中を通ったが、彼らは素直に優しく後について来た。次に私たちは森の中に入った。森といってもそれは地上にあるような陰気なさびしい森ではなかった。そこも栄光で輝いていた。梢をわたる風に静かに揺れる木の枝を見て、私たちは「我らは荒野にありても安全に住み、森の中にも臥してまどろむ事ができる」と歌った。この時、私たちはシオンの山を目指して森を通っていた。

その途中、私たちは辺りの美しい光景を眺めている一群の人たちに出会った。彼らは紅の縁のついている純白の衣を着て、光り輝く冠をつけていた。彼らにあいさつをしながら、私は主イエスに彼らはいったい誰であるかと尋ねた。イエスはそれに答えて、彼らは私の名のために殺された殉教者たちであると仰せられた。また数え尽くせない多くの幼子たちが、同様に紅の縁の衣をつけて彼らとともにいた。

シオン山は私たちの目の前にあり、山上には光り輝く宮があった。その辺りには7つの山があり、山々にはバラと百合の花が咲いていた。子供たちがその山に登り、あるいは望むならば翼をもってその頂上に飛んで行き、永遠にしぼむ事のない花を摘んでいるのを私は見た。宮のまわりにはこれを美化するために種々の樹木が植えられていた。ツゲ・松・モミ・柚子・桃・ザクロ、また枝もたわわに実のたくさんなっているイチジクなど-これらの木でその場所がとても優美になっていた。いよいよ私たちが聖い宮に入ろうとした時、イエスは愛のこもった御声で「ここに入れる者はただ十四万四千のみである」と仰せられた。私たちはそれに「ハレルヤ」と答え、ともに進んでいった。

この宮には、真珠がちりばめられた7本の純金の柱があった。宮の中で私が見た驚くべき事物については十分に描写する事ができない。カナンの言語を私が話す事ができるならば、このよりよい世界の栄光を少しでも語る事ができると思う。私は十四万四千の者の名前が石の板に金の文字で刻みつけられているのを見た。

光り輝く光景を見てから私たちは外に出た。この時イエスは私たちをそこに置いたまま聖都を目指して歩いて行かれた。間もなく私たちは、彼が愛のこもった御声で「わが民よ来たれ。あなたがたは大いなる悩みを通過し、御旨を行ない、わたしのために苦しみを忍んだために、わが饗宴にあずかるのだ。わたしは自ら、あなたがたのために給仕しよう」と仰せられるのを耳にした。私たちは一斉に「栄光、神にあれ。ハレルヤ」と叫びつつ聖都に入った。

そこに純銀のテーブルが広げられているのを見た。テーブルの長さは数マイルに及んでいた。私たちは容易にこれを見渡す事ができた。私は生命の木の実、マナ、アーモンド、イチジク、ザクロ、ブドウ、その他にも多くの果実がその上に置かれていたのを見た。

私はイエスに、その果実を頂きたいと願い出たが、主は「今は食べる時ではない。食べる者は再び地上に帰れない。しかし終りまで忠実であれば、間もなくあなたは生命の木の実を食べ、生命の泉から飲む事ができる」「あなたは今、地上に帰り、あなたに示された事について証をしなさい」と仰せられた。すると1人の天使が静かに私をこの暗い地上に連れ戻した。

第13章 他世界を訪問する

神は私に他世界の様子を示された。翼が私に与えられ、1人の天使に案内されて、聖都を出て美しく光り輝く場所に連れて行かれた。そこの草は生き生きとした緑であり、鳥は嬉しそうにさえずり歌っていた。そこの住民の背丈は様々であり、気高くて威厳があり、優美であった。彼らにはイエスの姿が反映し、その顔は聖い喜びで輝いていたが、これはその場所がどれほど幸福で自由な場所であるかを表すものだった。地上の住民に比べてこの場所の人たちがなぜこんなに美しいのかと彼らの中の1人に尋ねたところ、彼らの答えはこうであった。「私たちは神の戒めに絶対の服従をして来た。地上の住民のように不従順で、墮落するような事をしなかったからである」

次に私は2本の木を見た。その1本は聖都にある生命の木によく似ていた。実は両方とも美しかったが、一方を食べる事は許されていなかった。もちろん両方とも食べようと思えば食べ

る事ができたが、一方は食べる事を禁じられていた。案内役の天使が私に語った。「ここでは誰も禁断の木の実を食べた者がいない。万一食べたとすれば必ず墮落するに違いないのだから」

次に私は7個の月のある世界に連れて行かれた。そこで私はかつて地上から昇天した義人エノクに会った。彼は右手に光り輝くシュロを持っていた。そのシュロの葉にはいずれも勝利と記してあった。彼の頭の辺りには燦然と輝く純白の花環があった。花環の葉といずれの葉の中央にも「純白・聖潔」と書いてあった。またその花環の周囲には様々な色彩の宝石があり、星よりも輝かしい光を放って、葉の文字に反射してそれらをいっそう美しくしていた。彼の頭の後ろには虹があり、それは花環を包んでいた。また虹の上には「聖」と記してあった。花環の上には美しい冠があり、太陽よりも光り輝いていた。私はエノクに、地上から直ちにこの場所に昇天したのかと尋ねた。「そうではない。聖都、新エルサレムは私の住居で、私はこの場所を訪問中なのである」と答えた。彼はそこが自分の住所であるかのようにあちこちを歩いていた。私に同伴している天使に、その場所に私を留まらせてくれるように願った。暗黒の地上に再び帰る事は、私にとって耐え忍ぶ事ができなかったからである。しかし私に天使は告げた。「あなたは帰らねばならない。あなたが神に忠実であるならば、あなたは十四万四千と共にすべての他世界を訪問し、神の御業を見る特権にあずかるだろう」と。

第 2 卷

第 1 4 章 公生涯に入る

本書の第 1 巻においてエレン・G・ハーモンの初期の経験-彼女の全き悔改め、救霊事業への献身について述べた。年齢わずか 16 歳の身であり、加えて病苦に悩まされながら、あるいは公会において、あるいは各家庭を訪問しつつ主の御旨を宣べ伝える者となった。彼女は徹底的な再臨信徒ではあったが、それにしても各教派の牧師あるいは指導者たちが、彼女を招待して会衆に聞かせるほど、彼女の体験は深くかつ豊かなものであり、その証言は力あるものであった。

彼女の信仰経験に対して、全き信頼を持つ彼女の父は、諸教会の講演に彼女と同行した。旅行中の出来事および彼女に示された事柄について、次のように彼女は述べている。

最初の幻に接してから 1 週間後に、私には第二の幻が示された。それには主が私に示された事を人々に伝えなければならない事、さらに私の経験しなければならない試練の事が明らかにされた。それとともに、私は激しい反対に出会わなければならない事、心が裂けるほどの苦しみに出会わなければならない事、それでも神の恵みはこれらに耐え忍んでもあまりある事が示された。

幻から出て来た時、私は大きな不安に襲われた。それは人々の前で真理を伝えなければならない責任が負わせられていたからである。当時の私の健康状態は良好ではなく、絶え間なく体に痛みをおぼえ、誰の目にも私がいかに長くは生きられないと考えていたほどだった。未だに年も若くて 17 歳の事であり、加えて身体は虚弱で、いっこうに世間に慣れず、恥ずかしがり屋で引っ込み思案な性格だったので、知らない人の前に入るほ

ど苦痛に感じる事はなかった。

数日間、夜遅くまでこの重荷が私から取り去られて、他のこれを負う資格のある人々に与えられるように祈った。しかし私が負わなければならないとの責任感は、依然として変わらず、天使の声は絶えず私の耳に「わたしがあなたに示した事柄を人々に伝えよ」とささやくだけであった。

今まで神の霊が何らかの務めを私になされた時、必ずイエスの愛と私のためになされるくすしき御業とを思う事によって、自分の弱さとあらゆる恐怖とを忘れて、自分というものを超えて来た。

しかし、このたび命じられた事を行うことは、とうてい不可能であるかのように、必ず失敗に終わってしまうと感じるようになった。これに伴う試練には耐えられないと思えた。未だに年若い私がどうして、あちこちを旅行して聖い真理を説くことができようか？ 私の心はこうした思いによる恐怖でおののいていた。私より2歳年上のロバートの健康がすぐれず、加えて私以上に恥ずかしがり屋だったので、私と同伴するというような事はとうてい考えられないことだった。また私の父は働いて家族を支えなければならず、商売の手を休めるわけには行かなかった。しかし彼は再三繰り返して、神が私に旅行して御旨に従うように思っておられるならば、神は必ず私のために道を開いてくださるに違いないと力説した。しかし、こうした父の励ましも、失望に陥ってしまっている私には何の慰めにもならず、前途はとうてい私の乗り越えられない困難で塞がってしまっているように思われた。

後から起こってくる責任感から逃れようとして、私は死ぬ事さえ願うようになった。ついに今まで長く私の心に宿っていた快い平和は去り、再び失望の雲に私の心は閉ざされてしまった。

兄弟姉妹たちの激励

ポートランドにおける信者たちは、私が苦悩している事には気づいていた。しかし失望の原因となっている私の精神状態については、誰1人として知る者はなかった。神の不思議な業とあふれる恵みを受けたにもかかわらず、こうした状態になったのは私の罪のためであると思っているようだった。父の家で集会が開かれたが、私は心の苦痛に耐えかねて、しばらくこれに欠席した。ますます私には果たすべき責任が明らかになり、心は苦しみで耐えきれないまでになってしまった。

兄弟姉妹たちの熱心な勧めにより、自分の家で開かれる集会に私は出席した。教会で私の事について特別に祈ってくれる事になった。私たちが父親のように親しんでいたペアソン氏（私の初期における、神から表された事について反対した）も、この時は熱心に私のために祈り、私の意志のすべてを神の意志に服従させるように勧めてくれた。優しい父親のように慰め励まし、私が決して罪人の友であるイエスによって捨てられたのではない事を信じるように忠告してくれた。

私はあまりにも弱く、また失望状態にあったので自分で奮い立つ事はできなかったが、教会の兄弟姉妹たちの祈祷と心を合わせた。今や私は世俗の反対などには耳を傾けず、ひたすら元通り、神の御心にかなう者となる事ができるならば、どのような犠牲も喜んで受ける心境になった。

私が使命を果たすために、力と勇気が与えられるようにとの祈りが捧げられていた時、今まで私を包んでいた暗雲が私から離れ、突如として光が私に臨んだ。同時に火の玉のようなものが私の胸の上を打った。私の力はすっかり抜けて床に倒れてしまった。私の前には多くの天使がいて、その1人は再び「わたしがあなたに示した事柄を人々に伝えよ」と同じ事をくり返した。

神経痛のために祈りの時にひざまずく事のできなかったペアソン氏は、このすべての出来事を目撃者だった。私が十分に見

る事も聞く事もできるようになった時、彼は椅子から離れて次のように語った。「私は少しも見ようなどとは期待していなかった事柄を今日撃した。天から1つの火の玉が落ちて来て、エレン・ハーモン姉妹の胸の上にあたった。私はそれを見た。それを見た。私は決してそれを忘れる事ができない。それは私の考えを全て一変してしまった。エレン姉妹よ、主にあって雄々しく立ちなさい。今晚からは私は二度と疑わない、私たちはこれからあなたに反対するどころか、できるだけの助けをしよう」

傲慢に陥ることを怖れて

それまで、いつも私に襲って来た恐怖があった。私が神の命に従って出て行き、いと高き者である神によってどれほど愛されたのか、そして受けた啓示と幻とを語る場合、あるいは私が傲慢の罪に陥り、自分を正当な地位以上に高め、その結果、神の御不興を招き、ついに自分の魂を失いはしないかという心配だった。これまでもこうした例のあったことを私は知っていて、こうした危険の大きい試みに陥ることを私は怖れていた。

もし私が、神が私に示された事柄を語らねばならないとしても、できればこの傲慢の罪に陥ることがないようにと懇願した。これに天使は答えて「あなたの祈りは聞かれた。必ずこたえられる。万一あなたの怖れている罪があなたを襲う時、必ず神はその御手を伸べてあなたを救われるに違いない。苦難によって神はあなたを彼に近づけ、謙遜でいさせて下さるであろう。あなたの使命を忠実に伝えよ。終りまで忍耐せよ。そうすれば、あなたは生命の木の実を食べ、生命の水を飲むことができるだろう」目が覚めて地上の事を思い出した時、どんな事があっても主の命じられる事はことごとく果たそうと、すべてを主にゆだねた。

弱さに対する勝利

間もなく神の導きによって道が開かれ、義兄に伴われて家から30マイル離れているポートランドの姉たちを訪ねた。そこで私は証をする機会が与えられた。ほとんど3ヶ月というもの、私はのどと肺とを患っていたので、小さな低い、枯れた声でしか話す事ができなかった。この時、私は会場に立ってかすかな声で語りはじめた。5分間ほど話していると、のどの痛みが急にとれて、明朗な声で力強く話す事ができるようになった。そしてほとんど2時間、何の不自由も感じずに話しつづける事ができた。私が使命を伝え終った時に、声はまた前のように出なくなかった。再び会衆の前に出た時、前と同じように声が出た。そこで今となっては、自分が神の御旨を果たしている事を絶えず確信させられて、働きの上でも著しい効果が見られた。

不思議な事にメイン州の東部に行く道が開けた。ウィリアム・ジョルダン兄弟が、その姉妹を同伴して商用でオリングトンに行く事になり、私も同行するように勧められた。神の開かれた道には必ず行くと主に約束していたので、私はこれを拒むわけには行かなかった。その場所で私が使命の証を立てた時、聖霊がともに働かれた結果、多くの人々が喜んで真理を迎え入れた。また失望していた者も励まされ、再び信仰の道に入るようになった。

オリングトンで、私はジェームス・ホワイト長老に会った。彼は私の知人の多くを知っていて、彼自身も救霊事業に従事していた。私は神の命じられた証をして、その度に神の御承認を実感しつつ、それから間もなくポートランドに帰った。

第15章 結婚後の伝道

1846年8月、エレン・ハーモン嬢はジェームス・ホワイト長老と結婚した。この結婚について、またその後における両者の働きについて、ホワイト長老は次のように書き記している。

「結婚というものは人間の生涯において重大な出来事である事は言うまでもない。『妻を得る者は美しい物を得るであろう』……

私たちは1846年8月30日に結婚式をあげた。その時から今日に至るまで彼女は私にとって歓喜の冠である。

私は最初、彼女にメイン州ポートランドで会った。彼女はきわめて敬虔なクリスチャンであった。彼女は当時まだ16歳だったが、主の御旨を行い、公の場において、あるいは各家庭で伝道していた。

キリスト再臨の切迫している事、もう門口まで来られている事について、私たちは同じ見解を持っていた。最初に会った時、将来結婚するなどという事は少しも私たちの心になかった。しかし神は私たち2人に果たすべき業を与え、御事業のために私たちが互いにより良く助け合う事を認められた。彼女が公衆の前に出る場合、正当な保護者を必要とした。神は特に彼女を光と真理とを民に伝える器として選ばれた。私が御事業を果たす上で、彼女が私を大いに助ける事ができた。ついに神の明らかな御導きのもとに、私たちは結婚式をあげる事になった。……

友人はとてもなく、加えて健康もすぐれない状態にありながら、私たちは無一文で働きを開始した。妻は少女時代から病気の身であり、一方、私は生まれつき立派な体格の持ち主であったが、学校において過度の勉強をして、講演においても無理をしたため、胃弱に陥ってしまった。そのような状態に加えて、私たちに共鳴して同じ見解を持つ者はわずかであり、機関雑誌もなく、発行図書もなく、私たちは働きを開始した。おもに私たちは個人の家で集会を開いた。集まる者はわずかであり、女性が話すからというので聞きに来るだけで、彼らは別にアドベ

ンチストに対して期待を持って、私たちの集会に出席するわけではなかった。

妻は最初、公衆に向かって語る場合に恥ずかしがっていた。この時に彼女が確信を持って語る事ができたとしても、それは聖霊の助けによるものであった。また彼女が自由に力強く語る事ができたとしても、それは神の力を受けたからであった。集会ではたいいて私たち2人は、次のような順序で語る事が多かった。まず最初に私が教理の方面から講演をした。次に妻がかなり長きにわたって勧告をして、会衆の感情に訴え、彼らの心を和らげる事に努めた。私の担当する方面の働きも大切ではあるが、彼女の受持つ方面も重要だった。私は証をして、種をまき、彼女はそれに水をそそぐのだった。そして神はその機会を増やして下さった。神は私たちを貧困状態の中から召して下さった。神がまず私たちを苦難の炉の中に投げ入れて、私たちにとって必要である経験を与えられたのは、後に私たちの群れに加わって働きに参加する者の模範となるためであった」

ジェームズおよびエレン・ホワイトの最初の働きは、おもにポートランド市とその近郊に限られたが、11月に彼らはタブシャムの集会に出席した。この席上にはジョセフ・ベーツ長老も居合わせていた。彼はホワイト夫人の幻が神からのものだと、まだ十分に信じていなかった。この時の集会の事についてホワイト夫人は次のように記している。

ベーツ長老の経験

1846年11月に私は夫とともに、メイン州タブシャムにおいて開かれた集会に出席した。その席にはベーツ長老も居合わせた。ベーツ長老は幻が神からのものだという事を、まだ十分に信じていなかった。集会は非常に恵まれたものであった。神の御霊が私に臨み、私は神からの光り輝く幻によって包まれ、初めて他の惑星を見た。幻から出て後、一同の者に私の見たこ

とを語った。この時ベーツ長老は、私に天文学を研究したことがあるかと尋ねた。私は天文の本すら見た覚えがないと答えた。その時、長老は「これは神の示しに違いない」と語った。ベーツ長老の顔は天来の光で輝き、彼は立ち上がって力ある勧めを教会の者に向かって話した。

幻に対するこれまでの彼自身の彼の態度について、次のように長老は告白した。

「もちろん私は幻の中に、聖書に反したものを何一つとして見いだすことができなかった。それにしても私は不安を感じ、そのためにひどく試みられ、長い間信じることを好まず、それは彼女の衰弱状態の結果として生じたものとしか考えなかった。

そのため私は機会がある度に、彼女の精神状態が興奮しておらずに平静であると私に思えた時（集会以外の時）に、彼女や同席していた彼女の友人・知人、特に彼女の上の姉に様々な質問をしては、その真相を探り出そうとした。彼女がニュー・ベッドフォードやフェヤヘブン、またはタブシャムなどの私たちの開いた集会に出席する度に、私は何度も幻の中にいる彼女の様子を見たことがある。こうした場合に私はいつも熱心に深い興味を持って、彼女の言葉や態度などに注意を払い、何らかのごまかしや催眠術のようなものがないかどうかを確かめていた事は、ここに同席している人たちのよく知るところである。

しかし今日は、兄弟姉妹方とともに私もこの場に同席している事を感謝する。私は信じる。幻は神から与えられたものであって、1844年の10月における事件後に、試練の中にあつて離散していた神の民を慰め、励ますために与えられた賜物である事を信じる」

マサチューセッツにて

この事があつて数週間後、ポートランドから船でボストンに渡った。その途中に海上は激しい嵐となり、私たちは危機にひ

んした。しかし神の憐れみのもとに、私たちは無事上陸する事ができた。

2月と3月の上旬にかけてのマサチューセッツ滞在中における働きについて、帰宅して間もなく、夫はメイン州ゴーハムから、1847年3月14日に次のように書き送った。

「ほとんど7週間、この地を不在にしていたが、その間も旅先において神は私たちを大いに恵まれた。彼は海でも陸でも私たちの力であった。妻のエレンも過去6年間において見た事のないほどの良好な健康状態を6週間保った。私たちはきわめて元気である。……

タブシャムを去って後、私たちはかなりの困難に遭遇した。しかし、ある一面において、それは光り輝く天から恵まれた時期でもあった。全体として見る時、今回のマサチューセッツ行きは、今まで経験した事のない伝道旅行だった。ニュー・ベッドフォードおよびフェヤヘブンの兄弟姉妹たちは、真理によって非常に強められて神の力を受けた。また、その他の場所における兄弟姉妹たちも大いに恵まれた」

第16章 貧困との戦い

1847年8月26日メイン州ゴーハムで、長男ヘンリー・ニコルス・ホワイトが生まれた。10月になってタブシャムのハウランド兄弟が、親切にもその住宅の一部を私たちに提供してくれたので、私たちは喜んでこれを受け、借り物の家具を揃えてその家に住みはじめた。私たちは貧乏で、衣食にすら困ったほどだった。もともと他人に頼らずに自分の手で暮らすばかりではなく、さらに他人を助けたい希望だったが、物には恵まれなかった。夫は鉄道の線路に石を運搬する仕事を一生懸命に

やったのだが、働いただけの賃金が手に入らなかった。ハウラ
ンド兄弟もできる時は何でも喜んで分けてくれたが、彼らも切
迫した境遇だった。彼は全く第一・第二の使命を信じていて、
持っている物は御事業進展のために惜しみなく提供していたの
で、暮らしはその日その日の仕事によらなければならなかった。

やがて私の夫は石の運搬をやめ、斧を持って森に薪を採りに
ゆく事になった。絶えず脇腹を痛ませながら、彼は早朝から夜
遅くまで働いて、日当は50セントだった。私たちはいつも元
気で、主に頼ることに努めた。私はつぶやかなかった。朝がく
れば私は一晩、神が私たちを守って下さった事をありがたく思
い、夜は夜で一日を守って下さった事を感謝した。

ある日の事だった。食料がすっかり無くなってしまったので、
夫は金銭か食料をもらうために雇い主のもとに出かけて行った。
ちょうどひどい暴風雨の日だったので、夫は雨の中を3マイル
もの道を徒歩で往復した。彼は1つの袋をいくつかに仕切って、
食料を入れて背負って来たが、こんな状態で、かつて何度か講
演した事のあるブランスウィック村を通して来たのである。彼
が疲れて帰宅した時、私はほとんど意気消沈してしまった。も
う神から捨てられたという気がした。私は夫に言った。「私たち
はとうとう、こんな状態にまでなってしまったのですね。主か
ら見離されたのではないのでしょうか」。私は涙を抑えきれずに何
時間も大声で泣き、あげくの果てに失神状態に陥ってしまった。
私のために祈禱が捧げられた。そして間もなく、私は神の霊に
勢いづけられるのを感じるとともに、今まで失望に打ち沈んで
いた事を悲しんだ。私たちはキリストに従い、彼のようになり
たいと望むが、試練に打ちひしがれて失望し、主から遠く離れ
てしまう事がよくある。しかし苦悩や試練は私たちをキリスト
に近づけるものである。火の炉はかすを取り去り、黄金の光沢
を輝かせるものである。

この時、私は主が私たちを思い、人々のために働かせる資格
を与えようとして試みたのである事を示された。彼が私たちの
巢をふるい動かされたのは、私たちが安易に腰をすえる事がな

いたためである事を示された。私たちの働きは、他の魂のために尽くす事である。もし私たちが裕福になってしまうと、家庭を離れる事を好まなくなり、それに執着するに違いない。試練が私たちに臨んだのは、私たちに人生の途上で遭遇する大争闘に対する備えをさせるためだったのである。そのうちに、私たちはあちこちの州から招待状を受け取った。しかし、ここから出かける資金もないので、道が開かれない事を答えるだけだった。私は子供を連れて旅行する事など、とうてい自分にはできない事のように考えていた。また人のふとこころに頼る事もいやだったので、自分の持っている物で生活するように気を配っていた。借金するよりは、むしろ苦しむ方がいいという気持ちだった。

そのうちに幼いヘンリーが大病にかかって、みるみる悪化して私たちを困らせた。ほとんど意識不明で呼吸がはやくなって苦しそうだった。いろいろと薬を与えてみたがいっこうに利き目がない。そこでその病気について、経験がある人に診てもらったが、回復は難しいだろうとの事だった。私たちは祈った。しかし何も変化がない。私たちは子供を盾にして他人のために旅行したり働いたりする事を拒んでいたもので、今や主はこの子供を取り去ろうとしているのではないかという思いが浮かんた。そこでもう一度主の前に出て、私たちをあわれんで子供の生命が奪われない事を祈るとともに、私たちは主の遣わされる場所ならどこでも、主を信頼して行く事を厳しく誓った。

私たちは熱心に身を悩まして祈った。私たちは神の御約束を盾に、主が必ず私たちの叫びに耳を傾けられる事を信じて祈った。この時、暗黒をつらぬいて天からの光が私たちを照らした。私たちの祈りは不思議にも応えられた。その時以来、子供は回復に向かった。

コネチカット州への最初の旅行

タブシャムに在住していた時、私たちはコネチカット州ミド

ルタウンのE・L・H・チェンバレーン兄弟から1848年4月に同州で開かれる集会に出席するようにとの勧誘状を受け取った。私たちは旅費ができたなら行く事に決めた。夫は雇い主のもとに行って決算してもらったところ、受領する分が10ドルある事が分かった。そのうちの5ドルで私は必要な衣類を買い、それから夫のコートを繕ったが、それでも袖などはどこが元の布か分からないほどだった。あとの5ドルはマサチューセッツ州ドーチェスターまでの旅費に残しておいた。

1つのトランクに私たちの地上での所有物はほとんど入ってしまった。しかし私たちの心は平安であり、良心ははればれとしていた。そして私たちはこれを地上のいかなる楽しみにも勝るものとした。

ドーチェスターではオテス・ニコルス兄弟の家に招かれ、帰る時にニコルス姉妹から夫は5ドルいただいた。これを私たちはコネチカット州ミドルタウンまでの旅費に使った。ミドルタウンは私たちにとっては全然見知らぬ場所で、コネチカット州には会った事のある人は1人もいなかった。しかも手元に残ったお金はわずか50セントしかないのだった。夫はこれを大事にして馬車も雇わずに、トランクを近くの材木置場の材木が積んであるところに上げておいてそれから2人で同じ信仰を持つ兄弟の家を訪ねてまわった。間もなくチェンバレーン兄弟の家が分かり、その家に引き取られた。

ラッキー・ヒルの集会

ラッキー・ヒルの集会は、アルバート・ベルデン兄弟の家の建てかけの大広間で開かれた。ストックブリッジ・ハウランド兄弟あての書簡に、夫は次のように記している。

「4月20日、ベルデン兄弟はミドルタウンまで私たちや同市に散在する兄弟姉妹を、2頭引の荷馬車で送り出してくださいました。同地に着いたのは午後4時頃で、ベーツ兄弟とガーニー

兄弟が来られました。その晩は15名ばかりで集会を開きました。金曜日の朝にはいろいろな兄弟たちが見え、とうとう50名を数えました。必ずしもこの50人全員が真理に立っている人ばかりではありませんでした。その日の集会は非常に興味あるものでした。ベーツ兄弟は十戒に明確な解釈を与え、力ある証言によってその重要性を強調されました。その言葉はすでに真理に立つ者を堅くし、いまだ十分に決心していない人々を目覚めさせる力を持っていました」

ニューヨーク西部行きの旅費をつくる

その2年ほど前に私は、将来においていつかニューヨーク西部を訪問する時がある事を示された。ところがロッキー・ヒルの集会が終ると間もなく、8月に開かれるニューヨーク州ボルネーの総会に出席するようにとの招待を受けた。ハイラム・エドソン兄弟が手紙で、兄弟たちは一般に貧乏だから、私たちの費用を支出すると断言はできないが、できるだけ事はやってみようと言ってきた。だからといって私たちも旅費がなかった。夫は健康が衰えていたけれども、ちょうど馬草を刈る仕事が見つかったので、そこで働く事に決めた。

今は私たちにとって信仰によって生きる他はないように思われた。私たちは朝起きるとすぐにベッドのそばにひざまずいて、1日働けるだけの力をくださいと神に祈り、主が祈りを聞かれたという確証がつかめないうちは不安を感じた。それから夫は神から与えられた力によって大鎌をふるうために出て行くのだった。夜になり夫が帰宅すると、また私たちは真理を宣布する資金を儲けるために、必要な力を与えて下さいと神に懇願するのであった。1848年7月2日、ハウランド兄弟に書き送った書簡の中で、彼はこの時の経験について次のように記している。

「本日は雨なのであいにく草刈りができません。こんな時で

ないと書く事ができないのです。私は5日間は未信者のために、日曜日は信者のために草刈りをして、第七日に休みますが、こんなわけでほとんど書く時間がないのです。……神は私が毎日在必死に働くだけの力を与えて下さっています。……ホルト兄弟、ジョン・ベルデン兄弟と私とで、1エーカーあたり87セント半の弁当持参という事で、100エーカー刈る事になっています。主はほむべきかな。私は神の御事業のために使う20～30ドルをここで得たいと願うのです」

この畑で働いた結果、夫は40ドルほどの収入を得た。その一部に必要な衣服を少しばかり求めたが、未だなおニューヨーク西部に往復するには十分な旅費が残っていた。

私は健康が思わしくないので、旅行したり子供の世話をする事ができなかった。それで10ヶ月になったばかりの幼いヘンリーを、ミドルタウンのクラリサ・ボンホエー姉妹のもとにあずけて行った。わが子と離れる事は私にとってはつらい試みだったけれども、子に対する愛情のために果たすべき仕事をあきらめるわけには行かない。イエスは私たちを救われるために、生命をも捨てられた。これに比べれば私たちの犠牲など何と小さなものだろうか。

ボルネーの集会

ニューヨーク州西部での私たちの最初の集会は、ボルネーのデービット・アーノルド兄弟の農園倉庫で開かれ、8月18日に始まった。約35名-同州で集まる事ができるすべての友人や知人-が出席した。しかし、その中でお互いに同じ意見を持っている者はなく、しかも各自がその見解を固持して、自分の方が聖書的だと主張していた。

この奇妙な見解上の相違は、重々しい負担として私の上のしかかって来た。私は多くの誤謬が真理として提示されているのを知り、こうして神の栄光が汚されている事を思わざるを得

なかった。ついに私は大きな悲しみに心を奪われて気を失ってしまった。私が死ぬのではないかと心配する者もいた。ベーツ、チェンバレーン、ガーニ、エドソン兄弟や、夫が私のために祈祷してくださった。僕たちの祈りを聞かれて、やがて私は正気にかえった。

天来の光が私に宿ると、みるみる私は地上の事を忘れた。同伴していた天使が、私にそれらの誤謬とともに真理を明示した。彼らが聖書的だと言いながらその見解が一致しないのは、聖書の教義に対する彼ら自身の見解に従っているからなのだった。それで私は、彼らが自分の見解の誤りを認め、第三天使の使命の真理に一致すべきである事を告げよと命じられた。

集会は勝利のうちに終わった。真理は勝利を収めた。兄弟たちはそれぞれ誤謬を捨てて、第三天使の使命に一致した。また神は彼らを大いに祝福し、多くの信者を彼らの仲間に加えられた。

(註) 1848年9月にニューヨーク西部から帰宅した後、ホワイト長老夫妻はメイン州に行き、信者の総会を開いた。会期は10月20日から22日までだった。これがタブシャムの総会である。この総会以来、兄弟たちは再臨使命を明示する真理を公布する印刷物が、速やかに出版される事を祈るようになった。

それから1ヶ月後の1848年11月に、マサチューセッツ州のボストンにほど近いドーチェスターに集合して、少数の信者によって総会が開かれた。この集会においてジェームス・ホワイト長老は、第三天使の使命の真理を公布するために、出版物を発行すべき責任のある事を神から示された。

第17章 喜ばしい摂理

再び私は人々のために自分を捨てる事を命じられた。私たちは幼いヘンリーをあとに残し、御事業のために全く自分を捧げなければならなかった。私は健康が衰えていたので子供などを同伴すると、どうしても大部分の時間をそのために費やさなければならなかったのである。離れる事は本当につらい試みだった。しかし私は自分たちの義務の道を拒んでまで、子供に関わりあう事をしなかった。私はこの子が大病の時、主がいやして下さったと信じていたので、もし彼のために私が義務の遂行を怠るような事があれば、神は私から子供を取り去られるであろうと思った。私はただひとり、神の前に悲しみ涙しつつ犠牲を払い、子供を他人の手にゆだねたのだった。

私たちはヘンリーをハウランド兄弟の家族にゆだねたが、これは私たちがこの一家を全く信頼していたからだった。同家では私たちが神の御事業のために自由に働けるようにと、喜んでその務めを引き受けてくれた。私たちもまた旅先などで、私たちが育てるよりも、彼らの方がよほどよく面倒を見てくださる事を知っていた。また子供のためにもちゃんとした家があって、しっかり養育される方が、彼の純真な性格にとって、とても良い事を知っていた。

しかし子供と離れる事は本当につらい事だった。別れてみると彼の悲しそうな小さい顔が、夜も昼も私の前に現れた。しかし主の御力によって私は彼を忘れて、ひたすら救霊に努めた。

まる5年間、ヘンリーの養育のすべてをハウランド家でしてくださった。しかも同家では養育費をとらず、着物の事まで面倒を見てくださった。ただ年に1度だけハンナがサムエルにしたように、私はちょっとした贈り物を携えて行くだけだった。

生ける水—1つの夢

ある時、夫はニュー・ハンプシャーおよびメイン州における集会に出席した。当時はコレラが流行していたので、私は夫がそれに感染しはしないかと気づかった。そしてある晩こんな夢を見た—私たちの周囲にはコレラで瀕死の状態の人がいっぱいいるのに、夫は散歩に行こうと言い出した。ところが散歩しているうちに、私は夫の目が充血して顔が真っ赤になり、唇はそれとは反対に青白くなって来た事に気づいた。これではコレラにかかりそうで心配だと言うと、「もう少し歩いてごらん。コレラに効くたしかな薬を見せてあげるから」と夫は言った。

やがて、歩き続けた私たちは、ある川にかかった橋のところに来た。するといきなり彼は私ひとりを残して、身をおどらせたと思うと水中深くに姿を消してしまった。私は驚いた。しかし間もなく、水の入ったコップを手にして彼は上がって来た。彼は「この水はすべての病気をいやすものだ」と言いながらそれを飲み、再び水の中にもぐっては、透明な水の入った別のコップを持って来て、また同じ言葉をくり返すのだった。私には少しも飲ませてくれないのを、私は悲しく思った。彼は言った。「この川底にはすべての者をいやす、隠れた泉があるのです。しかしこれを飲もうとする者は、必ず飛び込まなければならないのです」。私がそれを飲んでいる彼の顔を見たところ、健康と生気が彼に宿っているようだった—目覚めた時、私の恐れはすっかり消えていた。神は夫を安全に私のもとに帰される事を信じて、恵み深い御手に彼をゆだねた。

教友を歴訪する

1850年の春ごろ、いまだニューヨーク州のオスウィゴにいた時、私たちは同市の40マイルほど東方にあるカムデン町から招待状を受けた。出発に先立ち、私はその場所の信者の小

さな団体を示されるとともに、その中のある女性が非常に神を敬っているが、実は偽善者で神の民を欺きつつある事を示された。

カムデンの集会

安息日になると、かなりの人が礼拝に集まって来たが、その偽りの女性は出席していなかった。そこでこれが会員の全てかとある女性に尋ねてみると、そうだと返事だった。私が幻で見た女性は、4マイルほど離れた場所に住んでいたのだから、この姉妹は彼女の事を思い起さなかったのである。しかし間もなく彼女が入って来て、私は直ちにそれが主からその本性を示された女性である事に気づいた。集会中、彼女はかなり長々としゃべり、自分は全き愛を持っていて、聖潔な心を持っているとか、試練や誘惑にあう事なく、全く平和と神に対する服従とを楽しんでいると言った。

集会が終って私は大きな悲しみを心に抱きつつ、プロステン兄弟の家に帰ったが、その夜にガラクタの詰まっている押入れの戸が開いて、それをきれいにする事が私の務めである事を告げられる夢を見た。そこで私はランプの光でそのガラクタを片づけ、この部屋をもっと価値あるもので満たすように共にいる人々に語った。

日曜日の朝、私たちは兄弟たちと集会を開いた。夫は10人のおとめの例えについて、説教しようとして立ち上がった。しかし彼は語るのに何となく困難を感じたので、祈をするようにと求め、主の前にひざまずいて熱心に祈った。すると暗黒が取り去られて、私は幻の中に入って再びこの女性の事を示され、彼女が全く暗黒の中にいる者である事を示された。イエスは彼女とその夫に対して顔をしかめておられるのであったが、私はその御不興の様子を見て非常に驚愕した。彼女は聖潔を口にししながら心は悪徳に満たされ、全く偽善を行っている事を私は見

た。

幻から出てきて我にかえった後、私は恐れつつもハッキリと今示された事を語った。すると彼女は静かに言った。「主が私の心を御存知ですから、私は嬉しく思います。私が彼を愛している事を主は御存知です。もし私が心の中を開いて、あなたにお見せする事ができたなら、聖潔な事がお分かりでしょう」。ある人々はどちらを信じていいのか分からなかった。この人々は主が私に示された事を信じていいのか、それとも私の立てた証に反対するこの女性の言葉を尊重していいのか、どちらかにする事を迷っていたのである。

しかし、それから間もなく激しい恐怖が彼女を襲った。彼女は異常なほど恐怖にかられて告白しだした。近所の未信者の家に行ってまで、数年来同棲している男性は実は夫ではなく、彼女は親切な夫と1人の幼い子供をおいて、英国から逃げてきた者である事を告白した。また、その他にもいろいろな悪事を彼女は告白した。彼女の悔改めは、真剣なものであるように思われた。今までに盗んだ物も侘びて返すようになった。

この事があって後、カムデンの兄弟たちやその知人たちは、私の語った事が全く神から示されたものである事を確信するようになり、また恵みと愛によって与えられたこの使命は、彼らを恐るべき誤謬と欺瞞から救うものである事を信じるようになった。

第18章 出版事業の開始

1848年11月にマサチューセッツ州ドーチェスターで開かれた集会において、私は神のしるしに関する使命の布告される光景と、私たちの道を照らしつつあるこの光を公にする義務

が、私たちの兄弟の肩に担わされている事実とを教えられた。

幻から覚めてから、私は夫に向かって言った。「私はあなたに對する使命を受けました。あなたは本を印刷して人々に送り出さなければなりません。もちろん最初は少しだけでしょう。しかし人々がこれを手にして読む時、きっと印刷の費用をあなたのもとに送ってくれますので、最初から必ず成功します。この小さな発端から光が流れ出て、全世界を輝かせる事を私は示されました」

翌1849年の夏、コネチカット州に滞在中、夫は『現代の真理』を書いて発行する時が到来した事を痛感した。そして決心するとともに大きな励ましと祝福を受けた。けれども自分が無一文である事を思うと、どうしても疑わざるを得なかった。資力のある人もいたのだが、そうした人々は財布のひもを解こうとはしなかった。そこでとうとう夫は望みを投げうち、草刈り場を探すことに決めてしまった。

彼が出かけてから、私は重々しい気分が襲われて気を失った。祈祷が捧げられ、私は恵まれて幻の中に入った。私の夫は1年前に主から祝福され、力を得て畑で働くことで儲けた資金を正しく用いたので、この世においても百倍の利益を得て、忠実であるなら神の国に行つて大いなる報いにあずかるであろう。しかし今度は別に果たすべき仕事もあることだから、野原で働く力は与えられず、もしあえて畑にでも行くならば、病のために中断しなければならぬ事を示され、むしろ書き続けて信仰によって行動すべき事を示された。そこで彼は直ちに書き出した。そして難解な語句に突き当たる度に、私たち2人は心を合わせて神に祈り、御言葉の真意を理解させてくださる事を求めた。

『現代の真理』

7月のある日、夫は最初の冊子1千部をミドルタウンから持ち帰った。これができるまで彼は、8マイルもあるミドルタウ

ンまで何回往復したか分からないほどだった。しかしこの日はベルデン兄弟の馬車を借りて、冊子を持ち帰った。

さて尊い印刷物が、とうとう家に運ばれて床の上に置かれた。そこでこれに心を向けていた少数の者が集まり、冊子を囲んでひざまずき、真理の印刷物に神の祝福が加えられるように、心から涙とともに祈った。

私たちが冊子を折りたたむと、夫はそれに帯封をしては読んでくれそうな人の宛名を書いた。そして分厚い布袋の中に入れて、徒歩でミドルタウンの郵便局まで運んで行った。

7～9月にかけてミドルタウンで4号までの冊子が印刷された。各号とも8ページだった（註参照）。発送する時にまず、必ずこれを主の前に置き、この無言の伝道者に神の祝福が加わるように、涙とともに祈りをささげた。さて第1号を発行して間もなく、私たちは各地からの手紙を通して刊行を続けるだけの資金を与えられるとともに、多数の人が真理を信じるにいたった事を聞いて喜んだ。

しかし私たちは出版事業を開始したからと言って、真理を宣伝する働きをやめたわけではなく、各地をめぐる私たちに光と喜びとを与えた教理を宣布し、信者を励まし、誤謬を改め、教会の秩序を保つ事などに尽力していた。出版事業を進展させると同時に、各伝道地に私たちの福音事業を継続させなければならない都合上、冊子は毎回発行地が異なっていた。

『レビュー・アンド・ヘラルド』誌

1850年11月にはメイン州パリソで発行した。ここでは冊子の拡張をはかって、名称も『アドベント・レビュー・アンド・サバス・ヘラルド』と変更したが、それが今日まで存続しているわけである。私たちは冊子の発行を維持して行くために、貧しい生活を送っていた。教友の数も少ない上に、世俗的な資産も貧しかったので、私たちは依然として貧困や失望に立ち向

かわなければならなかった。校正のために深夜まで起きている事も度々あり、時には2～3時までかかる事もあった。

過労・心配・栄養不良など、また寒い中で長期間の旅行をした事などがひどく夫にこたえた。負担は全く重すぎた。そして彼は印刷所まで歩く事もできないほどに弱ってしまった。それだけではない。私たちの信仰は極度に試みられた。それは私たちが不自由や苦労や困難にも喜んで耐えてきたにもかかわらず、その気持ちが誤解され、不信とねたみをもって迎えられた事である。私たちが人々のためを思って苦しんでした努力も、彼らからはほとんど認められなかった。

私たちは睡眠をとる事も、休息するヒマもないほどに悩まされた。心身をリフレッシュさせるために睡眠をとるべき時間が、ねたみから寄せられた長文の手紙に返事を書くのに費やされる事が何度もあった。他の人はみんな眠っているのに、私たちはいつまでも主の前に涙を流して、苦悩する夜が何度あったか分からない。とうとう夫は言うのだった。「妻よ、こんな事でもうこれ以上苦しんでも何にもならない。こんな事は私を弱らせるばかりだ。ついには墓場に行く事だろう。もう私はやる気になれない。今度、発行はしないという声明書を、誌上に出すための原稿を書いた」。そう言って、それを印刷所にもって行こうと彼が玄関口に出た瞬間、私は気絶してしまった。彼は引き返ってきて、私のために祈ってくれた。祈りは応えられて私は正気にかえった。

翌朝の家庭礼拝の最中に、私は幻を見てこれらの事件に関して教えられた。これはサタンが夫の仕事を中断させようとして、部下を通して活躍しているのであり、決して夫に雑誌経営を放棄させてはならない事を私は示された。出版を継続すべき事と、主が私たちを支えてくださる事を私は示されたのであった。

そのうちに私たちはあちこちの州から、総会を開いてほしいとの熱心な招待を受けたので、マサチューセッツ州、ボストン市、コネチカット州、ロッキー・ヒル市、ニューヨーク州、カムデン、ウエストミルトンの諸総会に出席する事を決めた。た

だし、これらはみな総会の催しではあるが、各地に散在する兄弟たちを益する事は測り知れなかった。

サラトガ・スプリングに移る

私たちはバルストーン・スパに数週間滞在し、その間にサラトガ・スプリングで印刷や出版を行うことになった。そして家を1軒借り受けて、ステフェン・ベルデン夫妻および当時メイン州にいて子供のエドソンの世話をしてくれていたボンホエー姉妹を呼ぶとともに、借り物の家財道具で生活する事になった。ここで夫は、『アドベント・レビュー・アンド・サバス・ヘラルド』の第2巻を発行した。

(注) 雑誌の大きさは6インチ×9インチ半だった。

第19章 出版・印刷所の設立

出版・印刷事業の発展と能率の上から、適当な場所が必要となり、ホワイト長老夫妻は、サラトガ・スプリングから、ニューヨーク州ローチェスターに移転した。これは1852年4月の事だった。マウント・ホープ街124番に大きな家を借りた。移転に際しても、わずかな家財道具を運搬する費用すら事欠く状態だったので、一步一步、信仰をもって進むほかなかった。1年175ドルの約束でその古家を借りたが、それは印刷所や、それに従事する働き人と家族の者の住居に当てられた。

最初のうちは家族も少なく、生活状態もきわめて単純だった。この時の様子をホワイト夫人は、親しい交流をもち、今までも常に援助を惜しまなかった良き友人、ストックブリッジ・ハウランド姉妹あての手紙で、次のように書いている。

「私たちはローチェスターに移り、ようやく落ち着いたところですよ。古家を1年175ドルで借りる事にしました。今度は印刷機械もあります。これがなければ事務室だけで、せいぜい1年50ドルほどで借りるはずだったのです。おいでになって、そこに住んでいる私たちの事や、備えつけてある家具などをご覧になれば、必ずお笑いになるでしょう。1台25セントずつで古物のベッドを2台買いました。夫は古椅子を6脚買ってきましたが、2つと同じ物はありませんでした。全部で1ドルでした。その他に62セントで椅子を4脚買ってきましたが、その4脚はどれも満足に腰をかける所がないのです。しかし頑丈に作られているので、ズックを張って腰かける所を作りました。バターもジャガイモも値段が高くて買う事ができません。(註. この2つを欠く事は、日本人が米を欠くのと同一ような事である)。私たちはバターの代わりに果物のソースを、ジャガイモの代わりにカブを使っています。私たちは空になった粉の桶を2つ並べて、その上に板を置いて、台の代わりにして最初の食事をしました。御事業さえ進めて行く事ができるならば、私たちはどんな窮乏や困難も喜んで受け入れる決心でいます。またこの場所に移ってきたのも、神の御導きであると私たちは信じています。広大な働きのある場所があるにもかかわらず、働く者のきわめてわずかな事を嘆かざるを得ません。この間の安息日における、ここでの集会は非常に恵まれ、主の御臨在が著しく、一同大いに力づけられました」

ローチェスターに移転した事を指導的立場にある各地の教友たちに報道すると、直ちに事業を進めて行くための資金が各地から送られてきた。先ほど記してある手紙の中にもあるように、道具類はきわめて貧弱だったが、最初はガラガラだった大きな家の設備が、次第に整ってきた。

ここで機関雑誌『アドベント・レビュー・アンド・サバス・ヘラルド』第3巻第1号が、セブンスデー・アドベンチストの所有する活字と印刷機によって印刷された。印刷所の諸器具の購入には652ドル93セントを必要としたが、取りあえずハ

イラム・エドソン兄弟から借り入れる事にした。その後、各地から献金があって、同氏に返金する事ができた。

ローチェスターに出版・印刷所を設立した時の社員は次の通りだった。ホワイト夫妻とともにサラトガから転任してきたステフェン・ベルデン兄弟、アンニー・スミス姉妹、他にルマン・マスチン兄弟、同兄弟は印刷工の経験があって工場長になった。当時、彼はアドベンチストではなかったが、後に真理を信じるようになった。

また、ミス・ジェニー・フレーシャーは家事・炊事の方面を担当し、3名の青年が見習い従業員として私たちに加わった。ユライヤ・スミス兄弟は、会計・発送係および編集助手だった。次第に人数が増加するにつれ、印刷所の方は10月上旬に市内の他の場所に移ったが、安息日の集会は今まで通りに大きな家で開かれた。

ローチェスターにおける活動、ならびにその結果として経験した事について、ホワイト夫人は次のように書いている。

前 進

ローチェスターにおいてはなかなかの苦戦で、私たちは様々な困難と失望に遭遇した。たまたま同市にはコレラが発生して猛威をふるい、これに倒れた者の死骸を墓地マウント・ホープ目指して運ぶ馬車のきしむ音が夜通し絶えなかった。それは各階級に蔓延し、日頃から名声も高く、手腕のある医師ですらこれに感染し、墓地マウント・ホープに運ばれた。ローチェスターの市内を通る時、ほとんどの街角において、死者を収める祖未な松材の棺があった。

子供のエドソンがコレラに感染した。直ちに私は大いなる医師であるイエスの許に連れて行った。私は彼を抱えて、イエスの名によって疫病を譴責した。直ちに彼から苦痛が除かれた。ある姉妹が神に彼のいやされる事を祈りはじめた時、わずか3

歳にしかならない幼児が「もう祈らなくても神様がいやして下さった」と驚きながら語った。彼は非常に衰弱していたが、病気はそれ以上進まなかった。それにしても回復は思わしくなく、私たちの信仰は試みられた。3日間というもの、彼は何も食べなかった。

執筆と旅行

当時、私たちは約2ヶ月にわたって、ニューヨーク州ローチェスターからメイン州バンゴアまでを巡る旅行をする予定だった。この旅行には、ヴァーモントの兄弟たちから送られた幌のある馬車を、チャーリーと呼んでいる馬にひかせて出発する事になっていた。重い病気の幼児を連れて旅立つ事は難しかったが、それ以上悪くならなければ出発する事に決めた。最初の場所で開く集会に間に合わせるためには、2日以内に出発しなければならなかった。そこで私たちは神に祈り、もし子供が何か食べるようになれば、これを機に出発する事を述べた。はじめの日の病状は依然として変わらず、何も良くなったようには見えなかった。彼はほんのわずかな食物すら口に入れなかった。しかし翌日になって、昼ごろに薄いスープを欲しがり、それを与えると彼は飲んだ。

そこで、いよいよその日の午後には出発した。4時頃だったが、私は病気の子供を枕にのせて抱えたまま馬車に乗り、20マイルほど前進した。その夜、彼の神経はいらだって眠らなかったのも、私は夜通し抱えていた。

子供がそんな状態だったので、翌朝に私たちはこのままローチェスターに帰るか、それとも前進するかを決められずに思案していた。私たちを迎えてくれた家の人たちは、このまま旅行を続けるならば子供は必ず死んでしまう、そして路傍に葬らなければならないと語った。そのようにも思えたが、このままローチェスターに帰る事はできなかった。子供がこうして病気で

悩むのも、私たちの旅行を妨げようとするサタンの仕業であると、私たちは信じて疑わなかったので、帰る気にはなれなかった。ついに私は夫に「引き返すならば子供は死ぬ、先に進んでも死ぬかも知れないというのなら、この場合に私たちは神様に信頼して前進する事にしましょう」と語った。

私たちは2日間で100マイルほど前進しなければならなかった。しかしこのように危険な時に、神の援助が常に加えられる事を信じて疑わなかった。私は非常に疲れていたので、万一子供を腕から落とす事があってはならないと考え、ひざの上に置き、私の体に結びつけ、2人ともその日はかなり長い間眠った。旅行中に子供は次第に元気を取り戻して快方に向かい、帰宅した時にはすっかり健康になっていた。

神はその時の旅行-ヴァーモント行きを大いに恵まれた。夫はとても苦勞しながら活動した。彼は至る所の総会において、おもに講演をして文書を販売し、雑誌の購読を求めた。1ヶ所の総会が終ると、次の場所へと私たちは急いだ。昼には路傍で馬に飼料を与え、私たちもそのそばで昼食をとった。その後で夫は帽子の上や弁当箱の上に原稿用紙を広げて、『レビュー』および『インストラクター』誌のために原稿を書いた。

1853年の夏、私たちはミシガンへの最初の訪問をした。ニューヨーク州のローチェスターに帰って後、直ちに夫は『時の兆』と題する本の原稿を書きはじめた。彼は依然として健康がすぐれず、わずかししか眠らなかったけれども、神は彼を支えられた。頭脳がはっきりしない時や痛む場合、私たちは神の前にひざまずいて頭をたれ、悩みの時に神を求めた。神は私たちの熱心な祈りを聞かれて、その結果として夫の気分は良くなり、新しい気力をもって仕事を続けてゆく事ができた。1日に何回も私たちは熱心に祈り、仕事を進めて行った。実にその本は夫が自分の力で書いたとは言えないものである。

ミシガンおよびウィスコンシン訪問

1854年の春、私たちは再びミシガン州を訪問した。長距離の旅であり、しかも馬車でかなりの泥道を前進しなければならなかったが、私は氣力を失わなかった。また神が私たちのウィスコンシン行きを支えてくださると信じて、夜遅くにジャックソンから乗車する予定だった。あれこれと汽車に乗る準備をしている時、私たちは非常に厳粛な思いに打たれ、祈る事にした。私たち3人を御手にゆだねた時、なぜか私たちは涙を流した。私たちは厳粛な気持ちに打たれつつ駅まで行った。車内に乗り込んだ時、私たちは夜間にいくらかでも眠る事ができるようにと、座席が高くなっている前の客車に乗り込もうとした。しかし満員だったので、そこを通過して空席のあった次の客車に座った。私はいつも夜に旅行する時は帽子をとらなかったが、その時は何かを待つ者のように旅行カバンもおろさないで手にしていた。私たちは2人とも同じ気持ちに襲われている事を、互いに語り合った。

ジャックソンからおよそ3マイルほど列車が進んだ時、運転がおかしくなり、激しく動いてから前に行ったり後ろに戻ったりしてついに停車してしまった。何が起こったのかと私は窓を開けてみると、1両の客車が直立していた。車内からはわめき声が聞こえ、非常に混雑していた。機関車は脱線してしまっていた。しかし私たちの乗っている客車は、それから約100ヤードほど離れたままで脱線せずにいた。連結器も壊れてはいなかった。私たちの乗っている客車はなぜか引き離されていた。まるで天使が応急処置をしてくれたようであった。手荷物貨車はそれほど損害を受けず、本の入っている私たちの大きなトラックも無事であった。二等車は粉碎され、乗客は線路の両側に放り出されていた。最初に乗車した時に腰かけようとした客車は大破して、一方の端が破壊物の上に乗っていた。死亡者および重傷者の数は4名で、ケガ人も多かった。私たちは神が天使を遣わされて、この危機から私たちを守られたとしか考えられ

なかった。

私たちはジャックソンに近いサイリニヤス・スミス兄弟の家にたどり着き、翌日ウィスコンシンに向かった。同地の訪問は大いなる神からの祝福を受け、働きの結果として多くの悔改める者が現れた。神はこの長距離の旅行にも、よく耐える力を私に与えられた。

第20章 ミシガンに移る

1855年の事だったが、ミシガン州における兄弟たちが、出版・印刷部をバトル・クリークに移す案を立てるための道を開いた。当時、夫は約2～3千ドルの負債を持っていた。彼の所有しているものは大量の書籍と未払い込みの書籍代、その中には回収の見込みがないものすらあった。事業は挫折してしまったかのような状態だった。それに加えて出版物の注文はきわめてわずかで安いだけでなく、夫の健康はひどく悪化して、咳が出て苦しみ、肺に痛みを感じ、神経が疲れているという状態だった。あるいは彼がこうした借金を背負ったまま死んでゆくのではないかと私たちは怖れた。

その頃は実に私たちにとって悲痛な時代だった。手元にいる3人の子供を眺めた時、彼らがやがて父親をなくして不憫になるのではないかと、このような思いが私を苦しめた。夫は現代の真理を宣べ伝えるために、過労の結果として死んでしまうとしても、それを誰が知るだろうか？ この数年で彼が耐えてきた重い責任、それに伴う極度の疲労が心身ともに彼を弱らせ、あげくの果てに家族の者を貧しい状態のまま残して去るのか？ そのまま彼は誰にも顧みられないで死んでゆくのか？ しかし事物を正しく定められる神がおられる。神の事業のために耐え

忍んでいるあらゆる悩み、あらゆる克己と犠牲は、少しももらさずに天上に記録されて、必ず報いが与えられる事を知った時、私は慰められた。再臨の日に主は隠れた事柄を明らかにして、公にするのである。

夫を少しずつ回復に向かわせる事は、神が意図されるのである事を私は示された。事あるごとに激しくサタンが襲撃して来るために、私たちは断固とした信仰を働かせなければならない事、外面のみを眺めず、ただ信じて進むべき事を示された。私たちは1日に3回、静かに神の御前に出て、熱心に彼の健康の回復について祈った。憐れみ深い神が、私たちの祈祷に耳を傾けられたので、夫は徐々に回復してきた。ハウランドに宛てた次の書簡は、当時の私の気持ちを最もよく表していると思うのでここに記したい。

「手もとに子供たちをおいて育てられるようになった事を、私は感謝しています。約4週間というもの、私は救いに向かって飢え渴いていました。今や私たちはほとんど何の妨げもない神との交わりに入らされている事を感謝します。苦しまずに飲む事ができるにもかかわらず、私たちはなぜ、しばしば泉から離れるのでしょうか？ 倉には充満しているにもかかわらず、なぜ私たちはパンがなくて死ぬような状態に陥るのでしょうか？ 豊富に惜しみなく提供されているのです。それを食べたり飲んだりして、日ごとに天来の喜びを味わいましょう。私は心の中にある平和を抑える事ができません。神への讚美は、私の心や唇にあふれています。私たちは救い主の愛を存分に楽しむ事ができます。わが魂はこれを証してやみません。このくすしき光によって心の暗雲は消えてしまいました。私はこの経験を忘れようにも忘れられません。主よ、私を助けて、これらの事を常に覚えさせて下さい。覚めよ、わが魂のすべての機能よ。覚めよ、彼の驚くべき愛のためにあなたの贖い主を讚美せよ。

私たちに敵対するものが、一時は勝ち誇るでしょう。彼らは猛烈に攻撃・非難し、彼らの舌が誹謗や虚偽の炎を燃やしていても、私たちはこれに動かされてはなりません。私たちはその

信じる場所を知るものです。私たちはいたずらに走り、あるいはいたずらに働くものではありません。各人がその身において行なう事によってさばかれる審判の日は近づきつつあります。現に世の暗黒である事は否定できません。反対はいよいよ激しくなり、誹るものや嘲るものは、ますます頑強な態度に出る事でしょうが、そうしたものによって、私たちは動かされるべきではありません。全能の神の御腕にひたすら寄りすがって、力を仰ぐべきです」

囚人が帰される

バトル・クリークに移って以来、主は私たちの囚人を帰しはじめられた。私たちと責任をともに担い、喜んで資金を投じる教友たちを、ミシガン州において見いだした。ニューヨーク中部およびニューイングランドにおいては、早くから試練を経験した教友たちがいて、特にヴァーモントにおいては、私たちの苦境に同情して、難局に際して進んで援助してくれる教友たちがいた。1856年11月、バトル・クリークにおいて開かれた総会において、神はくすしくも働かれた。運動の上に新しい生命が神から臨み、私たちの説教者たちの働きの上に成功がともなって、夫も負債を支払う事ができるようになった。彼の咳もやみ、肺とノドの痛みも去って、次第に健康は回復し、安息日にも日曜日にも、1日に3回も説教する事ができるようになった。このように彼が驚くべき回復にいたったのも、全く神の援助によるもので、神こそすべての栄光を帰すべき御方なのである。

(註) 1853年の秋、東部方面の旅行からローチェスターに帰宅した後、ホワイト長老夫妻は約5年間、ハウランド夫妻の厚意によって養育されていた、幼い長男のヘンリーを引き取った。

第21章 二つの道

1856年5月27日、アメリカ合衆国ミシガン州バトルクリークにおいて開催された総会に際して、私は教会全体に関する事柄を幻によって示された。神の権威と栄光が私の前を過ぎた。天使は私に次のように語った。「おそるべき神の栄光、どうしてあなた方はこれを悟らないのか。おそるべき神の怒り、どうしてあなた方は日々彼を怒らせるのか。1.狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからは行って行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない」。この二つの道は全く異なるものであり、全く正反対の方向に導くものである。一つは永遠の生命にいたり、もう一つは永遠の死にいたる。私はこの二つの道が全く相反したものであるとともに、それを歩んでいる者たちも、全く異なった集団の者である事実を見た。一方の道は狭くてでこぼこの多いものであったが、もう一方の道は平坦で広いものであった。この二つの道を旅している人々は、その性格の点において、あるいは生活・服装・会話などの点において全く相反するものであった。

狭い道を歩んでいる人々は、彼らの旅路が間もなく終りを告げようとしていることの喜びと楽しみについて語っていた。時には彼らの顔に悲しみの色が表れる事もあったが、聖い喜びで輝く事もしばしばあった。彼らは、広い道を歩む人たちのような服装はせず、彼らのような会話をせず、彼らのような行動をしなかった。彼らには一つの模範が与えられていた。悲しみの人にして数々の悩みを知られる主イエスは、彼らの行手を示し、自らも親しくその道を旅されたのである。先にキリストがしっかりとその道を通り過ぎて下さったために、彼らもその御足跡に従って行くならば、安全に通過する事ができるのであった。

広い道を歩んでいる人たちは、ただ自分自身の事、服装の事、道中の楽しみなどに熱中していた。彼らは様々な快樂にふけり、行き着く先には免れる事がない滅亡が待っている事などには、

いっこうに無関心だった。一日一日、滅亡が近づいているにもかかわらず、彼らは無謀にも突進していた。その事はどれほど恐ろしく私の目に映った事だろう。

この広い道を歩む人々の中に、「私は世について死んだ者である。世界の終末が近づいている、あなた方も備えをなさい」と、その衣服に記されている者を見た。その顔に憂いの色が見られる他は、彼らは道行く人々と何の異なる点も見いだす事ができなかった。彼らの会話は、その周囲にいる快樂を追う者と同様、何も変わりがなく、ただ時おり満足にあふれた顔色をしつつ、彼らの着物の上に記されている言葉に人々の注意を促し、彼らも自分と同様の看板をかけるように勧めた。これらの人々は、自分は狭い道を歩む者であると公言してはいたが、実は彼らも広い道を歩む者だった。また周囲の人々は「私たちとあなた方との間には何も違いがない。その服装にしても、会話にしても、行動にしてもすべて同じである」と言っていた。

次に私は1843～44年の時の事を回顧させられた。当時の人々は熱心な信仰を持って献身の精神にあふれていたが、現在はそうではなかった。どうしてこのような変化がいわゆる神の民である事を自認する者の上に起こったのだろうか？ それは他でもない、世俗との妥協、真理のためには喜んで苦しむ精神に欠乏した結果である事が分かった。それは神の御旨に対する服従の精神の大きな欠如に起因するものである事が示された。私はイスラエル人がエジプトを脱出して後の状態について思い起された。神はその大いなる慈愛のために彼らをエジプト人の中から召し出されたが、これは彼らが何も拘束される事なしに神を礼拝していたためであった。神は道中も彼らのために奇跡を行ない、険しく困難な道に導いて彼らを試みられた。彼らはくすしき神の措置と、しばしば神が救済の御手を伸ばされる事を試験されていたにもかかわらず、彼らが神によって試みられた時に、つぶやきの言葉を口にした。2.「われわれはエジプトの地で……主の手にかかって死んでいたら良かった」と彼らは言った。彼らはエジプトのニラやタマネギが恋しかったのだった。

終末に関する真理を信じると自称する多くの者は、かつてイスラエルの民が、神の驚くべき助けを受けつつもその恵みを忘れ、旅の途中でしばしばつぶやいた事をふしぎに思う者がいるのを見た。しかし天使は語った。「あなた方は彼らよりも悪い事をしている」。神はその僕たちに、誰も否定できない明確な真理を与えられた。だから彼らは、その行く先々において勝利する事ができるのだった。彼らに向かって争う者も、その真理の前には歯が立たないのだった。神の僕である者が、至る所に真理を光り輝かせ、勝利を確保させるためにすでに光は照らされているのである。このような大いなる祝福のありがたみを悟らず、またそれを受けようともしていないので、とてもささいな試練に出会っても、すぐに後ろを振り返り、大きな困難の中で自分は苦しんでいると考える。時には自分で試練を招きながら、試練に遭遇させられたかのように考え、ちょっとした事ですぐに失望し、何かと言えばすぐに気を悪くし、誤解し、自分の自尊心が傷つけられたと感じ、自分だけではなく他の人や事業までも傷つけている。サタンはまた彼らに、その試みを大きなものだと思わせ、その試みに会うならば彼らの感化と能力を失って、再び立ち上がれないように思わせている。

ある者は試みに出会った時、御事業をやめて自分の手で働いた方がよいと言うような思いを起す者もいた。万一、神が彼らから愛の御手を取り除いて、彼らを疫病や死の中に放置される場合、必ず彼らは艱難の何であるかを知るに違いない。神に対してつぶやく事は何よりもおそるべき事である。彼らは自分たちの歩むべき道が険しい道、克己と自己犠牲の道である事を忘れて、いつも広くて平坦で安全な道を歩むものと思い込んでいるのである。

神の僕でしかも教職の責任を持つ者ですら、しばしば自分は忘れられているとか不当な取扱いを受けているとか考えて、事実はそうでないのにもかかわらず、すぐに失望したり不機嫌になったりするのを見た。彼らはまるで自分が不幸な立場に置かれているかのように思い込む。万一、彼らに神の支えである御

手が除かれ、実際に苦悩する経験をしたならば、どれほど苦しいものであるかを彼らは知らないのである。その場合に彼らは、今まで数々の困難と不自由を忍びつつも御事業に携わって神に祝福されていた時よりも、それとは比べものにならないほど困難である境遇に陥る自分を見いだすだろう。

神の御事業に従事している時の方が、どれほど順境であるかを知らない者がいる。ほとんど何の不自由もなく暮らし、救霊のためにそれほどの骨折りや苦勞もせずにながら、その真相については知らず、自分は大きな困難と試練の中にいる者だと考える。この種の者が、自分を顧みる事をせず、自分を忘れて喜んで働く犠牲精神を持たないならば、ついに神は彼らを御事業から解き放たれる事実を私は示された。神はこうした者を犠牲精神に富む僕とは認められず、今度は怠け者ではなく、熱心で勤勉に働く者、順境においてどのように働くかを知っている僕を起こされる。いやしくも神の僕である者は救霊の責任を感じて、廊と祭壇の間で泣き「エホバよ、あなたの民を救いたまえ」と祈る者でなければならない。

神の僕の中でも、御事業のためにその全生涯を傾け、健康を損なうほどのあらゆる心配・苦勞・不自由を忍んでいる者があるかと思えば、一方では重荷を負う事もしなければ、これを担おうともしない者がいる。それでも後者は、自ら困難を経験した事がないために、いつも自分は困難のうちにいる者だと思っている。彼らがこのようにぜい弱で不屈の精神に欠如した状態で安楽をむさぼっている間は、決して主の苦しみのバプテスマにあずかる事はできない。

神が私に示された事柄によるならば、教役者の中で熱心ではなくて自分本位の者がことごとく振るい落とされ、そのあとには、潔白・忠実で犠牲精神にあふれ、自分の楽しみを考えない者、キリストの血によって贖われた人々を救うために、教えと勧めとをもって熱心に働き、主のためにどのような苦難をも喜んで受ける者のみ、残る事が明らかとなった。このようにして、あとに残された者が福音を宣べ伝えなければわざわいである事

実を痛感すればよいが、いまだにそれを感じない者がいる。

索引 1.マタイ7：13, 14 2.出エジプト16：3

第22章 二つの冠

1861年10月25日、ミシガン州バトルクリークにおいて、私は幻によって暗黒で悲惨なこの地上を見た。天使によって「よく観察せよ」との注意を受けた。次に私には地上の住民のことが示された。ある者は神の使たちによって囲まれていたが、ある者は悪天使たちに囲まれて真っ暗がりの中にいた。そして天から金の王笏を持つ手がぐだって来た。その王笏の頭には、多くのダイヤモンドでちりばめられた一つの冠があった。ダイヤモンドはいずれも光り輝いていた。その冠には「これを得る者は幸いなり、その者は永遠の生命を得るだろう」との言葉が刻まれていた。

下の方にはもう一つの王笏があった。同じくその頭にも一つの冠があった。また王笏は宝石や金銀でちりばめられ、ある種の光を放っていた。その冠には「地上の宝、富は権力なり、これを得る者は尊敬と名誉を得るだろう」と記されていた。おびただしい群衆がこの冠を手に入れようとして突進している光景を見た。彼らは大騒ぎを演じていた。熱心のあまりに狂喜している状態のような者もいた。押し合い争い合って、自分よりも弱い者は後方へ押し返し、あまりにも急ぎ過ぎて転んでしまった者などを、容赦なく踏み越えて行った。その冠の宝に手をかけた多くの者は、それを離さずかたく握っていた。その中には頭に白髪を生やし、その顔には長年の心配と苦勞のあとが深く刻まれている者もいた。彼らは、自分の肉身である家族の者さえ顧みず、助けを求める彼らの哀れなまなざしを見ると、その

手にしているものをうかつに離すまい、またそれらの人々に分けるような事があってはならないと、ますますかたく握りしめていた。彼らの欲深い目はただこの地上の冠のみに奪われ、これを見つめ、繰り返し何度もその数をかぞえていた。

群衆の中には、哀れでもの欲しそうな、みすばらしい様子の方がいた。彼らは宝の方に顔を向けてこれを欲しがっていたが、いつも強い人のために追い返されて失望に終る。それでも全然あきらめる事ができず、数多くの障害者や、病人、老人などとともに、この地上の冠を獲得しようとして突き進む。多くの者はそれを手に入れずに死んでしまう。それに手が届きそうになったが倒れてしまう者も多い。一面に死体が散らばっているが、群衆は死んでいる者、倒れている仲間を踏み越えて突進する。その冠に手が届いた者はいくらかの分け前を得て、冠の周囲に立っている一団の者から褒められて喝采される。

数多くの悪天使からなる集団の者は、非常に忙しくしていた。彼らの真ん中にはサタンが立っていて、一同は非常に満足して、冠を得ようとして争っている人々を眺めていた。サタンはそれを熱心に欲しがっている者の上に、一種の言うに言われない魅力を投げかけていた。

こうした地上の冠を手に入れようとして走り回っている者の多くは、いわゆるクリスチャンと自称する者だった。ある者は多少真理を知っていた。彼らは天の冠に好感を持ち、その美しさにしばしば惹かれはするが、その本当の価値と輝きとを悟らず、その方向に力なく手を伸ばしていながらも、片方では熱心に地上の冠の方に手を伸ばし、しきりにこれを手に入れようとしていた。熱烈に地上のものを追求するあまり、天上のものを見失ってしまった。その結果として暗黒のうちに放置されたが、それでも地上の冠を獲得しようとして、暗中模索していた。

そのうちに、こうした地上の宝を熱心に求める者と共にいる事が、嫌になってきた者がいた。彼らは自分の危険を悟ったのか、これを捨てて天の冠を熱心に追求するようになった。今まで暗黒であった彼らの顔は急に光り輝き、陰気であった顔が一

変して快活になり、大いなる喜びで輝くようになった。

その目を天の冠に注いで、群衆の中を進む一団の者を私は見た。彼らが一生懸命に騒然とした群衆を押し分けて進もうとする時、天使たちが同伴して彼らの進んで行く道を開いた。彼らが天の冠に近づくにしたがって、そこから放射する光が彼らとその周囲を照らし、暗黒を追い払い、しかもその光が輝きを増すにしたがって、彼らの姿は変化して天使に似た者となった。彼らは後ろを振り向いて、地上の冠に目を注ぐような事を一度もしなかった。地上の冠を追い求める者は、彼らを嘲笑・愚弄して、黒いボールのような物を投げつけた。彼らがしっかりとその目を天上の冠に注いでいる限り、それによって何の危害も受けなかったが、この黒いボールのような物に気をとられた者はそれによって汚された。この時、私には次の聖句が示された。

1.「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。目はからだのあかりである。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう。しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう。だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」

次に私が見たことに対して、以下の説明が与えられた。地上の冠を手に入れようとして懸命になっている群衆は、世の財宝を愛し、そうした物のはかない魅力によって煽り立てられて欺かれている者である。イエスを信じると自称しながらも、地上の富の獲得に熱中している者は、天に対する愛を失い、世俗の人々と同様の行動に出て、神によって世のものと見なされる。彼らは口では朽ちる事のない冠、天上の宝をを求める者であると

公言しながら、彼らの興味と主な研究は、地上の宝を獲得する事だった。地に宝を蓄え、富を愛する者はイエスを愛する事ができない。彼らは自分では間違っていないと考え、実際には拝金主義者のように自分の所有物をしっかりと握っているにもかかわらず、福音事業や天の宝以上に、金銭に執着している事を自覚する事はほとんど不可能である。「あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう」。この種の人々の経験の中には、与えられた光を迎えずに、これを受け入れなかった時期がある。そして光が離れて暗黒となったのである。「彼らが世の宝を愛してそれを拒んでいるならば、決して真の富を所有する事ができない」と天使は言った。

金持ちの青年がイエスの許に来て、2.「先生、永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」と質問した時、イエスは彼に、自分の財産を捨てて永遠の生命を受けると、それに執着して永遠の生命を失うか、どちらかを選ばせた。この金持ちの青年にとって、その財産は天上の宝よりも価値あるものだった。条件として、永遠の生命を受けるため、すなわちキリストに従うために自分の財産を捨てて、それを貧しい者に分け与える事は、彼にとって耐えられない事だったので、せっかくの熱望もすっかり冷めて、悲しみながら立ち去った。地上の冠を得るために騒いでいる者は、その目的のためには手段を選ばない者である事が示された。この点で彼らは狂気に満ちた状態にあるのだった。地上の富を獲得するために、自分の能力と思考のすべてを傾けていた。彼らは他人の権利を踏みこみ、貧しい者をしいたげ、払うべきものを払わなかった。彼らは貧しい者の弱みにつけこみ、彼らほど狡猾ではない者の目をかすめ、自分の富が増大する事を狙っているのであり、他人をしいたげて圧迫するだけでなく、貧困状態に陥れる事すらもためらわなかった。

もはや老齢であり白髪も生えて、その顔は心配や苦勞でシワだらけになっていながら、冠の中にある宝を握っている者がい

た。彼らの人生は残り少なかったが、それでも地上の宝を失うまいと決心していた。いよいよ墓に近づけば近づくほど、地上の所有を失うまいと必死だった。

彼らの親戚は何ひとつ潤されない。自分の家族の者ですら、熱心に働かされた上にわずかなお金での無理な節約を強制される。彼らはそうして得たお金で同胞を幸せにする事もせず、家庭のためにも使用しない。彼らにとってはどれほどの財産があるかが分かれば充分なのである。貧しい者を救済するとか、御事業を支える上で果たすべき使命が示される時、彼らは悲しむ。彼らは永遠の生命という賜物を喜んで受け入れはするが、少しの犠牲をも払おうとはしない。神の求められる条件に応じる事が、彼らには困難なのである。しかしアブラハムはどうだったか。彼は自分の子供すら惜しまなかった。約束によってようやく与えられた愛する子を、神の御前で犠牲にする事すらも拒まなかった。多くの者が自分の所有物を犠牲にするよりも、もっと安易な事を求める態度だった。

栄光の実を結び、日ごとに朽ちない生命を受けるために準備すべきはずのものが、地上の宝を失うまいとして全力を傾けている事は、実に見るに忍びない光景だった。彼らは天上の宝の価値が分からない者である事を私は知った。地上の宝に対する強烈な執着に基づく彼らの行動によって、犠牲を払ってまで天上の嗣業を得ようとは考えていない事を表しているも同然だった。

あの金持ちの青年は、自ら進んで戒めを守っていると表明したが、主は彼にあなたにはまだ一つ足りない点があると仰せられた。彼は永遠の生命を欲しがりはしたが、それ以上にこの世の財産に執着していた。これと同様の自己欺瞞に陥っている者が多い。彼らは隠れた宝を探す者のように真理を探究しない。彼らはそのために全力を傾けていない。当然、天来の光で照らされるべきはずの彼らの心が、心配や憂うつで常に乱されている。「この世の思いわずらいと、宝の誘惑に教えをふさがれて、実らない者がある」「彼らのすべき言い訳は何一つない」と天使

は語った。私は光が彼らから取り去られるのを見た。彼らは現代に対する厳粛な使命を理解しようとはせず、別にこうした事は知らなくても大丈夫だと考えた。そのために光が離れて、彼らは暗中模索する状態に陥ってしまった。

地上の冠に向かって突進していた、数多くの障害者や病人も、この世の財宝を求める者だった。そのために彼らはたびたび失望したにもかかわらず、天の宝を求める事をせず、その場所において財産と住居とを獲得することを好まなかった。彼らは地上のものを手に入れることができず、いたずらにそれを追求している間に、天上のものをも失ってしまった。地上の富の獲得に没頭する者の味わう失望と不幸な生涯、あるいは悲惨な死を数多く目撃するにもかかわらず、多くの者は彼らと同じ道を歩んでいた。彼らは狂ったように突進し、彼らの先にいる者が陥った悲惨な運命についてはいっこうに無関心だった。

冠に手をつけてその分け前にあずかった者は、称賛された。ここに彼らは、その全生涯を照らした目的-すなわち富を得たのである。そして富める者に対して世の与える栄誉を獲得するわけである。それによって彼らは勢力をふるう事になるのだった。この種の者が自分の味方である事を知って、サタンと悪天使たちは満足した。実際に彼らが神に向かって反逆の生涯を送っている限り、サタンの有力な僕である事は明らかだった。地上の冠を得るためにひしめき合って争う事に嫌悪を感じた者は、地上の富を争う者の結末とこうした生活の真相とに気づく。そして戦慄・驚愕するとともに、このように浅い生涯を送っている者と別れて、永遠に持続する真の富を追求するのである。

天上の冠を手にするために群衆を押し分けて進む者には、聖天使たちが同伴している事、彼らは神に忠実な民である事が私に示された。彼らは天使たちに導かれ、ますます勇氣に満たされて天上の宝を得るために前進した。

聖徒たちに投げつけられた黒いボールとは他でもなく、偽りを愛してそれを行なう者たちが、神の民に向かって投げかける欺瞞的な非難だった。日ごとに罪のない生涯を送り、あらゆる

悪を避けるために最大の関心を私たちが持たなければならない事はもちろんだが、それとともに悪人たちの投げかける欺瞞的な非難には目もくれずに、大胆に前進する必要がある。正しい者の目が天の限りない価値のある宝に注がれる時、彼らはいよいよキリストのようになり、栄化・昇天するのにふさわしい者とされるのである。

索引 1.マタイ6：19-24 2.マタイ19：16

第23章 狭い道の旅

1868年8月、ミシガン州バトルクリークにおいて、私は夢で自分が大群衆の中にいる光景を見た。群衆のある者は、今から旅立つ準備をしていた。私たちは荷物を積み込んだ重い馬車に乗って出発した。間もなく私たちは坂道にさしかかった。道の片側は険しい断崖であり、反対側は白くてなめらかな岩石で屏風状になっていた。

旅路を重ねて前進して行くにしたがって、道はいよいよ狭くて険しいものとなり、ある地点まで来た時、もはや荷車で進む事ができなと感じるようになった。そこで私たちは車を捨てて、荷物の一部分だけを馬に乗せると、その馬にまたがって進んだ。

進むにつれて道はますます狭くなってきた。断崖から谷間に落ちることを免れるため、屏風のようにになっている山側に寄り添って、私たちは前進せざるを得なくなった。ところが、それでも荷物が山腹の岩にあたって振り落とされるようになった。崖から墜落して、下にある岩でくだかれることを恐れ、馬上の荷物を切り離れたところ、それは崖から下に落ちてしまった。私たちは馬の背にまたがって前進した。特に狭い場所に来ると、

平衡を失って墜落しないかと心配した。その時にまるで馬の手綱をひいて、安全に危険区域を通過させてくれた者があったようだった。

いよいよ道が狭くなり、これ以上は馬に乗って行くことが危険に思えたので、思いきって馬を残し、一列になって徒歩で行くことに決めて、各自が前にいる人の足跡を踏んで行った。その時に私たちは、片側の白い壁の上から何本もの綱が下がっているのに気づいた。私たちはこれをつかまえ、道から転び落ちないように、平衡を保ちつつ進んで行った。私たちが前進するたびにその綱も動いた。道がいよいよ狭まってきたので、靴をぬいで歩いた方が安全であることに気づいて、それをぬぎ捨てて進んだ。やがて靴下もない方が安全に歩けると考えて、それもぬぎ捨てて裸足になって前進した。

その時、私たちは不自由と困難とに慣れていない人々の事を思った。彼らは今どこにいたであろうか？ 彼らは旅をしている一団の者の中にいなかった。道の様子が変わるたびに、ある者は後に残され、前進を続けた者はつらく苦しい経験をしてきた者だけだった。いよいよ道が困難になればなるほど、彼らはますます勇気を奮い起こして目的地に向かって前進した。

道の上から転落する危険性が次第に大きくなってきた。私たちは白い壁に寄り添って進んだが、十分な足場がないまでに道が狭まってしまった。体の重みがほとんどその綱で支えられていたのだった。この時「私たちは天の綱で支えられている。天の綱で支えられている」との叫び声が聞こえた。狭い道を歩いているすべての者が、これと同様の言葉を叫んだ。

下にある深い谷底では、人々が快樂と酒宴におぼれている様子で、彼らの騒ぎを耳にした時、私たちは戦慄せずにはいられなかった。私たちは様々な世的な音楽や、汚れた冗談や、神を汚す言葉などを耳にした。ジャズ楽器の音、それに混じる高笑い、これらとともに怒りののしる声、もだえ苦しむ声、悲しみ泣く声を耳にした。こうした事を耳にすると、私たちはいっそう熱心にこの険しくて狭い道を前進するようになった。上から

さがってきている綱だけで、ほとんど全身を支えて行かなければならない時がますます多くなってきた。綱は次第に太くなった。

この時、私は側面の美しく白い壁が、血で染まっている事に気づいた。最初は非常に惜しいような気がしたが、すぐにその壁が血で染まっているのは当然だと思えるようになった。この道を通る者は、自分よりも先に行った者が、この険しい道を同じように前進した事実を知り、先に行った者も耐える事ができたならば、自分たちにも不可能ではないと勇気を奮い起こす事ができるからだった。また壁の血を見る時、自分の痛む足から血が流れていても落胆せず、先の者も自分と同じ苦痛を耐え忍んだ事実を知って励まされるのだった。

ついに私たちの道が岩石の広い裂け目で尽きてしまった。これ以上、足場となる少しの道もなくなった。全身の重みをその綱で支えるだけになってしまい、しかもその綱は体の太さほどになった。ここで私たちは、どうすればよいか当惑せざるを得なかった。私たちはおそろおそろ「この綱はいったい何にかかっているのだろうか？」と口にした。夫は私のすぐ前にいたが、額からは大粒の汗を流し、こめかみと首の血管は2倍の太さになって、口からは苦しそうなうめき声を出していた。私の顔からは汗がダラダラと流れ、今までに経験した事のない苦痛を感じた。前途のさらに恐るべき困難を私たちは予期していた。ここで挫けてしまうならば、せつかく今までに困難な道を耐え忍んできた事が、徒労に終わってしまうのだった。

岩の裂け目の向こう側には、草が6インチほど伸びている美しい野原があった。別に太陽は見えなかったが、和やかに輝く光が、まるで野原が金銀でできているかのように、これを一面に照らしていた。地上のどんな場所も、この時の野原の美と栄光には比べものにならなかった。それにしても私たちは、果たしてその場所までたどり着けるだろうかとの考えを起さざるを得なかった。綱が切れればもうそれまでだった。「この綱は何にかかっているのだろうか？」との苦しげなあえぎ声が聞こえ

てきた。

その時、私たちはためらって容易には進めなかった。「私たちの希望は、まったくこの綱に頼るのみである。それはここまでの道のりを助けてくれたが、今でも私たちを助けてくれない事はない」と叫んだ。それでもまだ不安を感じてためらっていると、「綱を垂らしてこれを持っているものは神である。私たちは恐れる事がない」との声が聞こえた。その時、私たちの後ろにいる者がこれをくり返した。「ここまで安全に導かれたのであるから、今も助けられない事はない」。

そこで私の夫はその綱にぶら下がって、身の毛もよだつ深淵を飛び越え、無事に向こうの野原に着いた。すぐに私もその後続いた。その時、神に対する感謝と、安心してホッと息つく声が至る所から聞こえた。一斉に神に対する讃美と勝利の聲が上がるのを耳にした。私は幸福、真の幸福を感じた。

私は目を覚ました。経験させられた困難な旅行のために、全身の神経は震えていた。これ以上、夢の説明をする必要はないと思う。その夢は私の心に大きな印象を与えた。それは今でもとうてい忘れる事ができないもので、細かい点についても常に生き生きとした記憶をよみがえらせ得るほどである。

第24章 争闘の光景

幻によって私は、2つの軍隊が対立して大激戦を演じている光景を見た。その1つはこの世の旗の下に進軍していたが、もう一つはインマヌエルの血染めの軍旗を先頭に進軍していた。旗をまいて神の軍から敵にくだる一隊の者が続々と起きたが、また一方では敵軍の中から神の戒めを守る民に加わる者がさらに多くいた。この時、天の中央から1人の天使が飛んできて、

インマヌエルの軍旗を私の手に持たせた。同時に偉大で全能な将軍が、大声でこう叫んだ。「集まれ。神の戒めとイエスの証に忠実な者は、整列して自分の持ち場につけ。彼らの中から離れよ。汚れに触れるな。わたしはあなた方を受けよう。わたしはあなた方の父となり、あなた方はわたしの息子や娘となりなさい。来りてエホバを助けよ。エホバを助けて強い者を攻めよ」

戦いはいよいよ激しくなった。両軍とも互いに勝ち負けがあった。「旗手が意気消沈する時」、十字架の戦士たちも敗退するように見える。しかし、それはより有利な場所を得るため、すぐにまた喜びの声が上がった。キリストの精鋭たちが、それまで頑強に敵軍の抵抗していた場所に軍旗を立てる時、神に対する讃美の歌が合唱され、天使たちも一緒に歌った。救いの君イエスが熱心に軍を指揮し、部下の兵士に向かって救援を送られた。彼の権能が著しく現され、部下を激励して敵の城門にまで迫らせた。キリストはその軍を一步一步、勝利から勝利への道に進ませられるに当って、彼らに神の義がどれほど畏るべきものであるかを示された。

ついに最後の勝利が確保された。「神の戒めとイエスの証」と記されている軍旗を押し立てて、光り輝く勝利が獲得された。キリストの精鋭たちが都の門に近づく時、街は喜びとともに彼らを迎えた。ここに永遠の義と平和と歓喜との王国が建設された。

現代の教会は戦時中の教会である。私たちは今日、深夜のように暗黒である偶像崇拜に陥っている世と対立している。しかし最後の勝利の日が近づきつつある。神の御旨が天で成就されるように、地にも成就する日が来なければならない。その日に諸国の民は、神の律法のほかには律法というものが無い事を認めるに違いない。すべての者が1つの幸福な家族となって、キリストの義の衣-讃美と感謝の衣をまとう。自然界もことごとく卓越された美で輝き、絶えず神に讃美と感謝の印をささげる。その時、全世界は天来の光で照らされる。幸福な喜びに満ちた歳月が流れる。月の光は太陽のようになり、太陽の光は現在の

7倍もの輝きを放つ。こうした光景を眺めては明星とともに歌い、神の子らはともに喜びをあらわす。この時、キリストもまた「重ねて罪がある事はない。死もないだろう」と宣言される。

神の哨兵

以上が私に示された光景である。けれども教会の当然果たすべき事、必ず直面すべき事は、見える敵および見えない敵との戦いである。サタン代表は人間の姿をして戦場に出没している。人々は互いに同盟を結んで万軍のエホバに逆らっている。この種の同盟はキリストが恵みの座の前における執り成しを終って、仇を返す時の衣をまとわれるまで持続するであろう。悪魔の代理者たちは各都市において、神の律法と争う集団を結成するのに忙しい。いわゆる偽信者や未信者も彼らと共同戦線を張っている。今は神の民が勢力を減退させる時ではない。一瞬といえども警戒を怠って油断すべき時ではない。

1.「最後に言う。主にあって、その偉大な力によって、強くなりなさい。悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい」

2.「わたしはこう祈る。あなたがたの愛が、深い知識において、するどい感覚において、いよいよ増し加わり、それによって、あなたがたが、何が重要であるかを判別することができ、キリストの日に備えて、純真で責められるところのないものとなり、

イエス・キリストによる義の実に満たされて、神の栄光とほまれとをあらわすに至るように」

3.「ただ、あなたがたはキリストの福音にふさわしく生活しなさい。……あなたがたが一つの霊によって堅く立ち、一つ心になって福音の信仰のために力を合わせて戦い、かつ、何事についても、敵対する者どもにろうばいさせられないでいる様子を、聞かせてほしい。このことは、彼らには滅びのしるし、あなたがたには救のしるしであって、それは神から来るのである。あなたがたはキリストのために、ただ彼を信じることだけではなく、彼のために苦しむことをも賜わっている」

この終末時代において、神は未来の栄光を啓示されている。これは教会にとって実に貴重なものである。苦難と試練にあった彼を支えたものは何であったか？—それは自分の魂の苦しみを見て満足なされたのである。彼は永遠を眺め、自らの苦難を通して罪の赦しと永遠の命を得る者たちの幸福を見通したのである。彼は私たちの罪のために傷つけられ、私たちの不義のためにくだかれ、自ら刑罰を受けて私たちに平安を与え、その打たれた傷によって私たちはいやされたのである。彼はまた贖われた者が喜びの声をあげるのを耳にされたのである。彼は贖われた者が、モーセと小羊の歌をうたうのを耳にされたのである。

これと同様に、私たちも未来と天国の幸福とに関する幻を見なければならぬ。永遠の世界の門口に立ち、この地上においてキリストと苦労をともした者たちによって歓迎される日の招待を聞き、しばらく彼のために苦しむことを最高の榮譽・特権と見なさなければならぬ。その時、天使たちとともに、彼らはその冠を贖い主の足許に置いてこう叫ぶのである。4.「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい。……御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」。

その時、贖われた者たちは、自分が十字架の救い主を紹介し、彼の許に導いた人たちのあいさつを受ける。彼らはともに、神

が永遠にいます方であるように、人類に永遠の命を与えるために死なれたキリストを讃美する。この時に戦いは終わっている。すべての艱難と争闘とはその終りを告げる。この時、神の御座の周囲に立つ贖われた者たちは、ここに勝利の凱歌をあげ、全天をふるわせる。そして「殺された後に復活して、勝利者となられた小羊に栄光と讃美あれ」と合唱する。

5.「その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手を持って、御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、『救は、御座にいますわれらの神と小羊からきたる』」

6.「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいにとって下さるであろう」

7.「人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」

索引 1.エペソ6:10-17 2.ピリピ1:9-11 3.ピリピ1:27-29 4.黙示5:12,13 5.黙示7:9,10 6.黙示7:14-17 7.黙示21:4

第25章 大いなる報賞

1.「もしある人の建てた仕事がそのまま残れば、その人は報酬を受ける」。神のために忠実に働いた者が、最後に神と小羊の御座の周囲に立つ時、その受ける報賞は実に豊かなものである。かつてヨハネは、死ぬべき肉体でありながら神の栄光に接した時、それに耐えられずに死んだ者のようになって倒れたが、やがて神の子らが不死を着る日、彼らは、2.「そのまことの御姿を見る」に違いないのである。その時に彼らは御座の前に立ち、愛する子として迎えらるのである。すでに彼らの罪はことごとく取り去られ、咎はことごとく除かれていた。今や彼らは神の御座の栄光を如実に見るのである。彼らはキリストと苦難を共にしてきた者であり、救いの御計画について彼と共に苦労してきた者であったが、今や彼らは、神の国で魂が救われる喜びを共にする者となり、神に対する讚美は永久に尽きない。

贖われた者の喜び

わが兄弟姉妹よ！ キリストが天の雲に乗って現れる日の準備をするように私は切望する。日毎に世を愛する思いを心から除き、キリストと交わる事の真意を経験的に悟るべきである。キリストが現れ、信仰する者によって彼の崇められる日に、あなたも平安のうちに彼を迎えられるように、審判の日の準備にあたるべきである。その日、贖われた者たちは、父なる神とその御子の栄光のうちに輝くのである。その時、天使たちは黄金の琴を奏でつつ、王なるイエスとその勝利の記念である小羊の血によって洗い清められた聖徒たちを歓迎するのである。凱歌は諸々の天にまで響き渡る。キリストは勝利者として、彼によって贖いにあずかる者-彼自身の苦難と犠牲の奉仕の徒労でなかった事の証人を引き連れて、天の宮廷に入られる。

主イエスの復活と昇天とは、聖徒たちが必ず死と陰府よみとに勝

利できる事の堅固な証拠でもあり、その品性の衣を小羊の血によって洗い清める者のために、天の門が開いている事の保証である。イエスは人類の代表者として、父なる神の許に帰られた。そして神は、イエスの姿を反映する者たちを御許に招き、彼らをもキリストの栄光にあずからせて下さるのである。

そこでは地上において旅人および巡礼者だった義人のための住居があり、彼らのまとうべき衣も、栄光の冠も、勝利のシュロの葉も備えられている。これまで私たちを当惑させていた神の摂理も、その時にはすべて明らかになる。その時には今まで理解できなかった事柄も理解できるようになる。また恩恵の奥義も明らかにされる。限りのある私たちの知能では失敗としか思えなかった事も、美しく完全な調和となって現れる。実につらかったと思える人々の経験も、全知全能である神の愛によって与えられたものである事がわかる。すべての事が私たちのために働かれて祝福を与える神の優しい愛であると悟る時、口では言いあらわす事のできない喜びに満たされるのである。

天の雰囲気においては、苦痛という存在が許されない。贖われた者の家には涙もない、葬式もない、悲しみもない。3.「そこに住む者のうちには、『わたしは病気だ』と言う者はなく、そこに住む民はその罪がゆるされる」。豊かなる幸福の川は永久に流れて、尽きる事なくいよいよ広く深くなる。

依然として私たちは悲惨で騒々しい世の中にいるが、願わくば常に熱心に幸福な次の世の事を思いたい。願わくば私たちの信仰がこうした暗雲をつらぬき、世の罪のために死なれた主をひたすら眺めるものとなりたい。彼は信じて従う者のために、楽園の門を開いておられる。また彼らが神の息子や娘となる力を提供して下さっている。現在、私たちを苦しめている苦痛は、キリスト・イエスによって天に召されて祝福を得ようと、目的に向かって進むための教訓なのである。主が間もなく来られる事を念頭に置くことによって奮い立ち、この希望によって私たちは喜び勇むべきである。4.「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない」のである。主人が

来られる時、目を覚まして待っている僕たちは幸福である。

帰って行く群れ

私たちは家を目指して帰って行く者の群れである。その生命を投げうつまでに私たちを愛された主が、すでに私たちのために一つの都市を建設して下さっているのである。その都市である新エルサレムは、私たちにとって休息の場所である。この神の都にはもはや悲しみはない。悲嘆・絶望・失敗のなげきは再び聞えない。悲しみの衣をぬぎ捨て、婚礼の衣を着用すべき日は間近である。私たちの王イエスの戴冠式を目撃するのも間近である。キリストのうちに自分の生命が隠されていた者、地上において信仰のよき戦いをたたかった者はその時、御国において贖い主の栄光をもって輝くのである。

私たちが、永遠の生命の希望の中心である主イエスに出会えるのも、それほど遠いことではない。彼の御前に立つことが許される時、地上において味わった艱難と試練は、もはや大した事ではなくなる。5.「だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけぬ。その確信には大きな報いが伴っているのである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。『もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない』」。上を仰げ、上を仰げ。常にあなたの信仰の向上に努めよ。この信仰を先導として、贖われた者が光り輝く未来を眺めることを許される日まで、狭い道を歩み、ついに神の都の門に入る者となりたい。6.「だから、兄弟たちよ。主の来臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている。あなたがたも、主の来臨が近づいているから、耐え忍びなさい。心を強くしていなさい」。

索引 1.1 コリント 3 : 1 4 2.1 ヨハネ 3 : 2 3.
イザヤ 33 : 2 4 4.ヘブル 10 : 3 7 5.ヘブル 10 : 3
5-3 7 6.ヤコブ 5 : 7, 8

付 録

(註) 付録として本書に収録している『預言の賜物』『御言による試験』の2篇は、R・W・マンソン、D・E・ロビンソンの両牧師によって、1914年の秋に執筆されたものである。

第1章 預言の賜物

最初に人類が創造されてエデンの園に居住していた時、彼らは顔と顔とを合わせて創造主なる神や天使たちと語ることができた。しかし人間に死が臨んだ結果として、驚くべき神の栄光を見る事ができなくなり、その御前に立って生きる事ができないものとなった。

人類が墮落した結果、人は神と直接語る事ができなくなった。それでも慈悲深い天の神は、人類家族との交通を持続して下さった。聖天使の奉仕を通して、神は男女を悪の勢力から擁護し、神の御旨にかなう生涯を送るように道を開かれた。また聖霊を通して、神は人類の心の中で語り、どれほど罪深くて無知な者でも、正しい行為と永遠の生命にいたる道を見いだす事ができるようにして下さいました。

神はまた人類に対して、彼の選ばれた人という器を通して交わる事となった。すなわち、その選ばれた器に対して、幻や夢によって御旨を明らかにされたのである。御心を伝える使者である彼らは、神に属する聖人あるいは預言者と呼ばれ、特に神によって聖別されて、人類に天からの真理を伝える役目を与えられたのである。神は言われる、1.「あなたがたのうちに、もし、預言者があるならば、主なるわたしは幻をもって、これにわた

しを知らせ、また夢をもって、これと語るであろう」

人によって書かれて編纂された聖書は、このようにして崇められた。預言者たちは、その生存していた時代において、神からの使命を伝えた。同時に彼らは、将来の教会に対して霊的な真理を示し、訓戒や警告を与えた。2.「預言者たち（が）……それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのである」

家長時代における預言の賜物

預言の賜物は必ずしも1つの時代に限ったものではない。聖書の記録に照らしても、すでに早くからその啓示を見るのである。アダムから7代目にあたるエノクは預言者だった。3.彼は預言的な幻によって、はるか遠い未来において主が現れ、不信心なものに対して最後の審判を執行される光景を見た。

また神は幻を通してアブラハム、イサク、ヤコブに現れ、彼らの子孫が祝福を受けることを預言された。そして次々に彼らと新たな契約を結ばれた。4.彼らは義人の最後の報賞と、神の造られた光り輝く天の都を待望していた。

またエジプトの奴隷だったイスラエル民族を導き出し、彼らをカナンの地に導く使命を負わされて、神によって選ばれたモーセは偉大なる預言者だった。彼はメシヤの出現を預言して、5.「あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない」と語った。さらに神は多くの啓示をこの忠実な僕に与えられた。神の栄光がすべて彼に現されたわけではなかったが、それでも聖書には神が、6.「顔を合わせて」語られたとまで記されている。

イスラエル民族がカナンに定着した後、彼らは周囲の偶像を

拝む国民の影響を受け、真の神から離れて太陽・月・星を拝むだけではなく、金・銀・木・石などによって造られた偶像を拝むようになった。そのために、せつかく彼らを幸福にするために与えられた戒めを犯すようになった。慈愛に富んでおられる神は、選民イスラエルが彼らの創造主、恩恵を施すものから離れて滅亡の道に踏み入って行く様子を眺めて心を痛められた。

こうした全般的な背教においても、依然としてエホバに忠誠を尽くして心を動かされない者がいた。7.彼らの中から神は預言者を選び、民に向かって悔改めを促し、彼らが悪しき道を離れず、それに執着するならば、必ず呪いを受けるべきことを警告された。

イスラエルの数ある預言者の中で、その主なものをあげれば、サムエル、エリヤ、エリシャ、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルである。彼らは民に向かって、その悪しき道から離れるように厳しく警告し、彼らがそれに聞き従うならば、神は彼らに憐れみを施し、祝福を与えてその罪をいやされることを強調した。これらの預言者が書き記したものの中には、特に今日の私たちが生存する時代に当てはまるものがある。彼らは、8.「終りの日に…起る」事、9.「終りの時」に起こる事件について記した。

キリストの初臨時代における預言の賜物

旧約聖書の最後の預言者はマラキである。それからキリスト初臨までの形式化していく時代においては、預言の賜物が啓示されたという何の聖書的記録もないが、いよいよメシヤの出現においては、そのための道を準備すべき使命を持った預言者が存在していた事がうかがわれる。バプテスマのヨハネの父であるザカリヤは、10.「聖霊に満たされ、預言して言った」とある。正しく信仰深いシメオンも、11.「イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた」のであって、聖霊に導かれて神殿に行き、イエ

スの事を、12.「異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」と預言した。女預言者のアンナも、13.「この幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた」とある。またイスラエルの民に向かって、14.「世の罪を取り除く神の小羊」の到来を宣言する、神の選ばれた器であるバプテスマのヨハネほどの偉大な預言者は、後にも前にもないのである。

使徒時代における預言の賜物

聖霊の降下をもって区別されるクリスチャン時代の開始にあたって、明らかな聖霊の降下があり、様々な霊的賜物の啓示があった。特にその中でも明らかなものは預言の賜物である。使徒行伝を読む時、ペテロやステパノが聖霊に満たされて語った事、その他に初代教会において、こうした例の著しかった事がわかる。またピリポの4人の娘は、15.「いずれも処女であって、預言をしていた」との記録を見る。その他にアガポスと呼ばれる預言者もいた。

16.使徒パウロは、光り輝く天上の幻に接した。彼は1コリント12章において、教会に与えられる聖霊の賜物は、ある時代のみに限られるべきものではなく、17.「わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るため」に与えられるべきものであると語っている。彼はまた、18.「神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に預言者、第三に教師とし、次に力あるわざを行う者、次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者をおかれた」と語っている。

また十二使徒の中で最も長生きしたヨハネは預言者だった。彼が記した聖書の最後の書には、彼がパトモス島で流刑中に与えられた様々な幻のことを書き記している。これらの幻を記録

するにあたって、彼はまず次のように記した。19.「イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐにも起るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え、そして、キリストが、御使をつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである」

背教時代における預言の賜物の喪失

聖書は明白に一大背教が生じる事を預言していた。使徒たちの生存した時代において、すでに教会内にいる偽りの兄弟たちによって、それが何であるかをあらかじめ示されていたが、さらに『背教』にまで発展し、ついにパウロが啓示を受けてテサロニケ人へ書き送ったような、20.「不法の者……滅びの子」の現れる事があらかじめ述べられていたのである。

こうした預言がどのように成就したかは、歴史的記録の明らかにしている事であり、キリストの使徒のうちで最も長く生きた弟子が死んだ後、キリスト教会のある者は、キリストによって伝えられた純潔な真理から離れて、徐々に彼らは世俗と結びつき、異教の習慣を受け入れるようになった。

年月の経つにつれ、教会に加わる者がいよいよ多くなり、一般からも歓迎されるようになって、聖書の教える事を厳格に遵守する者が次第に少なくなった。ついに5～6世紀になると、クリスチャンと自称する大多数の者が、キリストの教えとは実際に一致しない生活を送るようになった。それから数世紀にわたって、背信的なキリスト教が広まった。その結果として真理は破壊され、見失われ、無知や迷信が蔓延するようになった。

この十数世紀にわたる背信期間を、歴史では『暗黒時代』と呼んでいる。この期間において、聖書の根本的な教えに対する、数々の改変や除外が行われた。こうした情勢のもとに、まるでキリスト初臨前の数世紀間と同様に、預言の賜物が一向に表れなかった事は、決して不思議ではないのである。

終末時代における預言の賜物の回復

聖書では一方で恐るべき背教の発生について預言・警告すると共に、キリスト再臨前に、多くの者が誤謬と迷信の闇から解放される事が示されている。地は再び神の栄光で輝くのである。聖書の純潔な真理が光を照らすのである。天来の光を受けるこの終末時代に、預言の賜物は再び真の教会に示されるのである。21.「神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう」

また預言者ヨハネも、22.「神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者」が『最後の教会』『残りの教会』にある事を明言している。そしてヨハネはその他にも『イエスのあかし』とは何を意味するものであるかを定義づけている。感激のあまりにヨハネが天使を拝もうとした時、幻の中で彼に現れた天使は語った。

23.「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である」

また、これと同様な場合において、この天使は語った。

24.「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たち……と、同じ僕仲間である」

これらの聖句によって示されている事柄は同じである。一方ではヨハネの『兄弟たち』は『イエスのあかし』を持っている者であると表されているが、もう一方ではこれらの『兄弟たち』は『預言者たち』であると言われているのである。

つまりイエスのあかしを持っている者は、この預言者たちなのである。そしてヨハネに現れた天使とは、あらゆる預言者に使命を伝達している特別の使者である事がわかる。25.疑いもなくそれは天使ガブリエルで、かつてダニエルに現れたのと同じ

の天使なのである。この天使ガブリエルはヨハネに向かって、26.「イエスのあかしは、すなわち預言者の霊である」と明言したのである。

この『イエスのあかし』という聖書上の表現と、黙示12：17にある「女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者」という記述とを対照させる時、キリストの再臨前における真の教会は、神の戒めを守るとともに、預言の霊を持っている者であるという事実を結論づける事ができる。

聖書の預言一様な事件と時のしるしに関する一の目まぐるしい成就是、この世界がいよいよ地上歴史の最終局面に入ったことを明らかにし、今や私たちが終末に生存する事実を確信させるものである。したがって今日に神の戒めを守り、イエスのあかし、すなわち預言の霊を持っているクリスチャンの一人の者が存在すべき事は疑う余地がないのである。それならば私たちは、どこで彼らを見いだす事ができるだろうか？

索引 1.民数12：6 2.1ペテロ1：10-12 3.ユダ1：14,15参照 4.ヘブル11：10参照 5.申命18：15 6.申命34：10 7.歴下36：15参照 8.イザヤ2：2 9.ダニエル12：4 10.ルカ1：67 11.ルカ2：25 12.ルカ2：31,32 13.ルカ2：38 14.ヨハネ1：29 15.使徒21：9,10 16.2コリント12：1-7参照 17.エペソ4：13 18.1コリント12：28 19.黙示1：1,2 20.2テサロニケ2：1-7 21.使徒2：17,18/ヨエル2：28,29参照 22.黙示12：17 23.黙示19：10 24.黙示22：9 25.ダニエル8：16/9：21参照 26.黙示19：10

第2章 御言による試験

しばしば狂信的な人々が、神からの啓示を受けたという欺瞞的な発言をするために、思慮ある人々は、天来の啓示を受けたと主張する者に対して疑いを持ち、むしろこれを否定する傾向を示した。しかし真理の探求者は、一方で偽預言者や偽教師の欺瞞に対して警戒するとともに、一方では真実を認める事を惜しんではならない。この点において聖書にはどう記されているか？ 1.「預言を軽んじてはならない。すべてのものを識別して、良いものを守り……なさい」

このような戒めに従い、クリスチャンは現に進行しつつある再臨運動に対して、神がこれを導いて今日に至らせている証拠や、この運動と関連して預言の霊がどのように示されたかについて、詳細に考察・研究する必要がある。預言の賜物を通して示された聖霊の働きを否定する事は、実に危険である。その一方で、2.「にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである」と警戒されている。しかもこれを試験する方法について、3.「その実によって彼らを見わけるであろう」と記されている。

しばしば人は、4.「茨からぶどうを、あざみからいちじくを」取ろうとするように、卑劣な欺瞞者から聖なる力と純潔を求めようとする愚かな行為をするが、5.「すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。……このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである」

結婚後にE・G・ホワイトとして知られるエレン・G・ハーモンは、おもに米国において70年、ヨーロッパおよびオーストラリアにおいて10年の月日を御事業のために費やした。この約80年にわたる長期間において、しばしば神からの啓示を受け、彼女はこれらの啓示が天からの賜物であることを堅く信じるとともに、教会に対する戒めとして、これを忠実に書き記したのである。彼女の数多くの著述は次々と刊行され、今日で

は全世界に配布されているのである。何千何万の者が御言によって地上歴史の最終時代に生存するものである事を自覚するとともに、ホワイト夫人が神から教会に対して与えられた、預言の霊を通して語られた器である事を信じるのである。

ホワイト夫人は常に彼女の著書や説教などを、聖書の中に示されている神の御言という定義によって確かめる事を希望した。この点について彼女はこう記している。6.「全てのあかしはそのあかしが結ぶ実によって量られるべきである。果たして彼らの説いている精神はどのようなものであるか？ その感化は？…。神がそれらのあかしを通して教会に対する戒めを与え、その悪しき行為を譴責し、信仰を励ますか、それとも全然そうではないかである。要するに神からのものであるか否かである。決して神は悪魔と協力して行動されないのである。私の書き記した事……それは神からのものか、それとも悪魔からのものかのいずれかである。半分だけというような事は全くあり得ないのである。

主は預言の霊を通して自らを示された。過去・現在・未来に属する事が私に示された。いまだ一度も見事のない者の顔が示され、しかも数年後にその当人に出会う時、示されたのはその人だった事を悟る場合がしばしばあった。先に私の心に示された事柄について、再びそれが明らかにされ、眠りから目覚める事があった。そして深夜にこれを書き記し、その手紙が大陸を横断し、際どい時に到着し、御事業を大災難から免れさせる事がしばしばあった。多くの年月の間、私はこうした事に従ってきた。また時には、私の考えが及ばない事柄について、ある悪行を譴責・懲戒するために、抵抗しがたい力に動かされる場合もあった。この事実は……果たして上からのものであろうか、それとも地からのものであろうか？……心から真理を知ることを熱望する者にとって、必ず信じるに十分な証拠を見いだす事ができるはずである」

イエス・キリスト、すなわち神の御子の受肉は、7.「あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである」と言わ

れるように、福音の一大テーマである。8.「キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、そしてあなたがたは、キリストにあって、それに満たされているのである」。この重要な真理を認めるか否かは、預言の霊を受けたと公言する者の真偽を確かめるために、神の指定される試験法の1つである。

使徒ヨハネはこのように記している。9.「すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである。あなたがたは、こうして神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない」

にせ預言者は決してキリストを高めることをしない。むしろ彼らは人々を自分自身に引きつけようとするのである。彼らは、10.「いろいろと曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者」である。彼らはそのために相手の人々の心にある肉の思いを喜ばせる態度に出て、11.「彼らは先見者にむかって『見るな』と言い、預言者にむかっては『……耳に聞きよいことを語れ』と教えるのである。したがって、これらのいわゆる預言者・教師たちは、12.「世から出たものである。だから、彼らは世のことを語り、世も彼らの言うことを聞くのである」

しかしホワイト夫人の教えることを点検する時、キリストこそ罪人を救う唯一の救い主であることが強調されている。キリスト以外には、13.「わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていない」のである。聖職にある兄弟たちに与えられた、彼女の次の訓戒によっても、彼女がどれほどその事を自ら実践していたかが分かるのである。

14.「十字架に釘づけられたキリスト、復活されたキリスト、昇天されたキリスト、および再臨なさるべきキリストは、教役者の性質を温和にして下さり、喜びに満ちし、愛と熱意をもつ

てこれらの真理を人に紹介なさいます。そうすると教役者は一向に目立たなくなり、イエスが明らかに表れます。人に教える方々よ、イエスを高く掲げなさい。説教や歌や祈祷で、主を高めなさい。全力を傾けて滅んでゆく世人一何の目的もなく、五里霧中にさまよう世人に『神の小羊』を示し、復活された主を紹介し、これに耳を傾けるすべての者に『わたしたちを愛して、わたしたちに代って自らを犠牲にして』下さったキリストに來れと言わなければなりません。すべての説教の中心、すべての歌の題目はみな救に帰着し、祈祷の時もこの事を念頭に置かなければなりません。説教する時、神の知恵と力であるキリストに対して、何物をも補う必要はなく、生命の言葉をしっかりと握り、罪を悔いる人の希望や、信者の強い味方としてイエスを紹介しなさい。心配や困難の中にいる人々に平和の道を教え、救い主の恩恵と完全とを示さなければなりません」

その言う事が律法と預言者に一致していなければ…

いつの時代においても義人に敵対する者は、人々にエホバの律法の要求を無視させようとして扇動してきた。そこで神は預言者を通して、神の律法は永久不変のものである事を人々に悟らせるようにして下さった。かつての民について、聖書には次のように記されている。15.「主はすべての預言者、すべての先見者によってイスラエルとユダを戒め、『翻って、あなたがたの悪い道を離れ、わたしがあなたがたの先祖たちに命じ、またわたしのしもべである預言者たちによってあなたがたに伝えたすべての律法のとおり、わたしの戒めと定めとを守れ』と仰せられた」

今日も神の律法の約束を廃棄しようとする傾向が一般に蔓延している。これに対してホワイト夫人は、はばかり事なく断固として神の律法の厳肅さに、人間の良心が打たれる事に力を尽くしている。神の律法が不変である事、絶対にこれに服従する

必要がある事、キリストの力によって第四条を含めた律法のあらゆる点に対して服従すべき事が、彼女の著書や講演の中に、いずれも強調されている。また律法と福音との関係について、彼女は次のように述べている。

16.「キリストの生涯の中に律法の原則が明示されている。聖霊が人の心に触れ、罪人が彼を義とするキリストの義と、彼を清めるキリストの血の必要を痛感するためには、律法は依然として私たちの神によって義とされるために、私たちをキリストに導くものである。17.『主のおきては完全であって、魂を生きかえらせ…る』

『天地が滅んだとしても、律法の一点一画も成し遂げられずに滅びる事はない』。天に輝く太陽、私たちが足で踏みつける大地は、神の律法が永久に不変である事を証明するものである。もしもそれらが消え去る時が来ても、神の律法は永久に堅く立つのである。18.『律法の一画が落ちるよりは、天地の滅びる方が、もっとたやすい』。イエスを神の小羊として示す、旧約の儀式が廃止されたにしても、十戒の各条は、神の御座が永久不変であるように、不変のものである」

聖書を崇める

またホワイト夫人の著書を通じて見られる顕著な特徴の1つは、常に聖書があらゆる霊的な真理の源として紹介されている事である。著書の各所に聖句が引用されているが、彼女は決してこれにいかがわしい解釈をつけていない。しばしば誤解される事ではあるが、決してセブンスデー・アドベンチストにとって彼女の著述が聖書を補うものとか、聖書の代わりに研究すべきもののように考えられていない。この点は彼女自身も次のように書き記している。

「神の御言は無知な者の目を開くのに十分である。聖書の真理を知ろうとして熱望する者にとって、それは必ず理解できる

ものである。しかし自ら聖書を研究すると称する者の中に、明らかに聖書の教えとは全く反対の解釈をする者がいる。そこで人々に口実を与えるような事をなくすため、またはもう一度御言―彼らがそれに服従することをおろそかにしてきた―に立ち帰らせるために、神は明らかなあかしを彼らに与えられたのであった。したがって証は御言を軽んじるものではなく、むしろそれを崇めて人の心を引きつけ、真理の純潔で美しい事を、すべての者に印象づけるためである」

「私たちの標語は『ただ律法と証とを求めなさい。彼らの言う事がこれに一致しないならば、光はない』である。私たちはきわめて貴重な真理に溢れる聖書を持っている。それには知識のアルバからオメガ、すなわち始めから終わりまでがある。本来聖書は神の靈感によって与えられたもので、『人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人があらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になる』ためである。だから聖書をあなた方の大教科書としなさい」

彼女はまた、聖職にある兄弟たちに対して、次のように書き送った。19.「キリストが述べられないような理論を語ってはならない。こうしたものには何の聖書的根拠もない。私たちは人々に向かって述べるべき厳粛かつ偉大な真理を持っている者である。『このように記されている』という御言を、すべての者の心に徹底させなければならない。どうか私たちは、御言を道案内としたいものである。常に『このように記されている』という御言を求めたいものである。人間的な方法はもはやたくさんである。世俗の科学だけで訓練された頭脳は、神の事物を理解することはできない。しかし、その同じ頭脳も悔改めを経験して清められるならば、御言においてのみ神の力を見いだすに違いない」

預言の成就

真の神とあらゆる偽りの神々とは、何によって区別されるかと言えば、未来と過去とに関わる事柄を人々に示せる事によってである。神は預言者イザヤを通して、異教徒によって拝まれる神々に対して挑戦を発しておられる。20.「起るべき事をわれわれに告げよ。さきの事どもの何であるかを告げよ。われわれはよく考えて、その結末を知ろう。あるいはきたるべき事をわれわれに聞かせよ。この後きたるべき事をわれわれに告げよ。われわれはあなたがたが神であることを知るであろう」。これらの偽りの神々にとって、それは到底できない事なので、彼らに対して神は、21.「見よ、あなたがたは無きものである。あなたがたのわざはむなししい。あなたがたを選ぶ者は憎むべき者である」と断言された。

彼が果たして神から遣わされた真の預言者であるか否かを試験する方法は、その預言した事が成就したか否かを調べる事である。かつてのイスラエル人に対して、神はモーセを通して御自身が偉大な預言者である事を布告された。

22.「あなたは心のうちに『われわれは、その言葉が主の言われたものでないと、どうして知り得ようか』と言うであろう。もし預言者があって、主の名によって語っても、その言葉が成就せず、またその事が起らない時は、それは主が語られた言葉ではなく、その預言者がほしいままに語ったのである。その預言者を恐れるに及ばない」

ホワイト夫人に預言する力が与えられた場合のしばしばあった事を、事例で挙げる事ができる。彼女はしばしばその幻の中で、未だに見たこともない人物について示された。後の旅行中にその人物と面会し、彼らに伝えるべき幻において示された使命を伝達する事がしばしばあった。しかもその使命と言うのは、彼女が他の人々によって知らされた事のない、彼らの行動や動機に関するものだった。

開拓当時において安息日の真理の宣布をした者は、わずかに

彼女の夫とジョセフ・ベーツ長老のみだった時代に、この運動が将来、大きな発展をすべき事が彼女に啓示された。しかも当時、教会の勢いは実に小さく、彼らはわずかな開拓者に過ぎなかった。1848年11月1日に、マサチューセッツ州ドーチェスターにおいて開かれた集会の中で、ホワイト夫人は、この使命運動がまるで昇ってゆく朝日のように次第にその輝きを増して、ついに全世界を照らすまでの様子が示された。

この幻から出た後、彼女は夫に言った。主は彼に印刷・出版を開始すべき事を命じられている。最初は小さな新聞の形式で始める事、印刷物によって真理を宣布するこの事業は、次第に発展して行き、ついには地上をまるで光の流れで覆いつくすまでに至ると。人間的な見地から見る時、それは実に大胆な発言だった。当時の信者と言えば、極めてわずかであり、いずれも世俗の富とは縁のない者だった。また彼らの提唱する事も、一般受けのよいものではなかった。とはいえ何でもできない事のない神は、驚くほどにこの言葉を成就された。その時以来、年々彼らの発行する真理で満たされた文書は、その配布数において増加し、今日では全世界を通じてわが出版物の売上高は、毎年700万ドルに達するまでに至った。

ホワイト夫人が初期において啓示された幻の中で、彼女は神の民がキリスト再臨前に通過すべき経験について、その概略を順序よく記述している。また欺瞞である心靈術が、今日ほどには宣伝されず、まだニューヨーク州のローチェスターにおける「奇異なノッキング（叩く音）」と呼ばれていた時代に、彼女にはそれが将来どれほど急速に普及し、世界的な一大勢力となるかが示された。彼女はまた、当時の米国各州において、国民が何の除外もなく信教の自由を持っている時代において、日曜休業令のような悪法が強制される日の来る事を預言し、彼女の前もって語るこれらの事柄は、印刷文書となって広く配布された。このような預言が語られて後に事態は変化して、彼女が前もって語った事柄の数々が成就して、セブンスデー・アドベンチストの運動が、最後に勝利すべき事実に関する彼女の預言に対し

て信頼を置くようになり、これらは必ず成就すべきものである事を人々に確信させるに至った。また彼女がこの運動の指導者や同労者に対して、あるいは筆や口でもって語る勧告や訓戒が、この運動の多大な発展に寄与している事を認める他はない。

幻の中にいる状態

働きの初期において、しばしばホワイト夫人は、多数の者が列席している場で幻に接した。幻の中で彼女は、自分の周囲の事柄については全く無意識ではあったが、室内をあちこち歩きながら静かに手を動かしつつ、現に彼女が目撃している光景について語った。その時の彼女の力は、異常なものであった。力のある男子が彼女の手や腕を捕まえて、あちこち動かそうとしてもそれは不可能だった。1845年の事だったが、メイン州タップシャムにあるカーテス氏の家において、幻の中にいた彼女は約18ポンドもある大きな家庭用の聖書を、タンスの上から取りあげると頭上よりも高く持ちあげ、右手でページをめくり続けた事があった。次にその目を聖書よりもはるか上に向け、しかも右手で聖句を指し示しつつ、正確に聖書の多くの御言を読んだ。普通の場合ならば、このような重い聖書を持ちあげる事は、彼女の弱い力では到底不可能な事だったのである。しかし幻において超自然的な力が加わると、軽々と片手でそれを高く上げて、半時間以上も持ち続けた。

示された幻の事を述べるにあたって、彼女は常に自分に同伴して説明をするものの事を、「わが同伴の天使」「わが教導者」「わが案内者」と呼んだが、疑いもなくそれは彼女を教導・案内する役目にあたる、ひとりの輝く栄光の天使を指すものであった。

ホワイト夫人は、幻の中でしばしば物を言ったが、息は彼女の口から発せられなかった。1845年6月26日、ニューヨーク州ローチェスターにおいて2名の医師が、彼女の両肺では呼吸が行われているものと考えて、様々な試験をした。ある時

にはロウソクを灯して、ヤケドしない程度でできる限り口の近くにそれを寄せてみた。その時、彼女は大声で語っていたにもかかわらず、少しもロウソクの炎は動かなかった。彼女が幻から出て来る場合の最初の徴候は、深呼吸をする事であった。それから次の呼吸をするまで数秒間かかる。次に十分に息をついてから普通の呼吸に戻った。

こうした身体上の状態は、ダニエル10章に記録されている事、幻の中で預言者ダニエルの経験した事と同じである。彼は自分の力が全く抜けた事、天使のようなものが私に超自然的な力を与えたと記している。23.「『……わたしは全く力を失い、息も止まるばかりです』。人の形をした者は、再びわたしにさわり、わたしを力づけ…た」

目撃者の証言

長年にわたるホワイト長老夫妻の同労者である、ユライヤ・スミス長老は彼女の受けた特別な賜物について、次のように証言している。

「このような啓示に対して様々な試験や調査が行われたが、いずれも彼女の接する幻が純粋なものである事を証明した。それを裏づける内的・外的証拠は決定的なものだった。それは神の御言と全く一致し、その中に少しの矛盾もないのである。誰でも正しい判断力を持つ者であるならば、その時に聖霊の特別な御臨在があった事、特に彼女が幻に接した事実を疑う事ができないのである。彼女が啓示に接した場所にいた者は、いずれもその場の静寂・厳粛・感動的場面に心を打たれ、少しの偽り・狂信的騒ぎの痕跡すらなかった事を証するのである。

「これらの結果は、それがどのような源から発しているかを明らかにしている。それが悪とは反対のものから発したのである事は言うまでもない。これを要約すると次のいくつかの点になる。

1. 道徳的に向上し、純潔にさせる傾向のものである。それはあらゆる不道徳を糾弾・否認するが、その一方ですべての善行に対しては称賛を惜しまない。それは御国に入るまでに私たちが遭遇すべき様々な危険を指摘している。それはまたサタンの策略を摘発し、その罠に陥る事がないように私たちに警告している。またサタンが私たちの内部に潜入させようとする狂信的な人々が、策略を施す余地がないほどに様々な警告が発せられている。それは秘かな罪に反対し、隠蔽されている邪悪を暴露し、偽りの心を抱く者の動機を明らかにしている。また神に対する献身、心の清めに対する熱烈な欲求、主の御旨のためにいっそう励む事を、私たちに促している。

2. 私たちをキリストに導く。聖書においてもそうであるが、これもキリストを人類の唯一の救い主として提示している。キリストの聖い生涯、その経験で模範的な生活、私たちが彼の跡に従う事を拒まないように訴えている。

3. 私たちを聖書に導く。それは聖書を靈感による変更できない神の御言として提示している。この御言こそ私たちの相談相手となるべきものであり、また信仰と行為との規範となるべきものである事を強調している。聖書全巻の各ページを絶えず熱心に研究し、その教えることに精通すべき事、終りの日にこの聖書が私たちを導くものである事を、とても力強く解説している。

4. 多くの者の心に慰めを与える。それは衰えた者を力づけ、力のない者を励まし、意気消沈した者を奮い立たせる。また混乱を秩序ある状態に戻し、曲ったものを真直ぐにし、暗黒の状態に光を投げる。だから誰でも偏見を持たずに、彼女の著書を通じて道徳的高さと純潔を持つ事に対する力強い解説、神と救い主を高める点、あらゆる邪悪に対する譴責、あらゆる聖い事に対する奨励などに接する時、これは決して悪霊につかれた者の言葉ではない事を、明らかに心で感じられるのである。

彼女の業績を顧みて

著述や説教による70年間の各地における活動の後、1915年7月16日、カリフォルニア州セント・リナにほど近い自宅において、彼女はイエスによる長い眠りについた。7月24日、彼女の遺骸はその場所からミシガン州バトルクリークのオーク・ヒルにある墓地に移され、夫のそばに葬られた。当時セブンスデー・アドベンチストの世界総理だったA・G・ダニエルス長老は、彼女が世に残した業績について、告別説教の中で次のように述べた。

「ホワイト夫人の生涯の中で、どの部分が世に最大の価値を残したかなどと述べる事は、賢明な方法ではないかも知れないが、彼女の残した数多くの深遠なる宗教文書こそ、必ず今後も人類に対して最大の奉仕を行うものである事を私は信じて疑わない。彼女の著書を数えれば20冊以上にのぼる。その中には世界各国の言語に訳されているものもある。今や全世界を通じて、彼女の著書の配布数はすでに200万冊以上と集計されているが、年を追うごとにますます広く読まれて行く。

私たちが福音の真理を眺める時、それは私たちの神や人に対する関係となるが、ホワイト夫人の生涯の事業を通して、これらの積極的で建設的な原則の表れを認めなければならない。事実において彼女は、人類の必要そのものに触れ、彼らを一段と高い水準に引き上げているのである。

今や彼女は休息に入った。彼女の声は止み、そのペンは置かれた。しかし彼女の活動的で力ある靈感的生涯から発する偉大なる感化は、今後もますます発揮されるであろう。今やその生命は永遠と結ばれている。しかもそれは神がなされた事である。彼女によって伝えられた使命や成し遂げられた業績は、破壊する事も絶ち滅ぼす事もできない。彼女が残した多くの著書一人間生活のあらゆる方面を取り扱い、家族・都市・国家・民族によって表される社会の改善のために、改革を必要とする点について強調する一は一般社会の改善や個人の人格形成において非

常に力となっている。またその使命も、今日では従来にないほどに歓迎されている。また彼女が心から従事した事業—彼女が神の僕として忠実に指導を怠らなかった事業—も、年毎に発展・前進しつつある。だからこの事業につながっている私たちは、自己の不忠実の結果として働きを怠るような事がないかと恐れる以外には、御事業に対して何の恐れも抱く必要はないのである」。

索引 1.1テサロニケ5：20-22 2.マタイ7：15
3.マタイ7：16 4.マタイ7：16 5.マタイ7：17-20
6.『教会へのあかし』5巻671-672ページ 7.コロサイ1：27
8.コロサイ2：9,10 9.1ヨハネ4：1-3
10.使徒20：30 11.イザヤ30：10 12.1ヨハネ4：5
13.使徒4：12 14.『福音宣伝者』232ページ
15.列下17：13 16.『各時代の希望』308ページ
17.詩篇19：7 18.ルカ16：17 19.『ゴスペル・ウォークス』309-310ページ
20.イザヤ41：22,23 21.イザヤ41：24 22.申命18：21,22
23.ダニエル10：17,18